

テイラー・リード——東西古今の予言に基づいて



最後の鐘

THE LAST BELLS

迷える魂に捧げる慈悲の涙

 THE LIVES
MEDIA®

最後の鐘

(THE LAST BELLS)

迷える魂に捧げる慈悲の涙

著者：記者テイラー・リード (Taylor Reed)。古今東西
の預言に基づき執筆。

Copyright © 2025 THE LIVES MEDIA。すべての権利を
保有します。無断複製を禁じます。

編集部より

神々の涙でしか測れない、時代の痛みというものがあるのでしょうか。世の激動の中、音ではなく、静かなる慈悲の痛みによってのみ伝えられる警告があるのでしょうか。

本書、テイラー・リード著『最後の鐘』は、まさにそのような痛切な問いから生まれました。鋭いジャーナリストであり、探求心旺盛な研究家、そして深い精神世界の探求者でもあるテイラー・リードは、私たちを類まれな旅へと誘います。それは、ある信者が聖母の涙を目撃し、「なぜ御身は泣いておられるのですか？」と自問した、あの神聖な瞬間から始まる内なる探求の旅です。

これは、遠くから分析する学術書でもなければ、未来に何が起こるかを断定するものでもありません。むしろ著者は、私たちを共感の旅へと招きます。現代社会の「病状」を通してその涙の原因を探り、古今東西の預言書に響くその声に耳を傾け、そして最終的に、あらゆる警告、あらゆる前兆が、無限の慈悲から生まれていることに気づく旅です。

著者自身の視点と悟りによって照らされたこの旅は、私
たちを理性の戸惑いから信仰の静寂へと導くでしょう。
それは未来への恐怖を植え付けるためではなく、現在の
選択の中に希望の光を灯すためのものです。

『最後の鐘』は、ただ読むためだけの本ではなく、感じ
るための体験であると、私たちは信じています。それは、
一滴の慈悲の涙のこだまであり、私たち一人ひとりの応
答を待つ良心を呼び覚ます鐘の音なのです。

敬具

編集部



はじめに

(テイラー・リード)

私は預言についての本を書くつもりなど、全くありませんでした。

二十年以上ジャーナリズムの世界に身を置いてきた私は、検証可能な事実と、つなぎ合わせることのできる論理に基づいて真実を追求することに慣れていました。私の世界は、「誰が?」「何を?」「いつ?」「どこで?」、そして最も重要な「なぜ?」という問いを、目に見える証拠に基づいて解き明かす世界でした。記者として、物事をできる限り客観的に捉えようとするのが職業的な習慣です。ですから、私は常に、目で見え、耳で聞こえ、手で触れられるもの——つまり、検証可能なものから始めるのです。

しかしある時、一枚の画像が私の元に届きました。そして私は理解したのです。その画像を心で感じ取るために

は、目や耳で捉えられる表面的なものを超えて、私たちの視野を広げる必要があるのだと……。

それは石に刻まれた神託でもなければ、夜空に輝く荘厳な啓示でもありませんでした。ただ携帯電話に送られてきた一枚の写真、静かでありながら、私がこれまで追いかけてきたどの衝撃的なニュースよりも破壊力のある画像でした。それは白い磁器でできた聖母マリア像の写真でした。そして、その目元からは、一筋の黒ずんだ涙が頬を伝っていたのです。混沌の中で叫びをあげる世界にあって、その静かな涙は、私がこれまで聞いた中で最も大きな音となりました。それは言葉のない問いかけであり、表現のしようのない痛みでした。

なぜ御身は泣いておられるのですか？

その問いが、私の頭から離れませんでした。もはや事実を求めるジャーナリストの問いではなく、母の苦しみを目にする子供の叫びでした。その問いは、私に持てるものの全て——ジャーナリストの頭脳、研究者の慎重さ、そして信者としての絶え間ない探求心——を使い、これまで考えもしなかった旅を始めることを余儀なくさせました。それは、聖なる一滴の涙の原因を探る旅です。

皆様、この本は、まさにその旅の記録なのです。

この旅は、現代社会への痛烈な観察から始まり、古今東西に伝わる何千年もの預言の体系的な研究へと私たちを導き、そして最終的に、私たち自身の時代の良心と選択に向き合わせるものとなるでしょう。

これは、預言を証明したり反証したりするためだけの、無味乾燥な学術研究ではありません。そうではなく、これは、道に迷った世界の中での神々の憂いを理解しようとする、私の試みなのです。

バラバラに見えるピースを繋ぎ合わせようと苦闘する中で、私はあることに気づきました。それは、法輪大法の経典に夢中になって読むうちに悟った「真・善・忍」という原理こそが、この私の「旅」をより明確に照らす羅針盤となったということです。

読者の皆様にも、この探求の旅に、傍観者としてではなく、共に耳を傾ける同行者として加わっていただきたいと思います。なぜなら、あの涙は私一人のために流されたものではないと信じているからです。それは、私たち全てのために流されたのです。そして、その涙が鳴らす「鐘の音」は、おそらく終末を告げるためではなく、手

遅れになる前に、私たちが目覚め、立ち返るよう招くためのものなのでしょう。

もしかしたら、このページのどこかで、あなたも自分自身のためだけに鳴り響く鐘の音を耳にするかもしれません。

* * *

第一章：なぜ、神は泣かねば ならないのか？

私は、とあるサッカースタジアムで開かれた大規模なロックフェスティバルの、記者たちにとって都合のいい取材エリアに立っていた…

本当は、こんな所にいるべきではなかった…

前日の夕方、私が提携している新聞社の上司、ジョンからのメールは短く、私に選択の余地を与えなかった。

「テイラー、明日の夜、市立スタジアムで大きなフェスがある。今流行りのうるさいロックバンドの一つだ。君に行ってほしい。『爆発的な』視点、『ある世代の声』を拾ってきてくれ。何をすべきか、分かっているな」

そして、私はここにいる。

空気は人の熱気、照明機材から立ち上る焦げたプラスチックの匂い、タバコの煙、漂うマリファナの匂い、むせ返るような香水、そしてステージの床から発せられる金属の熱で温められた汗の匂いで、ねっとり重かった。レーザー光線が剣の刃のように行き交い、人工的なスモークで満たされた空を切り裂く。風は、もはや叫び声以外何も吹き飛ばせないほど弱々しい。

スタジアムはもはやスタジアムではなかった。それは巨大な生物の大きく開かれた口であり、ドラムのビート、足踏み、熱狂的なヘッドバンキングを一つ残らず飲み込んでいた。ステージ背後の巨大な LED スクリーンには、異教的なシンボルや目まぐるしい映像が交互に映し出さ

れていた。燃えるような赤い目、陰陽のシンボルで描かれた髑髏、ビデオゲームのように編集された戦争のシーン。誰も注意深くは見ない。誰も気につけない。人々はただ叫び、自分だけの世界に沈み込んでいた。

紫に染めた髪に網のドレスを着た少女が、携帯電話で友達を撮影している。友達が気絶したふりをしている間、彼女はフィルターを調整し、口の中では動画のカット割りをぶつぶつと考えていた。彼女たちは冗談でやっているのではない。これも儀式の一部なのだ。「息を切らしている時に投稿するのが一番バズりやすいの」――彼女がそう真剣な声で言うのが聞こえた。

別の隅では、二人の若者が口論を始めた――原因は、一人がもう一人の視界を遮ったという、ただそれだけのことだった。時間はかからなかった。一発のパンチが繰り出され、エナジードリンクの缶が三人目の顔面に直撃した。誰も止めに入らない。周りの人々は、まるで誰かが合図でも出したかのように、一斉に携帯電話を掲げた。一人の少女が声を上げた。

「このシーン、最高じゃん！ キャプションは、『生存者の目に映る地獄！』にしようっと」

私は撮影しなかった。写真も撮らなかった。レコーダーはジャケットのポケットで録音し続けていた。だが、もう気にも留めなかった。私が目にしているものは…もはやニュース記事で描写できるようなものではなかった。

* * *

ステージ上では、技術スタッフが床の照明を落とし始めた。音は電子ドラムから、洞窟の中に響く銅鑼のような、長く低い振動音へと徐々に変わっていく。一瞬の静寂。そして、眩い光が放たれた。

メインバンドが登場する。

リードボーカルは、鎖と金属の鱗で覆われた灰色の長いマントをまとい、濡れた床を裸足で歩いていた。彼の髪はジェルで逆立てられ、悪魔の鱗のように三色に染められ、こめかみからは首筋にかけて赤い刺青の線が走っていた。彼は挨拶も、自己紹介もしない。ただマイクを上げ…そして、言葉にならない長い叫び声を上げた。

その叫びは、金属が石に擦りつけられるような耳障りな音で、三十秒近く続いた。

パフォーマンスが始まった――それはダンスではなかった。痙攣し、体を折り曲げ、背骨をねじり、光の点滅に合わせて咆哮する動きだった。他のメンバーは素手でドラムを叩き、まるで召喚の儀式のように、張り詰めた皮を力強く打ち鳴らした。背後のスクリーンには、炎に包まれる都市の映像が映し出され、点滅する数字、コマンドライン、そして螺旋状に開く門が交互に現れた。

歌詞の意味は不明瞭だった。ただ、「門を開け」「解放せよ」「破壊せよ」「血」といった言葉が、催眠術のように繰り返される。

私は周りを見渡した。群衆が揺れ始めた。彼らはもはや観客ではなかった。彼らはステージの一部だった。掲げられた腕、点滅する光の中でくねる体、虚空を見つめる白目をむいた目。

誰も自分が誰であるかを覚えていない。誰も隣に誰が立っているかを気にしていない。

私は腰のバッグのストラップを固く握りしめた。腹の底から冷たいものが、静かな予感のようにせり上がってきた。私が怖がりだからではない。自分が、名もなき儀式の真っ只中に立っていると分かっていたからだ。

* * *

私は再び周りに目をやった。

点滅する光の下の人々の顔は、もはや人間の面影を失っているように見えた。光が瞬くたびに、異なる表情がよぎる。見開かれた目、大きく開かれた口、突き出された舌、トランス状態にあるかのように高く掲げられた手。反キリスト教的なシンボル、邪眼の絵、奇妙な記号が、T シャツや旗、刺青に散らばっていた――あまりに多くて、何がファッションで何が意図的なのか見分けがつかないほどだった。

私はごくりと唾を飲んだ。

そして、ふと自分の娘のことを思い出した。

数日前、リリーが私に少しお小遣いをねだった。クラス
の友達に「超ホットな」音楽祭に誘われたと言う。早め
に予約すればチケットが半額になる、と。私はその時、
締め切りに追われていて、詳しく聞かずに、いつものよ
うに送金してしまった。

今、この濃密な混沌の中で、私はぞっとするような感覚に襲われた。彼女をどこかで見たからではない。彼女がここにいるかどうか、確信が持てなかったからだ。

あの子はまだ十六歳だ。もし彼女がこの群衆の中にいたら、もし彼女が叫び、体を揺らし、もし彼女が「全てを破壊せよ――最後の門を開け」といった歌詞を聴いていたら…どうなる？

* * *

私はゆっくりと息をし、再びステージに目を向けた。

リードボーカルが新しいパフォーマンスを始めた。彼は歌わない。ただ、呪文を唱えるように、一語一語を強調しながら朗読する。

「最後の門を開けよ。

古き記憶を消し去れ。

過去の我を殺せ。

新しき炎を迎えよ」

一句一句読み上げるたびに、群衆から割れんばかりの叫びが返ってきた。照明は即座に血のような暗い赤に変わり、下から斜めに彼を照らし、その顔をまるで生きながらにして処刑される者のように見せた。

後ろの二人のダンサーがステージの床を這い始め、手と頭を濡れたコンクリートの床につけ、そして突然、感電したかのように首を後ろに反らせた。その光景は、まるで生贄の儀式のようだった。スタジアムの空気は凝縮し、酸素を吸い取られたかのように重くなった。

* * *

私は一歩、後ずさった。

息が詰まる。

そして私は囁いた。

「主よ、どうか御身の子らをご覧ください。どうか、私のリリーと、彼女の世代をご覧ください。あなた様から離れたことが彼らの魂に残した空虚さを、私ははっきりと見ております。そして彼らは、この無意味な叫び声で

その空虚さを埋めようとしているのです。あなた様は、
今もずっと見守っておられるのでしょうか？」

私は返事を期待していなかった。

ただ何か——何でもいい——、これを私一人だけが感じ
ているのではないと、知らせてくれるものが欲しかった。

* * *

まさにその時、私の携帯が震えた。

友人から WhatsApp のメッセージが届いた。

そこには一枚の写真と、元の記事へのリンク、そしてた
った一言のメッセージがあった。

「テイラー、この写真、信じられるか見てみてくれない
か？！」

* * *

聖母マリア像。白い磁器でできている。小さな礼拝堂に
置かれ、電灯の光にはっきりと照らされていた。

そして、その像の右の目尻から…

一筋の暗い赤色の滴が、流れ落ちていた…

その時、私は感じた。この写真が偶然私の元に来たのではないと。

* * *

私はその写真に見入った。音楽も、群衆も忘れた。その瞬間、私の周りの世界が…完全に静まり返ったように感じた。

誰も呼ばない。誰も注意を促さない。でも私は、もう一分たりともこの場所にいられないと分かっていた。

* * *

私がまだ携帯電話の写真に見入っていると、突然雨が降り出した。

何の予兆もなかった。風も、雷鳴もない。ただ、重い雨粒の連なりが突然ステージの屋根を打ち、観客席に流れ

込んだ。まるで誰かが水を満たした空を引き裂いたかのようだった。

人の海は最初、顔を上げた――数秒間、呆然とし――そして、最後の衣を脱ぎ捨てたかのように歓声を上げた。彼らはさらに大声で叫び、さらに狂ったように踊り、濡れたコンクリートの床に手を叩きつけた。雨は、プログラムの冒頭から溜まっていた三十五度を超える焼けるような暑さの中での、集団的な渴きを癒す儀式のようだった。濡れそぼった肌という肌が、まるで生き返ったかのようだ。シャツは肌に張り付き、髪は野生の木の根のように広がる。誰も逃げない。誰も雨宿りする場所を探さない。

レーザー光線が雨の幕を通して絶え間なく明滅し、空を横切る刀の光のような幻覚を生み出す。

リードボーカルは両手を広げ、頭を後ろに反らし、雨粒がまっすぐ顔に当たるに任せた。彼はマイクに向かって叫んだ。

「我々は清められた！これが再生の炎だ！天は要らぬ！神は要らぬ！」

群衆は催眠術にかかったように、それに合わせて叫んだ。

「要らぬ！」

「要らぬ！」

「要らぬ！」

群衆が、ボーカルが何を言ったのか意識しているのか、それともただ惰性で叫んでいるだけなのか、私には分からなかった。

私は一歩、後ずさった。全身が冷たく濡れていた。一つは雨のせい。もう一つは…その時、心に湧き上がってきたものを、名付けることができなかったから…

私は携帯電話を固く握りしめた。もう一度、像を見つめた。

そして携帯を閉じ、背を向けた。

躊躇はなかった。

* * *

私は、裏の技術者用の出入り口からスタジアムを出た。そこでは数人の警備員が、パチパチと音を立てるトタン屋根の下でタバコを吸っていた。誰も私にどこへ行くのかと尋ねない。誰も私を見ない。おそらく、雨と音楽の中で、私は名もなき影に過ぎなかったのだろう。

大通りに出ると、客を乗せようと停車していたタクシーを呼び止めた。

ドアを閉めた時、自分が少し震えていることに気づいた。雨はまだ土砂降りのように降っている。音楽はもう聞こえないが、その余韻がまだ熱に浮かされたような響きとなって、耳の奥で脈打っていた。

私は窓ガラスに頭をもたせかけた。街灯が雨水に滲む。空虚さと満たされたような感覚が入り混じっていた。

* * *

タクシーを発進させる前に、私は濡れた指で携帯電話を取り出し、娘のリリーに電話をかけた。もし万が一、彼女がスタジアムにいるのなら、一緒に連れて帰りたかったからだ。

呼び出し音が長く鳴った。

そして、娘の声が聞こえた。少し気だるそうだ。

「家にいるよ。映画見てる。どうかした、ママ？」

私は息を吐いた。

とても長く…まるで水の底から浮上してきたかのような
った。

「何でもないわ、ただ声が聞きたかっただけ。続きを見て
ていいわよ」

「うん、じゃあママも早く帰って休んでね」

私は微笑んだが、返事はしなかった。

ただ静かに電話を切った。

私はシートに身を預けた。雨はまだ窓の外で降り続いて
いる。街灯の光が水膜を突き抜け、引き裂かれた光の帯
を作っていた。

私はもう一度携帯電話を開いた。

検索バーに打ち込む。

「血の涙を流す聖母マリア像」

「聖母像の涙 本物か偽物か」

「Photoshop を使った宗教的奇跡の詐欺」

Google は大量の結果を返してきた。

- － 「血の涙を流す像の現象：奇跡から詐欺まで」
- － 「教会は未確認だが、信仰は広がり続ける」
- － 「デジタル画像専門家が分析する不自然な痕跡」
- － 「Photoshop か奇跡か？ ネット上で激しい論争」

私は記事の見出しをスクロールしたが、クリックはしなかった。

説得されるのが怖かったからでも、その奇妙な出来事を信じてしまったからでもない。

ただ…あの眼差し——あの像の眼差し——が、まだ私の中にあった。

どんな記事も、それにとって代わることはできなかった。

* * *

私がアパートに着いたのは十時近くだった。雨はまだ屋根に降り続き、その一打一打が重く、止む気配もなく続いている…廊下の明かりが小さな窓から差し込み、部屋の中のものが全て元のままであることは分かった——だが、私自身は違った。

私はバッグをテーブルに置き、急いで濡れた服を着替え、それからベッドの縁にへたり込んだ。

まるで異郷の地から帰ってきたような気分だった。その場所が偽りだったからではない——あまりにリアルで、あまりに剥き出しで、私の中の馴染み深い概念を全て無意味にしてしまうほどだったからだ。

* * *

私はいつものように、惰性で編集部「宿題を提出する」準備をするため、ラップトップを開いた。

エディターが立ち上がり、真っ白な画面が表示された。

私は最初の行をタイプした。

炎のこだま：若者たちは自らの声を見出した

私はいつものように書き続けるつもりだった――滑らかな要約、美しい写真に添えられたいくつかのキャプション、「個人の自由」や「芸術的創造」に関するいくつかの引用。

表面的な部分を拾い上げ、粗い部分を削り取り、明日の朝の読者が飲み込みやすい製品としてパッケージングするつもりだった。

だが、私は手を止めた。

感情のせいではない。

あの眼差しのせいだった。

* * *

私は再び携帯電話を開いた。

聖母マリア像の写真はまだそこにあった。

静かに。説明もなく。裁きもなく。

ただ、右の目尻から一滴の暗い血が、白い磁器の顔を伝っていた。

先ほど、タクシーで帰宅する途中、私は携帯電話でざっと検索した――扇情的な見出し、対立する議論。私はそれらをスクロールしただけだった。どの記事もクリックしなかった。

だが、今回は、もっと深く見たいと思った。

もう一度。正しい方法で。

* * *

私はブラウザを開いた。検索ワードを再び打ち込む。

「血の涙を流す聖母マリア像：本物か偽物か？」

私は一つ一つのリンクをクリックした。

カトリック系のサイトの記事があった――それを奇跡と呼んでいた。

反論を掲げるフォーラムの記事もあった――酸化反応や塩の析出といった証拠を提示していた。

私は一段落ずつ、注意深く読んだ。

そして、コメント欄までスクロールした。

* * *

それぞれの記事の下には、縮小された世界が広がっていた。

－涙を流し、イタリアの小さな礼拝堂で似たような現象を見たと言う人。

－皮肉を言う人：「PR 担当者はいい仕事するね。像に Photoshop で血を流させて、それを信じるなんて！」

－磁器素材における偽の血腫のメカニズムについて語る医者。

ーある母親は、娘がこう尋ねたという話をした。「もし聖母様が泣いているなら、誰が聖母様を悲しませているの？」

私は全てを読んだ。

判断するためではなく。

ただ、それら全てのこだまに耳を傾けるために。

* * *

そして私は、画面の前に座り直した。

エディターに戻る。

私は以前の書き出しを全て削除した。

見出しも、決まった視点もない。

ただ一行、タイプした。

なぜ、像は涙を流すのか？

それから私は思った。「もし、あの瞬間に私に送られてきた写真が単なる偶然ではないのなら、聖母様はあのコンサートの狂乱を目撃して泣いておられるのだろうか？もっと広く言えば、五大陸の至る所で起きている、目に余るような出来事を目撃して泣いておられるのだろうか？！…」

私はしばらくとりとめもなく考え、そして先ほどの見出しをまた消し、こう書いた。

時代の病状。

カーソルが点滅する。

名もなき待機のリズムのように。

私は続きを書かなかった。

* * *

私はラップトップを閉じた。電気を消した。ベッドに入った。

ただ横になり、暗闇に顔を向けた。頭の中にはまだ、歪んだ音楽、激しい光、そしてあの像のイメージが残っていた――静かだが、どんな言葉よりも深い。

私はもう何も考えなかった。

ただ一つの感覚があった――うんざりするような戸惑いと、燃え跡の灰のような軽い悲しみが入り混じった感覚。

私はその状態で眠りに落ちた。逃げるためではない。

一時停止するためだった。

* * *

明日の朝、私は起きるだろう。そして目を開けた時、私は最後まで探求しなければならないと分かっている。

なぜ聖母像は泣いたのか？

そして、本当に何のために？

* * * * *

第二章：時代の病状

第一の視点：創造の魂の崩壊（文化・芸術）

私は、書きかけのまま放置していた分析記事を完成させるためにラップトップを開いた。

古いフォルダの中に、以前書きかけていた下書きがあった。タイトルは「音楽がもはや芸術でなくなった時」。

冒頭に、私はこう書いていた。

「かつて芸術は、魂を照らす松明だった。今やそれは、幻覚と操られた本能を映し出す、ただの凸面鏡に過ぎない」

この一文を初めてタイプした時の感覚を、私はまだ覚えている。それは憤りではなかった。後悔の念だった。

* * *

私は YouTube を開き、アルゴリズムが何かを推薦してくるのを待たなかった。

自らキーワードを打ち込んだ。「2020 年代トップトレンドミュージックビデオ」——今日の視覚文化がどこにあるのか、再確認するような気持ちで。

最初に現れたミュージックビデオは、「世界を席卷している」という若い音楽グループのものだった。しかし、彼らが誰であるかを知る必要はなかった。

再生ボタンを押してわずか数秒で、私の頭の中の分析システムが作動した――それは、呼び出す必要もない職業的なメカニズムのようなものだった。

- メロディーは、神経を刺激し、フック（デジタルコンテンツで即座に注意を引く手法）のたびに興奮と爆発的な感覚を生み出すようにプログラムされている。
- ダンスはシンクロし、滑らかで、カクカクと動き、非人間的なレベルにまで達していて、まるで悪魔の群れが踊っているかのようだ。
- 歌詞は 4～6 語のサイクルで構成され、広告のパターンのように繰り返される。
- 映像はフラッシュし、シーンは断片的で、照明は冷たく、特殊効果は過剰だ。
- 歌手やダンサーたちの髪は、青、赤、紫、黄色と色とりどりで、様々な絵柄のタトゥーを入れ、その衣装はまさに映画に出てくる悪魔の衣装そのものだ。

画面上の人々はもはやアーティストではない。彼らは悪魔の道具だ…

本物の表情はない。静寂の間もない。物語の筋もない。

全ては、感動を伝えるためではなく、中毒にさせるために暗号化された断片に過ぎない。

* * *

私はかつて、この現象を見過ごしていた。気づかなかったからではない。

その背後にあるメカニズムを、あまりにもよく理解していると思っていたからだ。

しかし今回は、向き合わなければならなかった。なぜなら、それはもはや単なる音楽現象ではなく――ある世代全体の人格と感情を形成する、世界的な心理的エコシステムだったからだ。

* * *

二十年以上前の、大学に入ったばかりの頃を思い出す。

その頃、私は「K-POP」という言葉を聞いたこともなかった。しかし、「グローバルな音楽文化」と呼ばれるものが、すでに波を起こし始めていた。

マイケル・ジャクソン・フィーバーが、洪水のように学生寮を席卷したのを、私ははっきりと覚えている。

友人たちは、彼のステージ上の一つ一つの動き、一つ一つのターン、一つ一つの眼差しに夢中だった。ある友人が私に言った。

「分らないの？これは象徴なのよ。偉大なの」

私は尋ねた。「どこが偉大なの？メッセージが、それとも技術が？」

彼女は考えもせずに答えた。「理解する必要はないわ。ただ感じるのよ」

その言葉は、静かな一撃のように、私の心に刻み込まれた。

* * *

私はキリスト教の家庭に生まれた。

教会の音楽の中で育ち、そこではどの曲も一つの祈りだった。

東洋文化に触れ始めた時、私は古琴の調べや、東アジアの田舎から静かに響いてくる民謡の中に、また別の深みを見出した。

その音楽は華やかではない。センセーショナルでもない。

最初の 5 秒で「ワオ！」と声を上げさせるようなものではない。

しかし、静かに耳を傾ければ、それは何かとても深いものに触れる――まるで内なる傷を癒す、清らかな水のよう

* * *

それと比べると、今日の音楽は一つの逆説だ。

華やかであればあるほど、空虚になる。

騒がしければ騒がしいほど、無音になる。

性的であればあるほど、本物の感情を失う。

芸術がさらに多くの素晴らしいものを創造すべきだということを、私は否定しない。しかし、今起こっていることは発展ではない——それは、日増しに悪化していく退化だ。

* * *

私は手帳のメモをめくった。太い下線が引かれた一文。

「最も巧妙な退廃とは、完璧な装いをまとった退廃である」

若いアイドルたちは、ステージ上で「自己解放」について叫んでいる。

しかし彼ら自身が、最も徹底的に検閲された製品なのだ。身長、声、発音の仕方から、テレビで表現することが許される感情に至るまで。

パッケージ製品のように生産されたコーラス隊を見る。

ヴィヴァルディ（18 世紀のイタリア、バロック時代の作曲家）のある協奏曲を思い出す。そこでは、一つ一つの拍の抑揚が、まるで宇宙の心臓の鼓動のようだった。

私は比較する。そして、身震いする。

* * *

私たちは芸術の中にある静寂に耳を傾ける能力を失ってしまった。

かつて音楽は、聖なるものと繋がるための手段だった——今では、気晴らしの道具となっている。

もはや、誰かを啓発するために音楽を書く者はいない。「プラットフォーム上で視聴者を 15 秒引き留める」ための音楽しか残っていない。

私は最後の行をタイプした。

「真の音楽は人を昇華させる。今日の音楽は人を麻痺させる。

そしてその状態で、彼らはもはや、考え、抵抗し、
あるいは…自分が誰であることを思い出す意志すら
持たなくなるだろう」

私はタイプするのをやめた。立ち上がり、静かに一杯の
水を注いだ。

ミュージックビデオの映像が、背後のスクリーンでまだ
乱れ飛んでいる――まるで、私がもはや属していない世
界からの信号を発しているかのよう。

私は仕事机に戻り、手帳を開いた。一年前、太い下線が
引かれた一文。

「芸術がもはや光を伝えない時、それは人類の精
神における黒い影となる」

しかしながら、悲しいことに、それらの現代的なバンド、
典型的なのは韓国のグループだが、彼らは世界の若者た
ちに熱狂的に支持されている。彼らは数々の名誉ある音
楽賞を受賞し、中には国連本部に招かれ、世界の前で表
彰されるグループさえいるのだ！！

* * *

記憶は私を別の領域へといざなった。絵画だ。

ニューヨークで、私はある現代美術の展示室に足を踏み入れたことがある。そこには、数億ドルの価値があるという「傑作」が展示されていた。

巨大なキャンバスに、いくつかの滲んだ色の塊と、まるで子供がクレヨンでいたずら書きしたかのような線が引かれている。

私は言葉を失った。感情もない。深みもない。魂に触れるいかなる感動の波もなかった。

そして、私は解説パネルを読んだ。

「この作品は、現代の秩序の崩壊に直面した芸術家の内なる不安定な状態を反映している」

私は乾いた笑いを浮かべた。おそらく、解説文の方が絵画そのものよりも練られているだろう。

* * *

私はかつて、ラファエロの「アテナイの学堂」に感動したことがある——そこでは哲学、数学、芸術が、神聖な幾何学の協奏曲の中で一つに溶け合っていた。

私はかつて、唐代の仏像の前に何時間も立ち尽くしたことがある。ただ、千年前に刻まれた慈悲深い眼差しから溢れ出る安らぎを感じるために。

それと比べると、今日「最高の芸術」と呼ばれるものは、私を…ぞっとさせる。

冗談で言っているのではない。これらは実際の数字だ。

- ウィレム・デ・クーニングの「インターチェンジド」——抽象的な螺旋の塊——は 3 億ドルで売れた。
- 同作家の「ウーマン III」——ねじれた顔、歪んだ体——は 1 億 3750 万ドルで持ち主を変えた。
- マーク・ロスコの「No. 1 (Red and Blue)」——ただ二つの色の塊が重なっているだけ——は 7510 万ドル。

➤ クリストファー・ウールの「ライオット」——白地に黒で RIOT という四文字が印刷されているだけ——は 2990 万ドル。

もし芸術がインスピレーションを与え、魂を浄化するためのものなら、これらの絵画は正反対のことをしている。

甚だしきに至っては、私はかつてあるブログにこう書いたことがある——そして今でもその考えは変わらない。

「人が一枚の絵を見て美しいと感じる時、それはおそらく、その人の心象風景が、まさにその絵の中にある混沌、歪み、ねじれの状態と一致しているからだろう。

一方、魂の純粋さをまだ保っている者にとっては、文字通り、目がくらみ、めまいがし、吐き気さえ催すだろう」

私はため息をついた…

タイかどこかで、象に筆を持たせて布にめちゃくちゃに描かせ、それを「一点もののアート作品」と呼び、オークションにかけるという話も聞いたことがある。

もっとも、今日のいくつかの「名画家」と比べれば、その象の絵の方がまだ…見やすいかもしれない！

私は草稿に、皮肉な一文を打ち込んだ。

「現代美術界の『飛躍的な』進化の勢いからして、
そう遠くない将来、おそらく…糞の山を描いた絵
が、『反地球論的芸術作品』というレッテルを貼
られ、10 億ドルの値をつけることになるだろう」

大げさだろうか？全く。

ほんの数年前、ある「現代アーティスト」が、熟したバナナを粘着テープで壁に貼り付け、「コメディアン」と名付け、それを 12 万ドルで売ったのだ。

唯一私が面白いと思ったのは——人々がそれを「ポストモダン思想の頂点」と呼んだことだ。私は？私はそれを、魔性が人類の良心に対して行った、最後の嘲笑と呼ぶ。

* * *

私は静かに座っていた。父の昔の言葉を思い出す。

「芸術が道德心のない者の手に渡る時、それはもはや芸術ではなくなる——それは、魂を合法的に破壊するための道具となるのだ」

* * *

私は映画に目を向けた——かつては頂点と見なされていた「総合芸術」の一形式だ。

しかし、日を追うごとに、映画は道德よりもアルゴリズムによって方向づけられるようになっている。

大作映画は、意味のないアクションシーン、派手な特殊効果、不合理な暴力、そして性的な描写を絶えず詰め込んでいる…まるで観客がもはや考える能力を失ってしまったかのようだ。

私は、次のようなコメントを何百と読んできた。

「プロットは要らない、爆発シーンが綺麗ならそれでいい」

「脚本は穴だらけだけど、主演のビジュアルと腹筋が映画全体を救っている」

「深みを求めるな——人は現実逃避のために見る
のであって、哲学のためじゃない」

こうして芸術は自ら脱皮し、精神世界への架け橋から…
中毒性のある娯楽の道具へと成り代わった。

* * *

私は、アイザック・ワッツによって書かれた、クリスマスの季節にはお馴染みの聖歌「もろびとこぞりて (Joy to the World)」を思い出す。

壮大さはない。音響フィルターもない。ただ、善きことを信じる人々の口から響く、素朴な歌声があるだけだ。

その音楽が夜に響く時、私は感じる事ができた。私の魂が支えられていると。

しかし今日、映画館の中で、私はただ圧倒され、疲れ、そして空虚さを感じるだけだ。

* * *

私はスクリーンに戻り、最後の行をタイプした。

「芸術の最も巧妙な崩壊とは、それが人々を光へと導くのではなく、『創造』という名の下に闇へと引きずり込む時である。

そして、その混乱の渦の中で、人の魂は——少しずつ——知らず知らずのうちに蝕まれていくのだ」

私はラップトップを閉じた。仕事部屋で静かに座っていた。

心の中にはまだ、古い問いが残っていた——しかし、その痛みは決して和らぐことはない。

「私たちは何を犠牲にして…これを創造の自由と呼ぶのだろうか？」

* * *

第二の視点：知識人の妥協と知性の衰退（メディア・SNS）

私はコンピュータで一年ほど前に書いた古い記事を開いた。

元の見出しは、「闇に包まれた学校の内部」。

しかし、編集され、公に掲載された後の見出しは、こうなっていた。

「教師が生徒を殴り入院：誰が管理しているのか？」

その時の感情を私は忘れない。怒り。混乱。

私の調査記事は、学校側の沈黙のメカニズム、組織的な隠蔽体質、そして被害者がいかにして社会の片隅に追いやられるかを深く掘り下げたものだった。しかし、その全体——二千語以上——は、編集によって削除された。彼らはいくつかの衝撃的な詳細を残し、少しばかりの世論の憤りを加え、そして一面に掲載した。

* * *

私だけではない。

私はかつて、多くのベテランジャーナリストを尊敬していた――戦地から報道し、隠蔽された事件を暴いてきた人々だ。しかし、年を追うごとに、彼らが変わっていくのを目撃した。

彼らが理想を失ったからではない。理想ではもはや給料が支払われなくなったからだ。

かつて「第四の権力」と呼ばれたジャーナリズムは、今や SNS のアルゴリズムや群衆の感情の後塵を拝している。

昔は、ジャーナリストになるには、道徳、勇気、そして幅広い社会知識が必要だった。

今日では、書き手は TikTok のトレンドを追いかけて、Facebook で「芸術的な」クリックベイトな見出しをつけることさえできればいいのかもしれない。

* * *

私は自分自身を振り返る。

私はかつて、何人かのインターン学生にこう言ったことがある。

「ジャーナリズムは、真実を守るためにある」

しかし、私自身も注文に応じて書かなければならなかったことがある。「18～25 歳の女性読者を増やすため、感情的な要素と論争を加えろ」と。

一度、編集長が私に見出しの案を提示してきた。「歌手 X の元恋人が、あの時の破局について突然口を開く」

私は尋ねた。「教育のテーマと何の関係があるのですか？」

彼は素っ気なく答えた。「政治のニュースなんて誰が読む？まずはこの記事でアクセス数を稼ぐんだ、内容は後で考えればいい」

* * *

私は携帯電話を開き、画面をスワイプする。

TikTok。YouTube ショート。Instagram リール。

それぞれのプラットフォームは、短い動画——15 秒、30 秒、60 秒——の無限のベルトコンベアのようなのだ。ここでは、全てが注意を食い尽くすように設計されている。

私が出席したある学会で、一人の神経科学者がこう言った。

「短いコンテンツの構造は、軽い中毒のように精神を刺激します——しかし、何年も続けると、それは人間の脳を再構築する可能性があります」

最も危険なのは、扇情的な画像ではない。

それよりも危険なのは、注意力の断片化だ。

人々はもはや、千語の長い記事を読むことができない。

三段落にわたる論点を追うことができない。

甚だしきに至っては、今日の記事は一行ごとに「改行」しなければならない。さもないと「ユーザーはスクロールしてしまう」からだ。

* * *

私は手帳に一行書き付けた。

「真実を理解するには十分かかる。

嘘が憤りを引き起こすには五秒しかかからない。

今日のメディアの世界で――何が勝つのだろうか？」

私はかつてこう思っていた。もし独立した思考の火を灯し続けられる場所がまだあるとすれば、それは個人が最も主体的で自由に発言できる SNS だろう、と…

しかし、ある朝、世界中の何百万人もの人々が目を覚まし、異常なことに気づいた。現職のアメリカ合衆国大統領の SNS アカウントがブロックされていたのだ。

一つだけではない、全てだ。Twitter、Facebook、Instagram、YouTube…地球上で最も権力のある地位にいる男の声が、ほぼ一斉に封じられた。

あなたが彼を好きであろうと嫌いであろうと、それは冷酷な事実だ。「匿名の委員会」の数クリックで、一個人が公の場から完全に抹殺され得るのだ。

そして、それが大統領に起こり得るのであれば、誰にでも起こり得る。

しかし、私がぞっとしたのは、彼が「締め出された」ことではない。

そのことが、普通のことと見なされたことだ。

今や SNS は政府によって監視され、コントロールされている。それは独裁国家だけで起こっているのではなく、西側諸国でも同様だ。

* * *

そして、SNS は今や、安っぽい「エンターテインメント」的なコンテンツに偏った、混沌とした寄せ集めになってしまった…

そのいわゆる「開かれた空間」とは、実のところ、エコーチェンバーの連なりであり、そこでは誰もが自分がすでに信じていることだけを見、聞きたいことだけを聞かされる。

なんと皮肉なことか。

私たちは世界中で四十億人以上が繋がっているのに、対話能力はますます欠如していく。

私たちはかつてないほど大きな知識の宝庫を持っているのに、独立した思考能力は次第に失われていく。

人々はもはや本を読まない。

彼らは「1 分で分かる本の要約」を見る。

一つの討論を最後まで聞かない。

ただ、途中から抜き出された一文を選び、BGM をつけ、クリックベイトな見出しをつける。

* * *

一度、新卒の学生に尋ねたことがある。

「本を読むのは好き？」

彼女は答えた。

「毎朝 5 分のポッドキャストを聴くのが好きです。
それ以上長いと、面倒くさく感じます」

「読書嫌い」な社会が、必ずしも無知な社会とは限らない。

しかし、思考を嫌い、議論を恐れ、理性よりも感情に導かれることを好む社会は、確実に知性の進化に逆行している。

* * *

私は最後の行をもう一度タイプした。

「真実を理解するのに十分かかり、嘘が憤りを引き起こすのに五秒しかかからないのなら——勝利するのは嘘ではなく…知性が自ら絶滅するのだ」

私は画面を消した。そして自問した。

「もし今日、この原稿を提出したら、それは『市場性がない』という理由で…拒否されるだろうか？」

* * *

第三の視点：基盤の混乱（道徳・社会）

その夜、私はあるニュースを読んだ。

ある中学校の下級生の一団が教室のドアに鍵をかけ、音楽教師にスリッパを投げつけ、その様子を動画に撮ってSNS に投稿した。挑戦的なキャプション付きで。「先生の歌が下手なんだから、仕方ないでしょ」

その出来事はウイルスのように広まった。非難する者は誰もおらず、ミームを作ったり、リミックス音楽をつけたりする者ばかりだった。

私は静かに座っていた。その教師のためではない。この社会のためだ――道徳的な混乱が、もはや間違いとして認識されなくなったこの社会のために。

* * *

私は昔の教理問答書の一節を思い出した。

「家庭は、神が人に人としての生き方を学ばせる
ために与えた最初の基盤である」

しかし今日、かつて基盤であったものは、障壁と見なされるようになった。

人々はもはや、子供には父と母が必要だとは信じていない。

その代わりに、彼らは「現代的な家族」のモデルを奨励する。そこでは、性別、役割、義務が、全てスマートフォンのアプリのように選択可能だ。

* * *

私はこれを、誰かを攻撃するために書いているのではない。

私はただ、一つの事実を記録しているだけだ。

全ての概念が再定義可能になった時、基準となるものは何も残らない。

* * *

私はかつて、ある生徒が両親にこう言い返すのを目撃したことがある。

「パパとママの言うことなんて聞く必要ないよ。
TikTok では違うこと教えてるもん！」

ある座談会で、一人の教師が語った。

「うちの中学一年生の生徒が、本音を話せるのは…YouTube ショートだけだと打ち明けてくれました。両親は『古臭い』し、友達は『決めつけてくる』からだそうです」

* * *

TikTok、YouTube、Facebook…今やそれらは、ある世代にとっての精神的な親、バーチャルな教師、シミュレーション上の親友となった。

そして、本当の関係——子供と親、生徒と教師の間の関係——は、ぎこちなく、冷淡で、時には敵対的さえある。

道徳が家庭や学校の構造から切り離された時、子供たちはどこで人としての生き方を学ぶのだろうか？

* * *

社会の弊害は、もはや「遠い」問題ではなくなって久しい。

ー 学校での麻薬から未成年の売春まで

ー 金融詐欺からポルノコンテンツの蔓延まで

私は、これらのことが現代にしか存在しないと言っているのではない。

しかし、一つ違うことがある。

昔は、それらは弊害と呼ばれていた。

今日では、それらは「多様なライフスタイル」や「性の解放」として偽装されている。

* * *

私はかつて、ある内部調査を読んだことがある。

日本とアメリカでは、80%以上の子供が 12 歳になる前にポルノコンテンツに接触した経験があるという。

中には、露骨で暴力的なイメージなしに「愛」という概念を想像することさえできない者もいる。

ネット上には、ポルノ漫画を公然と共有するサイトがある——そして誰も逮捕されない。

* * *

その一方で、詐欺や窃盗の状況——現実世界でもインターネット上でも——は、指数関数的に増加している。

貧しさから盗む者もいれば、…有名になりたくて盗む者もいる。

衝撃的であればあるほど、シェアされる回数は増える。

厚かましければ厚かましいほど、注目される。

社会は、過ちを生き残るための道具に変えてしまった。

* * *

おそらく私が最も心を悩ませているのは、美名で呼ばれている一つの波だ。

「性の自由」

実際、同性婚（男性同士、女性同士）を合法化し、さらにはノンバイナリーの性自認を承認する国はますます増えている。

かつて異常と見なされていたことが——今や「現代的な人権」というレッテルを貼られている。

私は誰にも反対していない。私はただ自問しているだけだ。

もし、生まれた子供が自分が男の子か女の子かを知ることができなくなったなら、その子はどうやって人としての生き方を学ぶのだろうか？

もし、性別がただの「感覚」に過ぎなくなったなら——
永遠なものは何が残るのだろうか？

* * *

私は信じています。

天の理は変わらない。

性別は、意見ではない。

倫理は、多数派によって書き換えられるものではない。

自然に反し、良心に反し、伝統文化に反することは——
たとえ法律に書かれたとしても——永遠に社会の健全な
基盤とはなり得ない。

* * *

私は日記にこう書き留めて、締めくくった。

「医者と患者の両方がそれを…正常な状態と呼ぶ
なら、私たちは体を治すことはできない」

* * *

第四の視点：権力と信仰の腐敗（政治・宗教）

権力：民主主義のカーテンの背後にある亡霊

ある晩、私は仕事部屋で座り、ニュースチャンネルを次々と見ていた。二人の大統領候補による生討論が放送されていた。彼らは休むことなく互いを攻撃し合っていた。

－「あなたは教育予算を削減し、何千人もの教師を失業させた！」

－「あなたはどうか？あなたは法人税を引き上げ、経済を苦境に陥れた！」

誰も実際の政策について言及しない。誰も明確な解決策を提示しない。私は静かに、いくつかの見慣れたスローガンを書き留めた。

「正義のために」、「信頼の再構築」、「システムの刷新」…

しかし、それらは全て空虚だった。誰も「正義」とは何かを定義しようとせず、「システム」をどう刷新する必要があるのかも言わなかった。

* * *

私は政治社会ジャーナリズムの仕事に 20 年以上携わってきた。私はかつて、権力は前向きな変化を生み出すことができると思っていた。しかし、関われば関わるほど、私は気づいていった。

現代の政治は、国家を統治する術ではなく、イメージと権力を維持する術なのだ。

西側の民主主義国家では、権力は三つの影響力の方向へと引き裂かれている。

- － 世論を方向付ける役割を持つマスメディア
- － 舞台裏の利益を持つ経済団体
- － そして、ますます浅薄で操作されやすくなっている有権者の嗜好

メディアと協力しない政治家は、中傷される。企業の利益に応えない政治家は、資金を引き揚げられる。大衆の好みに応えない政治家は、次の選挙で排除される。

権力は任期と同じ長さしか続かないため、彼らには長期的な価値について考える時間がもはやない。

* * *

私はかつて、選挙コンサルタントをしている友人に尋ねたことがある。

－「どうして道徳教育の改革に関する政策を提案しないんだ？」

彼は冷笑した。

－「そんなものは票にならない。でも、候補者が赤ん坊と握手する動画は票になる」

* * *

一方、一党独裁国家では、問題はまた別のところにある。

政府は国民を代表しているのではなく、与党そのものを代表している。

そこでは、権力は一つの頂点に集中する。全ての政策は一つの目標に帰結する。党を守り、システムの安定を保つことだ。国民は奉仕すべき主体ではなく、管理すべき対象となる。

そして、選挙や運動の必要がないため、決定は恣意的で非人間的になる。自由な報道機関による監視がなく、対立勢力による反論がなく、真の民意がない場合——権力は絶対的なものとなり、そして絶対的に腐敗する。

私は手帳に結論を書き付けた。

「民主主義であれ独裁であれ、権力が道徳の基盤の上に置かれていないなら——それはただの闇のゲームに過ぎない。

その時、国民は、投票に行こうが行くまいが、すでに決まった盤上の駒に過ぎないのだ」

* * *

宗教：もはや響かない鐘の音

ある午後、私は街の中心にある古い教会を通りかかった。

鐘の音が響き渡る――いつもと同じように規則正しく。
しかし中には、静かにロザリオを繰る三人の老人しかいなかった。

長いベンチはがらんとしていた。瞳に光はなく、祈りの囁きも聞こえない。

鐘の音は響くが、もはや心で聞く者はいない。

* * *

私はかつて、大きな教会での結婚式に出席したことがある。全てが壮麗だった。聖歌隊、LED スクリーン、Facebook へのライブ配信。

しかし、牧師が聖書の一節を読み始めると、誰も聞いていなかった。彼らはカメラの調整に夢中で、いいねボタンを押すのに夢中だった。

信仰は、今やパーティーの装飾に過ぎない。

* * *

多くの寺や教会は、今やイベントセンターのようだ。

－ チケットを売るように賽銭を集める場所

－ 幸運のお守り、風水グッズ、瓶詰めの聖水を売る
屋台を開く場所

－ 先祖供養の儀式を何十万回も視聴されるライブ配
信をする場所

一部の個人は、「僧侶」や「牧師」の仮面を利用
して、私利をむさぼり、詐欺を働き、信者を虐待
さえする。

* * *

さらに悪いことに、世界の多くの場所で、宗教は戦争を
引き起こす道具に変えられている。

－ 聖戦の名の下に、人々は子供たちに銃を乱射する

－教義の名の下に、人々は異性や異なる信仰を持つ者を差別し、殺害する

－「神の意志」の名の下に、人々は都市全体を攻撃する

神の名の下に行われる戦争ほど、血なまぐさい戦争はない。

* * *

私はふと、聖書の中の一つの物語を思い出した。

イエス・キリストはかつてエルサレムの神殿に入り、その聖なる場所が商売の市場に変えられていたことに激怒した。

主は両替人の台を倒し、商人を追い出し、こう言った。

「わたしの父の家は、祈りの家である。あなたがたはそれを、強盗の巣にしてしまった！」

(一般読者向けの補足説明：これは新約聖書における重要な出来事であり、イエス・キリストが宗教における汚

れを清め、信仰の神聖な尊厳を回復させる象徴的な行為を示している。)

* * *

私は心の中で囁いた。

「主よ、もし今日、あなた様の家が本当に市場になってしまったのなら…どうか、もう一度それを掃き清めてください——かつてあなた様がなさったように」

そして私は理解した。

信仰がもはや羅針盤でなくなった時、人は混沌の海を、方向を見失って漂流する。

社会は金がなくても、石油がなくても存続できるかもしれないが、道徳がなければ存続できない。

権力が腐敗し、信仰が歪められる時——それは、文明という船が沈み始める時なのだ。

* * *

私はペンを置いた。コンピュータの画面はまだ明るく、点滅するメモと引用で埋め尽くされている。

私が通り過ぎてきた一つ一つのテーマ——音楽、芸術、SNS、政治、宗教——は、それぞれがバラバラのパズルのピースのようだった。しかし今、それらが全て、突如として繋がった。

まるで、一本一本の血管が、衰弱しつつある一つの心臓へと向かっているかのようだ。

形は異なり、様々な分野で現れてはいるが、私は気づいた。

それらの症状は全て、一つの根本的な病を指し示している——神との繋がりを失い、普遍的な道徳基準を否定したことだ。

私たちは、かつて聖賢たちが築き上げた道徳の基盤を放棄してしまった。

私たちは経典を嘲笑し、信仰をあざ笑い、聖なる教えを政治的なスローガンや道徳のマーケティングキャンペーンに置き換えてしまった。

私たちは摩天楼を建て、煌びやかな金融センターを築いたが、一人一人の内なる光はますます暗くなっている。

私たちは瞬時に世界中にライブ配信できるが、自分自身の良心の声に耳を傾けることはできない。

私たちは全てを持っている――しかし、安らぎはない。

* * *

私は手帳に最後の行を書き留めた。

「私たちは物質的に輝かしい文明を築き上げたが、
その魂は、徐々に死につつある。

このバベルの塔は、その土台から揺らいでいる。

そしておそらく…

神の涙は、まさにそのために流されているのだ」

* * *

私は窓の外を見た。夜は更けていた。街はまだ煌々と輝いているが、私の中には静寂があった。

病状の記録は完成した。しかし、良心のある医者なら、ただ診断するだけではない――患者の体の内外両方から、その深層にある原因を突き止めなければならない。

人間はそうだった。

では、天地はどうだろうか？

この惑星、この宇宙は、それ自身の生存の兆候を示しているのではないだろうか？

人間によって作り出されたものではない、別の症状が、囁くように私たちに思い出させているのではないだろうか。

私たちは、道を間違えた、と。

* * * * *

第三章：石の涙、川の血

私はラップトップの前に座り、画面をじっと見つめていた。「時代の病状」の草稿は完成した。しかし、私の心はまだ、涙を流す聖母マリア像のイメージから離れられずにいた。

白い磁器の目尻から流れる、一筋の暗い血。

それはまるで刻印のようであり、言葉のない問いかけのようだった。これは単なる偶然なのか？それとも、一つの信号なのか？

私はそれを振り払うことができなかった。衝動はますます強くなる。まるで、私の中で誰かが囁き、絶えず問いかけてくるかのようだ。

「聖母様の涙は、単独の現象なのだろうか？」

「それとも、世界中で響き渡る、数多の『泣き声』の一つに過ぎないのだろうか？」

「そして、それらは全て、共通の一つの痛み、一つの罪を指し示しているのではないだろうか？」

私は、もう普通の生活には戻れないと分かっていた。今は無理だ。私は探求しなければならない。ジョンの締め切りのためでも、新聞社のためでもなく、私自身の強迫観念のために、新たな調査が始まった。

私は、体系化することから始めた。最も悲劇的な色合いを帯びた異変、最も象徴性の高い兆候に焦点を当てた。

キーワードを打ち込み、検索し、報告書を深く掘り下げた。

そして、私は見つけた…

* * *

第一段階：悲劇的な兆候の収集

ファイル #1：聖なる方々の涙

一見するとバラバラに見える、何十年にもわたって大陸中に広がる一連の出来事。しかし、それらには共通の特徴があった。全て、信仰と神聖さの象徴である像が、突如として涙を流したのだ。

イタリア、シラクーサ、1953 年。ある若い夫婦の家に
ある、石膏でできた小さな聖母マリア像が涙を流し始め
た。ニュースは瞬く間に広まった。何千人もの人々が押し
寄せた。中には、その涙を数滴でも拭き取ろうと、ハンカチを持参する者もいた。新聞は騒然とし、教会当局
が乗り出した。彼らは涙を検査し――本物だと確認した。

彼らは像の構造を調べ――導管も、技術的な穴もなかった。最終的に、バチカンを確認した。この現象は「科学では説明不可能」であると。

その二十年後、日本の秋田。小さな修道院にある聖母マリア像が、百回以上も血と涙を流した。アグネス笹川という一人の修道女は、聖母様からメッセージを受け取ったと語った。もし人類が悔い改めなければ、恐ろしい罰が下されるだろう、と。この話は、長い間日本のマスコミに無視されていたが、1988年にバチカンが密かに調査し、公認するに至った。

そして、もっと最近では――タイ、台湾、ブラジル、カナダ。もはや噂ではない。ビデオも、写真もある。いくつかはすぐに検閲された。しかし、その痕跡は、フォーラムや非公式のネットワーク上にまだ残っている。高雄の小さな寺で涙を流す観音菩薩像。サンパウロで復活祭のミサの最中に血の涙を流す木製のイエス・キリスト像。信者が跪いて祈るたびに涙を滴らせるトロントの聖母マリア像。

これらの出来事において、当局はどこにいたのだろうか？

通常は沈黙。あるいは否定。あるいは、「毛細管現象」や「異常な湿気」というレッテルを素早く貼る。

科学者たちは慎重だ。中には、空洞の石膏が湿気を吸う、温度による伸縮、あるいは水を通すひび割れといった技術的な仮説を提示する者もいた。しかし、現場で調査した人々——信者も、独立系の記者も含む——は、現地の検証をもって反論した。内部に水はなく、管もなく、そしてその水滴は…本物の涙のような生物学的特徴を持っていた。

では、人々はどうだろうか？

現象があるところには、巡礼者がいる。子供を連れてきて治癒を願う母親たちがいる。何時間も雨の中で跪く者がいる。その像を見て、自殺を思いとどまったと語る者がいる。

一方、宗教界は分裂した。一部の司祭、僧侶、修道士は、それは奇跡であり、天界からの警告だと考えた。他の者たちは沈黙した。迷信深いと見なされるのを恐れ、「俗っぽいスピリチュアルな輩」と同一視されるのを恐れたからだ。

私は一つ一つのケース、一つ一つの顔、一滴一滴の涙を記録した。しかし、心の奥底では、自分が集めているのはデータではないと分かっていた。それは、泣き声だった。

* * *

ファイル #2：赤く染まる川

もし涙が聖なる痛みの象徴であるなら、血のように赤い川は、おそらく全人類への警告なのだろう。

私は 2010 年以降、川や運河、さらには湖までもが、何の警告もなく、明確な汚染源もなく、数時間から数日の間に突如として暗い赤色に変わったという事例を数十件見つけた。そして、そのほとんどが疑問符で終わっている。

中国では、東洋文明の生きた象徴である長江が、2012 年に重慶を流れる区間で血のように赤く染まったことがある。住民は不安に陥った。国営メディアは、異常に大量の堆積物によるものだと言明し、鎮静化を図った。しかし、上

流と下流が澄んでいるのに、なぜ特定の区間だけがそうなるのか、誰も説明できなかった。

レバノンのベイルートでは、2011 年にベイルート川が突如として血のように赤くなった。政府は食肉処理場からの排水が原因かもしれないと言ったが、地元住民は反論した。近くには食肉処理場など一つもなかったのだ。多くの人々が、これは「大地の血」、神聖な警告だと声を上げた。

インドネシアでは、2017 年にメダンのデリ川が一夜にして鮮やかな赤色に変わった。動画は SNS で瞬く間に拡散した。政府はある工場を非難したが、その名前を明かすことは拒んだ。その後、独立系メディアが発見した――その時点で、どの製造施設も操業プロセスを変更していなかった。

アメリカでさえ、テキサス州のある川の一部が 2021 年の夏に真っ赤に染まったことがある。EPA（環境保護庁）当局は、赤潮か鉱物反応の可能性があると行ったが、住民グループがサンプルを採取して独自に検査したところ、藻の兆候も、重金属もなく、合理的な技術的原因は何も見つからなかった。

別の視点で見ると、私はそれらの川を、傷ついた血管のように見ていた。地球は血を流している。一つ一つの傷が赤く広がり、まだ告白されていない罪を告げているかのようだ。

* * *

ファイル #3：夏に降る雪

もし涙が悲しみの象徴であり、赤い川が天罰であるならば、真夏に降る雪は、言葉にならない嘆きなのだろう。

私は異常な降雪に関する情報源を追った——それは単に極端な気象条件下でのことではなく、全く不合理な時期、場所でのことだった。

インド北西部、2019 年 6 月——外気温 38 度、雲一つない空に、15 分間、小雪が舞った。人々は動画を撮影し、政府は「大気中の化学反応による白い塵の現象」と発表した。しかし、なぜそれは本物の雪のように手の上で溶けたのだろうか？

アルジェリア、サハラ砂漠——2021 年 7 月、灼熱の砂丘を薄い雪の層が覆った。測定された気温は 40 度。科

学者たちは大気圏の擾乱によるものだと言ったが、なぜ近隣の地域で同様の兆候が全く見られなかったのか、誰も説明できなかった。

中国では、雪はもはや冬だけに降るものではなくなった。近年、旧暦ではすでに夏に入っている 4 月、5 月、さらには 6 月の真っ只中に、大雪が何度も記録されている。

河北省、内モンゴル、あるいは長白山では、他の多くの場所が猛暑に喘ぐ中、街路が白い雪で覆われた。

マスコミはそれを「気候変動」と呼んだ。ネットユーザーは「異変」と呼んだ。

そして私は、ただ一つのことを感じた。天が何かを語っている――しかし、誰も耳を傾けていない。

しかし、私が最もぞっとしたのは、ある古い漢文のフォーラムで「六月飛霜」という言葉に出くわした時だった。あるユーザーはこう書いていた。「六月に雪が降るのは、天地を揺るがすほどの冤罪があるからに他ならない」。私はその言葉を保存した。奇妙な感覚が湧き上がってきた。

た――まるで、古代の暗号を解き明かそうとしているかのように。

* * *

その他の兆候

涙だけではない。血や雪だけでもない。

私は散発的なニュースを目にした。魚の群れが理由もなく岸に飛び上がり、大量死する。渡り鳥が方向を誤り、都市に衝突し、集団自殺する。太陽が同時に二つ、あるいは三つの影と共に昇る――「幻日」と呼ばれる現象だが、その頻度は異常に高い。季節外れの雷、晴天に閃く青い光、地底からの反響音が民衆をパニックに陥らせる。

私自身が目撃した奇妙な気象現象がある。2020 年の庚子の旧正月、私はベトナム北部で短い休暇を過ごしていた。大晦日の夜、私はお祭り気分で賑わう観光地の通りを散策していた。人々は写真を撮り合い、お正月のおもちやを買い、新年へのカウントダウンを待っていた。

空は、月のない旧暦 30 日の夜のように、漆黒だった。突然、夜 10 時近くになって、にわか雨が降り出した。

大粒の激しい雨、そして――私は立ちすくんだ――冷たい氷の粒が、道路やトタン屋根、車を叩きつけ始めた。

子供たちは叫び、大人たちは頭を覆って急いで逃げた。誰もが困惑していた。北部の冬のさなか、霧雨は普通のことだが――雹を伴うにわか雨は前代未聞だった。

翌朝、新聞を読んで私は知った。大晦日の夜、ベトナム北部の多くの省で同時に雹が降ったのだ。ハノイ、タイグエン、フート、トゥエンクアン…いずれも同様の現象が記録されていた。

その時、何人かの年配者がこう言っていたのを覚えている。「七十年生きてきて、こんな正月は初めて見たよ」

そして、さらに恐ろしいことに、それは「コロナ」という名の奇妙なウイルスに関する最初のニュースが、国際的な報道で出始めた時期でもあった。

その時、世界的なパンデミックが起こるとは誰も知らなかった。しかし、多くの人々が言葉を失った。まるで、一つの扉がかすかに開かれたかのように――未だかつてない暗黒の時代へと続く扉が。

このような奇妙な気象現象は、通常、政府や科学界によって通り一遍に説明される。しかし私は、天上界が「信号」を人間界に送っているのだと感じていた…

* * *

瞑想

私は椅子にもたれかかった。画面には、血の涙を流す像。暗赤色の川。砂漠の砂を覆う雪の層。

私は古い詩を思い出した。「天は泣き、地は鳴り、山は叫び、川は赤し」

石の涙。川の血。夏の雪。冬の雹。星々の混乱。生物の絶望。

全てが、共に一つの悲劇的な合唱を奏でているかのようだ。

彼らは、私たちに何を伝えようとしているのだろうか？

私は、もうすぐ答えを見つけ出すと分かっている。しかし、その前に、私はあの言葉の痕跡を追わなければならない――「六月飛霜」。

* * *

第二段階：解読の鍵－「六月に降る雪」

私は画面の前で身動きもせず座っていた。涙に濡れた像、血のように赤い川、灼熱の夏に静かに降り積もる雪…全てが私の心の中で渦を巻いていた。しかし、やがて私の視線は、先ほど保存した一つの言葉に留まった。「六月に降る雪」（六月飛霜）

古い漢文で、古語を研究するフォーラムのコメントの中に、ぽつんと置かれていた。書き手はただ、短い一文を残しただけだった。

「六月に雪が降るのは、天地を揺るがすほどの冤罪があるからに他ならない」

私はその文を二度、読み返した。そして三度目。奇妙な感覚が胸の中に広がり、まるで古代の暗号に触れたかの

ようだった——それは言語の暗号ではなく、道理の暗号だった。

「六月飛霜」——「六月に降る雪」。

私が知る全ての文化において、六月は夏至の月であり、太陽の光が最も高く、最も強くなる時だ（北半球において）。その時に雪が降ることはあり得ない——自然の秩序が逆転しない限りは。天が感応しなければならない。宇宙の法理が歪まなければならない。そしてその唯一の原因——それは、あまりにも大きな冤罪だ。

私はより具体的に調べ始めた。「六月飛霜」とは東アジア文化において何なのか？それは比喩なのか、それとも実話に基づいた物語なのか？

その結果、私は中国史上最も有名な古典京劇の一つにたどり着いた。関漢卿作の『竇娥冤』だ。

* * *

彼女の名は竇娥（とうが）。

乱世に生まれ、早くに母を亡くし、父と共に暮らしていた。父が困窮し、借金を返すために身を売って奴隷とな

った時、竇娥もまた貧しい家の嫁として売られた。夫に早くに先立たれた後、彼女は舅と共に、互いを頼りに孤独に暮らしていた。

ある悲惨な出来事の中で、彼女は欲深い地主の策略によって毒殺の濡れ衣を着せられた。真犯人は彼自身だったにもかかわらず。証拠がなく、彼女が一貫して無実を訴えたにもかかわらず、地元の役人は賄賂を受け取っていたため、死刑を宣告した。

処刑される前、竇娥は刑場に立ち、天を仰いで懇願した。

「もし私が本当に無実であるならば、天よ、どうか三つのことをお示してください。

一、私の流す血は地に落ちず、天へと逆さに飛び散るでしょう。

二、真夏の六月、空は真っ白な雪で覆われるでしょう。

三、私の死後、この地は三年間、干ばつに見舞われるでしょう」

そして、伝説によれば――全てが現実となった。

彼女の血は吹き上がり、逆さに飛んだ。天は、六月のさなかに、突如として雪に白く覆われた。そしてその後三年間、雨は降らず、大地は実を結ばなかった。

その物語は――何世紀にもわたって語り継がれ――単なる一人の女性の悲劇ではなかった。それは、不正に対する天地の感応と、晴られぬ無念の永遠の象徴となった。そしてそれ以来、「六月の雪」は、常軌を逸しているが天の理にはかなっている、あらゆる事柄を表す簡潔な表現となった。

* * *

私は立ち止まり、胸が詰まった。

権力もなく、声も持たず、無実の罪で殺された一人の女性。そして天が、彼女の代わりに涙を流した。それはもはや、一つの物語ではない。それは、道理には目があるという、一つのリマインダーだ。

私は椅子にもたれかかり、天井を見つめた。再び、あの光景が浮かび上がる。

ー サハラ砂漠に降り、燃えるような砂丘を白く覆う雪。

ー インドの真夏、災害で亡くなった人々を追悼している最中に、15 分間続いた降雪。

ー 夏の中国、多くの地域で降る雪。

それが偶然だとは、私には信じられなかった。

あり得ない。

もし単なる異常気象なら、なぜこれほどまでに正確なタイミング、これほどまでに特別な文脈、そして「怨念」という観念とこれほどまでに一致する理由があるのだろうか？

私は再び「六月飛霜」という三文字を、今度は簡体字で打ち込んだ。大量の結果が現れた。学者たちはそれを「感応」現象と呼んでいた。一部の東洋のスピリチュアル研究者は、人の心が不正になり、正義が覆される時、天地の正気が乱れるとさえ信じている。夏の雪のような異常な自然現象は、物理的な混乱ではなく、道徳的なフィードバックの一形態なのだと。

* * *

私は起き上がった。突如としてインスピレーションが湧き上がってきた。私は手帳を開き、最初の行にまっすぐ書き下ろした。

「もし一つの冤罪のために六月に雪が降るのなら、砂漠の至る所で、乾ききったと思われた地で降る雪は――沈黙することのできない不正義に対する、天地の叫びではないだろうか？」

私は書き続けた。

「もし像が泣き、川が赤く染まり、天が冬のさなかに雹を降らせ、夏のさなかに雪を降らせることができるのなら…そこには、大気圏を突き抜け、宗教、地理、そして時間のあらゆる障壁を越えて叫びをあげる、一つの大きな冤罪があるに違いない」

初めて、バラバラに見えた現象が一つに繋がり始めた。

―涙を流す仏像や聖母マリア像は、この世の痛みに対する感応だ。

— 血のように赤い川は、まだ晴らされていない無実の罪で流された血だ。

— そして夏の雪は、最も明確な兆候だ。あまりにも大きな罪が隠蔽されており、天地がその人々に代わって声を上げているのだ。

一つの文が私の頭に浮かんだ——もはや私から来たものではないかのように。

「天が怒っているのではない——人間の沈黙の前に、天が無力なのだ」

私は息をのんだ。

そしてコンピュータをつけ、古い資料を再び開いた。

私はもはや、現象を探してはいなかった。忘れ去られた事件を、公表されなかった迫害を、メディアの闇に閉じ込められた無念を、私は調べ始めた。

今、一つの問いが私の頭から離れない。

「私たちの時代において、一体どのような冤罪が、天に夏の雪を降らせるほど大きいのだろうか？」

その問いこそが…鍵だった。

そして私は、それを手にしたのだ。

* * *

第三段階：鍵の適用と事件解決

「もし一つの冤罪のために六月に雪が降るのなら、砂漠に降る雪、青空から降る雪、石の泣き声と川の赤い血の只中で降る雪は――全て、言葉にできないほどの大いなる冤罪を指し示しているに違いない」

私はその一文を手帳に書き留めた。私の手は少し震えていた。なぜなら、私は理解し始めていたからだ。これはもはや「異変」の話ではない。これは一つの追跡なのだ。時代の最大の冤罪を追跡する旅なのだ。

私は全てのメモを再び開いた。より深い方向へと調査を進め始めた。「隠された迫害」「良心の囚人」「信教の弾圧」「身元不明の遺体」といったキーワードだ。最初

の結果は混沌としていた――何百もの名前、何千もの出来事。しかし、やがて一つの言葉が繰り返し現れた。法輪功。

私ははっとした。

私はこれまで、法輪功についてかなり読んだことがあった。特に、この修煉法の信仰と道德の側面について。しかし今回は、最初から調べ直すことに決めた――かつて自分がよく理解していると思っていた大事件を、一人のジャーナリストとして再調査するように。

信仰を確かめるためではない。全ての真実を繋ぎ合わせるためだ。

* * *

法輪功とは何か？

かつて扇動的な報道で喧伝されたような「カルト」ではない。私はかつて、記録映像をこの目で見たことがある。公園で何百人もの人々が煉功し、静寂の中で坐禅を組み、その穏やかな顔に朝の光が差し込む様子を。スローガン

も、政治もない。ただ、穏やかな動作と、強調される三つの文字があった。「真・善・忍」。

法輪功は 1990 年代初頭に中国で始まり、それがもたらす健康と道徳への効果から、急速に広まった。1990 年代末には、推定で 7000 万人から 1 億人の人々が実践していた。あまりにも大きな数字。中国政府が懸念を抱き始めるほどに、大きな数字だった。

そして、まるで毒の風が吹き抜けるように、1999 年 7 月に弾圧が始まった。

衝撃的な問い

私は書き留めた。

－なぜ、穏やかな気功法が「国家の脅威」と見なされたのか？

－なぜ、ただ坐禅を組むだけの人々が、拷問され、拘束され、「思想犯」と呼ばれたのか？

－そして、なぜ、多くの証人や調査員によると、彼らは「人体臓器産業」の供給源となったのか？

私は国際的な資料を読み進めた。カナダの元アジア太平洋地域担当国務長官デイビッド・キルガーと人権弁護士

デイビッド・マタスによる報告書は、中国における生体臓器狩りの活動に関する 5 万ページ以上の調査資料をまとめたものだった。報告書には、背筋が凍るような結論が書かれていた。「この惑星で前例のない悪行である」

私は愕然とした。

* * *

臓器の注文——そして人命の代償

私は事実確認を始めた。西側諸国では、腎臓移植を受けるための待機期間は通常 6 ヶ月から数年。肝臓や心臓では、さらに長い。しかし中国では、闇の医療機関や医療ツーリズムが宣伝する情報によると、待機期間はわずか数日から数週間だという。

なぜ、これほど恐ろしいほどの差があるのか？

ある人権派の医師がインタビューで答えた。

「なぜなら中国には、生きた臓器バンクがあるからです。『注文』が入ると、彼らはすでに血液デ

ータを保管している囚人を検査し、適合者を選び、
そして殺すのです——臓器を取り出すために」

私は顔を殴られたような衝撃を受けた。生きた臓 GEO
器バンク？あり得るのか？

そして、私はある証言を読んだ。

「私はかつて労働キャンプの看護師でした。彼らは法輪功学習者の血液を検査しましたが、何の治療もしませんでした。ただ、臓器に関する情報を収集するためだけでした」

「その後、何人かの人々が『姿を消し』ました。彼らがどこへ行ったのか、誰も知りません。家族に死亡通知は届きません。遺体もありません。葬儀もありません」

私は目を閉じた。涙を流す聖なる像、川の血、夏の雪のイメージが…今や、伝統的ではないジェノサイド——銃弾によるものではなく、外科手術によるジェノサイド——の、静かな証拠として浮かび上がってきた。

* * *

人体展覧会——そして商業化された悪

もう一つ、忘れられない詳細がある。「プラスティネーション」された人体の展覧会だ。

2018 年、ソフィア・ベルという名のジャーナリストが、ホーチミン市でそのような展覧会を見に行った。その展覧会は「人体のミステリー」と名付けられていた。彼女は、妊娠 7～8 ヶ月の胎児を露わにしたまま腹部を切開された妊婦の遺体を見て、ショックを受けた。献体の出所はなく、親族の同意もなかった。後に、彼女は発見した。

－ 遺体は全て中国由来であること。

－ プラスティネーション工場は 1999 年以降に設立されたこと——法輪功弾圧が始まった時期と一致する。

－ 創設者はドイツ人のグンター・フォン・ハーゲンスだが、工場は大規模な収容所がある大連に置かれていたこと。

そして、パズルのピースが繋がり始めた。

「貴重な臓器は、狩り取られ売られた。残った遺体は――プラスチックされ、展示される」

「犠牲者は――殺害された後――科学と芸術の名の下に、もう一度辱められる」

* * *

信じがたい数字

私は読み進めた。

『The Slaughter（大虐殺）』の著者イーサン・ガットマンは、2000年から2008年の間に、6万5000人の法輪功学習者が臓器摘出のために殺害されたと推定している。その後の数年、他の民族や宗教団体も標的となったことを加えると、その数は数十万人に上る可能性がある。

私はほとんど信じられなかった。しかし、否定することもできなかった。

私は病院のデータ、移植件数、ベッド数、医師の数を調べた…全てが示していた。公式に発表された移植件数は、彼らが合法的に入手できる臓器の量をはるかに超えている。

そして私は理解した。最大の冤罪は、法廷の中にはない——それは、切り開かれ沈黙した体の中にあるのだと。

* * *

聖なる像、石の涙に立ち返る

私は古いメモを見返した。

- － 秋田の聖母マリア像は 101 回血を流した。
- － 高雄の観音菩薩像は旧暦 7 月 15 日に涙を流した。
- － 四川大地震の追悼式を雪が覆った。
- － テキサスの小さな川が血のように赤く染まった——中国の臓器移植に関する報告書を調査員が発表した直後に。

あり得るだろうか？

私は断言する勇気はない。しかし、この感覚を振り払うこともできない。自然が、声を上げる機会を失った犠牲者たちに代わって、語っているのだ。

* * *

沈黙の判決

私は、ある犠牲者の父親である劉思遠（リュウ・スーユエン）氏の言葉を思い出した。

「娘が臓器狩りの被害に遭ったと知った時、それが非人道の極みだと思いました。しかし、娘の遺体がプラスチック製に入れられ、展示され、商業化される可能性がある」と知った時…彼らの悪には底がないのだと悟りました」

その言葉は、私をぞっとさせた。

私はジャーナリストだった。あらゆる種類の犯罪を見てきたと思っていた。しかし今日、私は気づいた。名付けることも、報告書に書くことも、いかなる法的カテゴリーにも分類することもできないことがあるのだと。それはただ、こう呼ぶことしかできない。人道に対する罪、と。

* * *

最後の言葉——しかし、終わりではない

私は椅子から立ち上がった。窓の外を見た。空は青く澄んでいる。雪はない。しかし私の心は、氷が落ちてきたかのように冷たかった。

私は知っている、もう後戻りはできないと。

私は書くだらう。単なる記事ではない。告発状を。

沈黙してきた者たちのために。そして、まるで夏に雪が降ることなどないかのように、生き続けたいと願う者たちのために——良心の告発状を。

* * *

蔵字石と天の審判

もし血の潔白が証明されなければ、大地が語るだらう。
もし泣き声が聞かれなければ、石が書くだらう。もし正義が実行されなければ、天が手を下すだらう。

私はかつて、自分が集めたもの——涙を流す聖なる像、
血に染まる川、夏に降る雪——が、すでに極限だと思っ

ていた。しかし、私は別の物語に触れた。天から降ってきたものではない。水と共に溶け去るものでもない。石から現れたものだ。何億年も静かに横たわっていた古代の石が、突如として割れ、一つの判決を露わにした。

その名は、蔵字石（ぞうじせき）。

* * *

地滑りが宣言文を暴いた

2002 年、中国南西部の貴州省平塘県掌布村で、小さな地滑りが起きた。住民が確認に行くと、大きな岩が二つに割れていた。奇妙だったのは地滑りそのものではなく、割れたばかりの岩の内側の面だった。そこには、石灰岩の層に深く刻まれた、六つの漢字からなる一列の文字があった。

「中國共產黨亡」

（中国共産党は滅ぶ）

その文字は誰も刻んでいない。人為的な痕跡は全くない。中国の地質学者たちの研究結果によると、この岩は約 2 億 7000 万年前のペルム紀のものだという。

異常な現象。時を超えたメッセージ。

最初、地元当局はかなり…乗り気だった。彼らはその岩を「蔵字石」（字を蔵する石の意）と名付け、展示を許可し、案内板を設置し、パンフレットさえ印刷した。しかし、さらに奇妙なことが起きた。公式な資料の上で、彼らは意図的に「亡」の字を消し去ったのだ。つまり、「中國共産黨」（中国共産党）とだけ記した。しかし、現地を訪れた人々にははっきりと見えた。「亡」の字が、最も鮮明で、最も深く、そして否定しようのないものだったのだ。

政府は静かに広報を中止した。ジャーナリストは報道を禁じられた。しかし、独立系の学者、地元住民、そして観光客たちが、写真やビデオを撮影し、国際的なフォーラムに情報を投稿するのに間に合った。こうして、現代における最も壮大で危険な異変の一つが、明らかにされた。天が、石で判決を書いたのだ。

歴史を二分する亀裂

岩は二つに割れていた。片側には「中國共産黨」、もう片側には「亡」。その亀裂は、まるでレーザーで切断されたかのように、きれいで断固としていた。多くの人にとって、これはただの興味深い地質学的現象に過ぎないだろう。しかし私にとって――涙を流す像、季節外れの雪、そして血の川を通り過ぎてきた私にとって――もはやそれを石として見ることはできなかった。私はそれを、一つの告発状として見ていた。天からの宣誓として。

中国――何千年もの間、王朝が次々と興亡してきた国家。しかし、これほどまでに自然に声を上げさせた権力は、かつてなかった。「亡」という文字は――古代漢文化によれば――単なる政治的な「滅亡」を意味しない。それは、本質を亡くし、徳を亡くし、天命を亡くす――つまり、道理と宿命の完全な消滅を意味する。

* * *

天が書いた――誰にも歪められない言語で

人類の歴史には、文字、絵、天文学、比喻による預言があった。しかし、2 億 7000 万年前の石が、誰にも書かれず、触れられず、消すこともできず、一画一画まで正確な六文字を宿し、恐ろしいほど明確な意味を持つ——それは、いかなる偶然の一致という説の可能性をも超えている。

私は画面の前に座り、蔵字石の写真を一枚一枚拡大した。私は刻まれた線の跡、侵食の度合い、岩の構造を照合した。国営の地質学者たちからの反論記事も読んだ——しかし、その全てが核心的な問いを避けていた。「なぜ、その 6 文字なのか？なぜ、宣言文のように明確なのか？」

誰も答えなかった。

* * *

天は道に逆らう者を誅す

私は古典籍から引用を探し始めた。予言、預言。そして、私は背筋がぞっとするような偶然の一致を見つけた。

「天生民以養道。逆道者、天誅之」

（天は民を生み、道を養わしむ。道に逆らう者、
天はこれを誅す）

この言葉は、古代中国の教えの中にある。私はまた、
『書経』の中に次の一節を見つけた。

「天之鑒、如反之若」

（天の鑒は、これを水に反すが若し）
（天の目は、水に映る影のようである。誰も隠すこ
とはできない。）

私は、何百もの臓器狩りに関する報告書を思い出した。
私は、出所不明のプラスティネーションされた遺体を思
い出した。私は、娘の遺影を握りしめ、嗚咽しながら語
った劉思遠という名の父親を思い出した。「私は悪につ
いて理解していると思っていました。しかし、私は間違
っていました。私はあまりにも甘かったのです」

そして私は、祖母がかつて読んでくれた古い詩を思い出
した。

「天網恢恢、疎にして漏らさず」

* * *

誰もが夏に雪を見るわけではない——しかし、石は誰も否定できない

私はその光景を想像した。一人の観光客が蔵字石の前に立っている。彼は文字を読む。「中国共産党…亡?」。彼は写真を撮る。そしてガイドに別の話に逸らされる。そしてその場を去るよう促される。そして…人々はまた沈黙に戻る。

しかし、その文字はまだそこにある。石の中に。歴史の中に。一国の運命を二分する亀裂の中に。

誰もが川に血を見るわけではない。誰もが涙を流す仏像を信じるわけではない。誰もが六月の雪の下に立つわけではない。しかし、誰も蔵字石を否定することはできない。誰もその刻印を消すことはできない。誰も、天を「告訴」することはできない。

* * *

亡——それは終わりか、それとも最後の警告か？

私は手帳に書き留めた。

「もし人道に対する罪が人間によって裁かれないなら、天が裁くだろう。もし天の判決がすでに――血で、雪で、石で――刻まれているにもかかわらず、我々がなおも顔を背けるなら、我々はおそらく、罪の側に立つことを選んだのだ」

蔵字石の「亡」という文字は、宣言かもしれない。しかし私は信じたい――それはまだ、最後の警告なのだと。雷が落ちる前に掲げられた手のように。天の火が焼き尽くす前の、最後の戒めのように。

* * *

第三章の結び

私はこの章を「石の涙、川の血」と名付けた――なぜなら、私はそれらのものを見たからだ。目ではない。魂で。良心で。私は占い師ではない。預言者でもない。私はただのジャーナリストだ――忘れ去られ、否定され、あるいは真実の底に埋もれてしまったものを、拾い集める者だ。

そして私は、この調査を一つの問いで締めくくる——私がまっすぐ空に投げかけたい問いで。

「天がすでに泣き、石がすでに書き、川がすでに赤く染まった今、

人間は——これ以上、何を待って目覚めるというのか？」

* * * * *

第四章：メッセージの源泉 – その声はどこから？

巨大な冤罪と天地からの前兆に関するピースが徐々にはっきりと姿を現した後、私は深い葛藤に陥らざるを得なかった。当初の個人的かつ感情的な調査の旅は、私を新たな入り口へと導いた。もし単に一つの「事件」の痕跡

を追いつけるだけでは、木を見て森を見ることができないと気づいたのだ。聖なる涙の意味を真に理解するためには、一步退き、確固たる知識の基盤を築き、時代を超えた神聖なる存在たちの言語そのものを解読する必要があった。

私の探求はここから新たな段階、より体系的で深みのある探究へと移行した。この探究を遂行するためには、一時的に個人的な感情から離れ、研究者の慎重さと方法論をもって予言という大河にアプローチする必要があると分かっていた。そして、最初の、そして最も根源的な側面は、まさにこの問いであった。これらの時代を超えたメッセージ、見えざる世界からの「声」は、一体どこから来たのか？

予言についての探求の旅を始めたとき、これが私の心に浮かんだ最も根本的な疑問であった。未来を透視する能力を持つとされる予言者たちに「語りかけた」のは、誰、あるいは何だったのか？それは、どこかの次元からの有形の声だったのか、神聖なる存在からのお告げだったのか、あるいは人間の深層意識の奥深くから閃く光だったのか、それとも単に天地が密かに託したしるしだったのだろうか？人類史の流れの中で、東洋から西洋に至るま

で、予言のメッセージが人間に届いたとされる無数の形式が見られる。この多様性は私に問いを投げかける。唯一の「発信源」があるのか、それともこれは無数の異なる情報チャンネルであり、それぞれが独自の特徴を持ち、特別な「聞き方」を要求するのだろうか？

1. 直接的な啓示：神聖なる存在からの声

世界の多くの主要な精神的伝統や宗教において、神聖なる存在からの直接的な啓示という形式は、一つの共同体、あるいは全人類の方向性を示す予言の、最高かつ最も権威ある源泉と見なされている。それは、神、仏、主なる神、あるいはその使者たちが、選ばれた個人に対して、未来に関するメッセージ、教え、警告、あるいは約束を主体的に伝える場合である。

私たちは、モーセがシナイ山で十戒と神からの直接的な指示を受け、それがユダヤ人の信仰と律法の基盤となった姿を挙げることができる。あるいは、預言者ムハンマドが天使ジブリール（ガブリエル）を通じてアッラーからの啓示を受け、その言葉が後にコーランとしてまとめられ、何十億ものイスラム教徒の生活の指針となった例

もある。仏教の伝統においても、祖師や高弟たちは、釈迦牟尼仏自身や他の世界の仏、菩薩から未来に関する教えや予測を受けたとされる。

この直接的な啓示の源から発せられる予言は、しばしば特別な重みを持つ。それらは単に出来事を予報するだけでなく、通常、宇宙や人生、道德の道や精神修養に関する深い真理を含んでいる。その内容は、一民族の運命、一つの宗教や法門の興亡、あるいは世界の歴史の流れにおける大きな転換点に関わる可能性がある。

しばしば提起される問いは、なぜ特定の個人がこれらの神聖なメッセージを受け取るために選ばれたのか、ということである。経典はしばしば、彼らが非常に堅固な信仰心を持ち、純粋な魂を持ち、誠意を証明するために多くの厳しい試練を経験した、あるいは定められた使命を担っていたと描写する。神聖なる存在からの「声」は、精神的な「聴覚」と、それを受け入れるのに十分なほど開かれた清らかな心を持つ者だけが完全に聞き取り、理解できるかのようである。このことはまた、より高次の世界とのつながりは容易なことでも偶然なことでもなく、受け手側の意識の周波数における一定の準備と、ある程度の同調を要求することを示唆している。

2. 特殊能力による未来の透視：天目と天機の制約

神聖なる存在からの「伝達」的な啓示の他に、歴史はもう一つの予言的情報へのアクセス形式を記録している。それは、一部の個人が、特殊能力や修練を通じて、未来の出来事を自ら「見る」または「感じる」ことができる場合である。これは必ずしも具体的な「声」を聞くのではなく、むしろ彼らが常人には隠された情報の流れに直接アクセスできる、優れた「感覚」を持っているかのようである。

多くの文化、特に東洋では、「天目」あるいは「第三の目」という概念がしばしば語られる。これは、人間が三次元空間と線形の時間流を超えた事柄を見通すことを可能にする能力である。ある一定のレベルに達した予言者、道士、苦行を積んだ修行者は、この能力を開くことができるとされる。その時、未来の光景、これから起こるであろう出来事が、あたかもあらかじめ撮影されたフィルムを見るかのように、彼らの目の前に明確に現れることがあるのだ。

中国の三国時代の諸葛亮は、時局と国家の運命に関する神がかり的な予測で知られ、また、ベトナムのチャン・チン・グエン・ビン・キエムは、何世紀にもわたって驚くほどの的中した託宣を残したことで、後世からそのような「先見の明」を持つ奇才と見なされている。彼らは単に論理的な推論や時局分析に頼るのではなく、実際に何が起こるかを「目撃」していたかのようである。

しかし、非常に注目すべき点は、非常に明確に「見て」いたにもかかわらず、これほどのレベルの予言者たちが、すべての事柄を直接的かつ詳細に明かすことはめったにないということである。その代わり、彼らの予言はしばしば隠喩的な言語、含意のある詩、あるいは後世の人々が深く考え、現実と照らし合わせて初めて部分的に解読できるような託宣に包まれている。なぜこのような「曖昧さ」があるのだろうか？

これは、精神的な伝統においてしばしば言及される深い道理へと私たちを導く。「天機は漏らすべからず」——天地の秘密は軽々しく明かしてはならない、というものである。神聖なる世界には、未来をあまりにも露骨に暴露することが予測不可能な結果を招きかねないという、目に見えない制約、不文律が存在するかのようである。

それは、出来事の自然な流れに干渉し、人間が成長し真理を悟るために直面すべき試練や選択の機会をかき乱す可能性がある。天機を軽々しく明かすことは、語る者自身、そしてそれを受け取るのに十分な縁や心構えができていない聞き手にとっても危険をもたらしかねない。

釈迦牟尼仏やイエス・キリストのような偉大な覚者でさえ、未来の重大な出来事や、後の時代における救世主の出現について語る際、通常、具体的な年月日や身元を明確に指摘することはなかった。その代わり、彼らはしばしば、しるしや象徴、寓話的な教えを示した。例えば、ある救世主が東方で、あるいは兎の年を象徴する年に降臨すること、あるいはその方が帯びるであろう品格や使命について語る予言がある。このような伝達方法は、希望を垣間見せると同時に、人間が単に外部からの確認を待つのではなく、信仰、智慧、そして自己の修養を用いて自ら認識することを要求する。それはまた、この世に必要な「迷い」を保持することにもなる。それによって、善へ向かう選択も悪へ向かう選択も、真に心から発せられるものとなるのだ。

したがって、難解な託宣や、含意に満ちた予言詩は、おそらく予言者たちが意図的に後世を「試そう」としたの

ではなく、宇宙の深遠な法則を遵守し、必要なバランスを崩すことなく重要なメッセージを伝えるための一つの方法だったのである。

3. 特殊な意識状態と古代の技法

神聖なる存在からの直接的な啓示や、天目のような特殊能力による未来の「透視」といったケースの他に、人類史は、人間が予言のメッセージにアクセスできると信じられてきた無数の技法や意識状態を記録している。これらは通常、通常の認識の限界を超え、他の次元や宇宙の秘められた深層からの情報に「波長を合わせる」ことを目的とした、人間側からの能動的な試みである。

最も古く、最も有名な例の一つは、おそらくギリシャのデルポイにあるアポロン神殿の予言者たちであろう。巫女ピュティアは、清めの儀式を行った後、地面の裂け目から立ち上る一種のガス（プネウマ）を吸い込んだとされる。これにより彼女らはトランス状態に陥り、その中でしばしば曖昧で多義的な神託の言葉を発し、それを他の神官たちが解釈しなければならなかった。この現象の正確なメカニズムについては未だに議論の的であるが、

デルポイの神託が古代ギリシャ世界に与えた絶大な影響は否定できない。

同様に、大陸中の多くの先住民文化において、呪術師や祈祷師（シャーマン）もまた、変性意識状態に達するために特別な技法を用いる。それは長時間の踊りであったり、反復的なリズムを持つ歌であったり、特殊な太鼓や楽器の使用、あるいは時には意識変容能力のある薬草の使用であったりする。このトランス状態において、彼らは自らの魂が他の世界へと旅をし、神々や祖先の霊と交信し、あるいは未来の、共同体に迫る災いや幸運の前兆を見ることができると信じている。

東洋では、道家の修練の流派や苦行のヨーガ行者もまた、心が完全に静寂になり、物理的な感覚の支配から脱する深い禅定の境地に達するための独自の方法を持っている。その絶対的な静寂の中で、宇宙の運行法則、時間の流れに関する深い理解、あるいは過去と未来の光景が自ずと現れることがある。これは儀式による興奮状態のようなものではなく、心が特別な透明性と鋭敏さに達したときに起こる、内側からの開眼なのである。

ガス、薬草、音楽といった外部要因の使用から、内観、深い瞑想に至るまで、その方法は異なれども、共通の目

標があるように思われる。それは、日常的な「自我」、つまり心配事や偏見、物質世界への執着によって制限された個人の意識を、一時的に脇に置くか、あるいは超越することである。この小さな「自我」が静まると、より広大で包括的な認識の空間が開き、人間は微細な情報の流れ、すなわち通常の覚醒状態ではほとんど聞くことのできない「声」にアクセスできるようになる。

これらの技法は、何千年もの間存続し、無数の文化で実践されてきた。それは、私たちが日常的に感じる物質的現実を超えて、存在の他の次元、私たちが触れることのできる他の知識の源泉が存在するという、人類の深い信念を示している。もし私たちが、その聞き方と自らの意識の調整法を知っていればの話だが。

4. 予知夢と内なる声

神からの啓示や、特殊な意識状態に達するための古代の技法といった、どちらかといえば「外部」からの情報チャンネルの他に、より身近で、より私的な、そして私たちのほとんどが一度は経験したり聞いたりしたことのある

る、もう一つの予言的メッセージの源泉がある。それは、予知的な夢と、自らの内なる静かな声である。

古来より、夢は精神世界への神秘的な扉であり、現実と見えざる世界の境界線が曖昧になる空間と見なされてきた。多くの文化において、メッセージを運ぶ夢、重要な出来事——個人的な些細な事柄から共同体の大きな変動に至るまで——を予兆するイメージは、記録され、大切にされてきた。聖書は、ファラオのために前兆を解き明かしたヨセフの夢や、他の王や預言者たちの夢について物語っている。東洋では、帝王や高僧たちもまた、重要な決断を下したり未来を予測したりするために、特別な夢に頼ることがしばしばあった。

では、予知夢と、単に日中の心配事や印象を反映したにすぎない、日常の混沌とし、脈絡のない夢との違いは何だろうか？ 予知夢を経験した人々はしばしば、それらが際立った明瞭さ、一貫性、そして強い感情的な印象を持つと描写する。それらは繰り返し現れることが多く、あるいは目覚めた後に言葉にできない「確信」を残し、無視できないメッセージであるかのように感じさせる。時には、未来の出来事を直接描写するのではなく、夢見る

者が自ら熟考し、深く考えなければ意味を理解できないような、象徴的なイメージや隠喩を用いることもある。

これらの夢はどこから来るのだろうか？それらは守護の存在からのお告げなのだろうか、亡くなった近親者の魂からなのだろうか、あるいは、私たちの内なるより深い認識の層——潜在意識、あるいはおそらくは「元神」の一部が、何らかの方法で時間の流れに触れたことによるものなのだろうか？私には確かな答えはないが、すべての夢を無意味なものとして軽視することは、おそらく何かを見過ごすことになると思っています。時として、日中の意識の喧騒が静まった睡眠の静寂の中で、重要なメッセージが私たちのもとに届こうとすることがあるのだ。

夢と並行して、「内なる声」——直観、靈感とも呼ばれる——もまた、多くの人々が予言的な要素を持ちうると信じる微細な情報チャンネルである。それは、いかなる論理的推論にも基づかない、突如とした感覚、原因不明の衝動、何かが起ころうとしていることの「予知」である。遠く離れていながらも我が子の危険をふと感じる母親、土壇場で急に進路を変えて事故を免れた人、あるいは大きな出来事の前に漠然とした不安を感じる… このような経験は珍しくない。

現代科学は、これらの現象を無意識の情報処理や、意識が認識しない微細な環境信号への感受性といった概念で説明しようと試みるかもしれない。しかし、多くの人々、特に深い精神生活を送る人々にとって、直観や靈感はさらに大きな意味を持つ。それは、より広大な智慧、個人の理性を超えたある種の「知」とのつながりと見なされている。内なる静けさを養い、内側からの微細な振動に耳を傾けることは、これらの言葉のない「声」に対して、私たちをより敏感にしてくれるだろう。

夢であれ直観であれ、それらは情報の源が外部世界からのみ来るのではないことを、私たちに思い出させてくれる。一人ひとりの内側にもまた、奇跡的な可能性、おそらく私たちがまだ探求を始めたばかりの、より広大で深い現実へとつながるチャンネルが秘められているのだ。

5. 言葉なき「前兆」：天地が語る時

言葉、文字、夢、あるいは個人の直観を通じて伝えられるメッセージの他に、もう一つ、古くから存在し、おそらく最も普遍的な予言の形式がある。それは、人間が自然界そのものから、天地の異常現象から、言葉なき「前

兆」を読み解くことである。太古の昔から、人々は宇宙が一体であり、天地の大きな変動はしばしば人界の重大な変化に対応、あるいはそれを予兆すると信じてきた。

多くの文化において、地震、火山の噴火、洪水、長期にわたる干ばつ、あるいは彗星、日食、皆既月食といった異常な天体の出現などの自然現象は、重要な前兆と見なされてきた。それらは神々の怒りのしるし、戦争や動乱、王朝の崩壊、あるいは偉人の誕生や死を予告するものと解釈され得た。バビロン、エジプト、中華の古代占星術師たちは、労を惜しまず空を観察し、星々の運行を記録し、その動きには国家や人間の運命に関する暗号が隠されていると信じていた。

大きな現象だけでなく、時には些細で偶然に見える出来事でありながら、奇妙で普段とは異なる起こり方をしたものも、古人によって前兆と見なされた。古木が突然枯れたかと思うとまた新芽を吹いたり、珍しい動物が突然現れたり、あるいは石や雲に奇妙な形が現れたり… これらすべてが予言的な意味を付与され得たのである。

現代に生きる私たちにとって非常に有名で身近な例の一つが、2002 年に中国貴州省平塘県で発見された「蔵字石」（文字を蔵する石）の出来事である（前の章で述べ

たように)。二つに割れた巨大な岩の断面に、自然に浮き出た文字列が発見された。科学者たちによれば、それは 2 億 7 千万年前の古代生物の化石から形成されたもので、その内容は「中国共産党亡」（中国共産党は滅ぶ）と読めるものであった。この出来事は、中国の公式メディアが最初の五文字（「中国共産党」）のみを認める方向で説明しようと試みたものの、世論に波紋を広げ、多くの人々によってこの国の政治的な未来に関する重要な前兆と見なされた。信じるか信じないかは別として、それは「石からのメッセージ」への信仰が今なお強く存在することを示している。

このような「物質的」なしるしの他に、大きな変動の前に現れる、集団的な靈感、非宗教的な「感応的」な前兆も存在する。例えば、地震や津波の前には、動物たちの異常行動が記録されたり、あるいは地域住民の間に原因不明の不安感や重苦しい感覚が広がることがある。おそらくこれは、古人の言う「同声相應じ、同気相求める」という現象であろう。宇宙のエネルギー場における大きな変動が、敏感な生命体の意識に微細な影響を与えるのである。

これらの言葉なき前兆を解釈するには、鋭い観察力、自然との深いつながり、そして文化的な象徴や（東洋文化における）陰陽五行の法則に関する知識が要求される。もちろん、すべての異常な出来事が前兆であるわけではなく、安易な憶測は迷信につながりかねない。しかし、天地や造化が独自の方法で「語りかける」可能性を完全に排除することも、おそらくは認識の自己制限であろう。これらの「前兆」は、曖昧に見えるかもしれないが、それでもなお予言の多様な形式の重要な一部であり、人間と広大な宇宙との密接な関係を私たちに思い出させてくれるのである。

テイラー・リードの見解

私たちが共に振り返ってきた事柄を通して、予言の「声」が実に様々なチャンネルを通じて人間に届くことが分かる。神聖なる存在からの直接的で厳かな啓示、特殊能力を持つ賢者たちの明確な「透視」から、古代の儀式を通じた変性意識状態、個人的なメッセージを帯びた夢、直観の静かな声、あるいは天地そのものからの言葉なき前兆に至るまで。それぞれのチャンネルは独自の特徴、独

自の「言語」を持っているようで、おそらく私たち一人ひとりの中にある異なる認識の階層に触れるのであろう。

この多様性を見ると、私の心に一つの大きな問いが自然と生まれる。これらすべての「声」の背後に、唯一の源泉は存在するのだろうか？あるいは、それらは実際に多層的な現実、異なる次元を反映しており、それぞれの次元が受け手のレベルや使命に適した独自のコミュニケーション方法とメッセージを持つのだろうか？私は最終的な結論を出す勇気はない。おそらく、答えはこの二つの可能性の間のどこかに、あるいは現在の理性で想像できる範囲を超えたところにさえあるのかもしれない。

しかし、これらすべての形式を通じて私が感じ取ることができる共通点が一つある。それは、常に情報を伝えたいという「意図」、単なる偶然性を超えたどこかからの「語りかけたい」という意志が存在するかのようだ、ということである。それが道徳的な戒めであれ、災いへの警告であれ、あるいはより明るい未来への約束であれ、予言のメッセージは、単に未来に対する人間の好奇心を満たすためだけではない、何らかの目的を含んでいるように思われる。

そしておそらく、「声」が正確にどこから来るのかを特定することよりも重要なのは、私たちがそれらをどのように聞き、受け止めるかということだろう。私たちは、真理のこだまと自らが作り出した幻影とを区別するのに十分な、魂の静けさを持っているだろうか？私たちは、現在の理解をはるかに超える事柄が存在することを認めるのに十分な謙虚さを持ち、たとえそれが心地よいものではなくても、そのメッセージに直面するのに十分な勇気を持っているだろうか？

あらゆる時代、あらゆる文化を通じて予言が根強く存在し続けていることは、より大きな何かとつながりたい、激動の人生の流れの中で意味と指針を見出したいという、人間の生来の渴望を示している。これらの「声」は、どこから来たものであれ、おそらく私たち自身を、私たちの周りの世界を、そして最も重要なこととして、より責任ある意識をもって未来を見つめ直すための、戒めであり、機会なのである。

しかし、これらのメッセージが私たちのもとに届くとき、もう一つの現実的な問いが浮かび上がる。私たちはそれらが信頼に値するかどうかをどうやって知ることができるのか？予言は、人々が語り継いできたように、本当に

「成就」するのだろうか？そして、もしそうだとしたら、その「成就」は明らかな事実なのか、偶然の一致なのか、それとも私たち自身の解釈の結果なのだろうか？これらこそ、次の章で読者の皆さんと共に探求していきたいこと、すなわち、託宣に残された「時の刻印」に目を向けることなのである。

* * * * *

第五章：時の刻印 — 成就と解 釈の技術

神聖なる存在からの啓示から、内なる静かな声や天地の前兆に至るまで、予言のメッセージが人間に届くとされる多様な道を共に歩んできた今、この領域に触れる者なら誰しものが抱かざるを得ない、探求心をかき立てる大きな問いが浮かび上がってくる。すなわち、それらの予言

は「真実」なのだろうか、と。何千年もの間、予言が人類の意識に呼び起こしてきた魅力、神秘性、そして畏敬の念は、おそらくその大部分が、それらが持つ奇跡的な能力——「成就」する能力——に起因するのだろう。それは、古代の文字列、遠い過去からの託宣が、歴史の流れの中で既に起こったこと、起こっていること、あるいはこれから起ころうとしていることを、驚くほど正確に描写しているかのように見える時である。

私たちの心の奥底では、誰もが未来に対して、自らの視界や制御の及ばない事柄に対して、本能的な好奇心を抱いているようだ。運命は本当にあらかじめ定められているのだろうか？何らかの方法で、万人のために開かれる前に時の書物のページを「見た」個人が存在するのだろうか？予言の「成就」という現象こそ、これらの問いを育む最も肥沃な土壌である。それは、因果の法則や自由意志に関する私たちの通常の理解に挑戦すると同時に、意識と宇宙の無限の可能性を垣間見せる扉を開いてくれる。

だからこそ、この章では、読者の皆さんと共に、託宣に残された「時の刻印」について、より詳しく考察したい。私たちは、歴史に記録されたいくつかの注目すべき「成

就」のケースを振り返り、客観的な態度でそれにアプローチを試みる。そしてその後、一步退いて、解釈という技術における挑戦や落とし穴を分析し、予言による未来へのアプローチを現代科学のレンズを通して比較してみる。これは、絶対的な肯定や否定を求める旅ではなく、人間の認識を形成し続けてきた一つの現象について、より深く理解するための旅なのである。

1. 時を超えた託宣：注目すべき「成就」のケース

成就したとされる予言の世界に足を踏み入れると、私たちはまるで古い図書館に迷い込んだかのようなのである。そこでは、どの書物も、どの文字列も、それぞれの謎と魅力を秘めている。伝説となった名前があり、その存在が通常の論理法則すべてに挑戦するような託宣の書物がある。解釈が常に困難な技術であり、懐疑が常に必要な伴侶であるとしても、予言と歴史的出来事との間の奇妙な「一致」が、常に私たちを立ち止まらせ、深く考え、問いを投げかけさせることは否定できない。このセクションでは、最終的な正誤の判断を下すためではなく、こ

れらの時代を超えたメッセージの強靱な生命力を共に「目撃」し、後のセクションでのより深い分析のための基盤を築くために、いくつかの代表的なケースを皆さんと共に見ていきたい。

1.1. ノストラダムス（フランス、16 世紀）：時を超えた謎めいた詩

西洋の予言者の中で最も広範な影響力を持つ人物を挙げるなら、おそらくミシェル・ド・ノートルダム、すなわちノストラダムス（1503-1566）を超える者はいないだろう。彼は、ヨーロッパが激動の時代にあった時期に生きたフランスの医師であり、占星術師であった。彼の畢生の作である『レ・プロフェシー』（予言集）は、1555年に初版が出版され、約千篇の四行詩（カトランと呼ばれる）から成り、「百詩篇」（各百詩篇は 100 のカトランから成る）にまとめられている。これらの詩の謎と魅力を生み出しているのは、その言語そのものである。古フランス語、ラテン語、ギリシャ語、オック語の複雑な混合であり、無数の造語、隠喩、倒置法、そして難解な略記法が用いられている。多くの人々は、ノストラダ

ムスが当時の教会による迫害を避けるため、あるいは彼のメッセージが、適切な時期に十分な縁と智慧を持つ者によってのみ解読されるように、意図的にこのような文体を用いたと信じている。

ノストラダムスの予言能力について語る際によく引用されるカトランの一つに、1666 年のロンドン大火を描写したとされる「第二百詩篇 第 51 番」がある：

Le sang du juste à Londres fera faute,
Bruslez par foudres de vingt trois les six,
La dame antique cherra de place haute,
De mesme secte plusieurs seront occis.

（仮訳：

「ロンドンにて正義の者の血は求められる
だろう、

二十三の六の稲妻によって焼かれ、

古代の貴婦人は高き場所より落ち、

同じ宗派の多くが殺されるだろう。」)

多くの研究者やノストラダムス愛好家は、注目すべき「一致点」を指摘している。「二十三の六」(vingt trois les six) という句は、しばしば $20 \times 3 + 6 = 66$ 、すなわち 1666 年を指すと解釈される。ロンドン大火はまさにその年に発生し、市の大半を焼き尽くした。「古代の貴婦人は高き場所より落ち」は、ロンドンの象徴的建築物であった旧セント・ポール大聖堂が炎によって甚大な被害を受け、後に再建されなければならなかった様子を描写しているとされる。「正義の者の血は求められるだろう」と「同じ宗派の多くが殺されるだろう」は、人的被害(公式な死者数はそれほど多くないが、財産と生活の破壊は極めて深刻であった)に関連するか、あるいは精神的な喪失や混乱についての隠喩的な表現である可能性もある。もちろん、これは単なる憶測であり、ノストラダムスの言語は多くの出来事に当てはめられるほど曖昧であるという意見も依然として存在する。しかし、これらの行を読み、歴史的出来事と照らし合わせると、奇妙な類似性の前に一種の戦慄を感じずにはいられない。

もう一つの例として、アドルフ・ヒトラーの台頭としばしば関連付けられるのが、「第二百詩篇 第 24 番」である：

Bêtes farouches de faim fleuves tranner;

Plus part du champ encontre Hister sera,

En caige de fer le grand fera treisner,

Quand rien enfant de Germain observera.

(仮訳：

「飢えた猛獣は川を泳ぎ渡るだろう。

戦場の大部分はヒスターに敵対するだろう。

偉大なる者は鉄の檻で引きずられ、

ドイツの子が何も見ていない時に。」)

ここで最も注目を集めるのは「ヒスター」(Hister)という単語であり、多くの人々によって「ヒトラー」(Hitler)の綴りを変えたもの、あるいはヒトラーが生まれた場所(オーストリアのブラウナウ・アム・イン、

ドナウ川の支流であるイン川の近く）であるドナウ川下流域の古い呼び名であるとさえ考えられている。「ドイツの子」（enfant de German – "German"はドイツを意味する German である可能性がある）と戦争の背景（「戦場の大部分」）は、その連想をさらに強める。「飢えた猛獣」や「鉄の檻で引きずられ」といったイメージも、ナチス・ドイツ体制の残忍な本質と、一部の主要人物の悲劇的な結末を描写していると見なされている。とはいえ、懐疑派は依然として、「ヒスター」は実在の地名であり、ヒトラーとの関連付けは後になってから増幅された偶然の一致に過ぎないと指摘している。

さらに注目すべきは、現代世界の変動を背景に、ノストラダムスのいくつかのカトランが、研究者や関心を持つ人々によって、最近の地球規模の出来事に関連していると解釈されていることである。その一つが、「第十百詩篇 第 72 番」であり、1999 年に中国で始まった法輪功への弾圧事件としばしば関連付けられる。

L'an mil neuf cens nonante neuf sept
mois,

Du ciel viendra un grand Roy d'effrayeur:

Ressusciter le grand Roy d'Angolmois,

Avant que Mars regner par bonheur.

（仮訳：

「千九百九十九年、七の月、

天から偉大なる恐怖の王が来るだろう。

アングルモアの大王を蘇らせるために、

その前後、マルスは幸運によって支配する。」）

この詩を中国での法輪功弾圧事件と関連付ける解釈者たちは、時間の驚くべき一致を指摘する。「千九百九十九年、七の月」（1999 年 7 月）は、まさに江沢民の指導下にある中国共産党（中共）が、真・善・忍の原理に基づく穏やかな瞑想修練法である法輪功に対して、残忍な弾圧を公式に開始した時期である。「天から偉大なる恐怖の王」は、弾圧の本質、すなわち国家が指導し、国中に広がる破壊的な、上からの恐怖政治を指しているとされる。注目すべき点として、1999 年 7 月の世界の出来事を振り返ると、中国における何千万人もの穏やかな市

民を標的とした弾圧の開始に匹敵する規模と世界的影響力を持つテロ事件や政治的変動は、他に見当たらないようである。

「アンゴルモアの大王を蘇らせるために」という句は、最も謎めいた点の一つである。最も一般的な解釈では、「アンゴルモア」（Angolmois）は「モンゴル人」（Mongolois）のアナグラムあるいは綴りを変えたものだとされる。この解釈に従えば、「モンゴルの王を蘇らせる」ことは、「恐怖の王」（弾圧勢力）の本質が、かつてのモンゴルによる征服について人々が抱くイメージと同様に、残忍で好戦的であり、文化的・精神的価値を破壊する性質を持つことを示唆している可能性がある。あるいは、この勢力が、精神的または統治方法において「モンゴル化」するかのよう、自国民に対して抑圧的で外来的な統治形態を繰り返していることを暗示しているのかもしれない。

しかし、最近の一部の分析家、特に共産主義体制の本質についてより深い理解を持ってこの予言を考察する人々は、「アンゴルモア」という単語に対して別の解読法を提案しており、それによって四行詩全体がさらに明瞭になる可能性がある。彼らは、「アンゴルモア」が、ノス

トラダムスによる中国語の句、例えば「暗共門」（An-gong-men）の音訳あるいは暗号化であるという仮説を立てている。

もし私たちが「アンゴルモア」をこの方向で、「暗」（Àn）を暗い、隠された、「共」（Gòng）を「共産」に関連するもの、そして「門」（Mén）を扉、門派、あるいは通路と解釈して読んでみると、「暗共門」は「共産主義の隠れた門派／扉」あるいは「闇の共産勢力」と理解することができる。その場合、「恐怖の王」（江沢民と中国共産党とされる）が「暗共門の王を蘇らせる」ことは、1999 年 7 月の残忍な弾圧を実行するために、この体制が共産主義システムに固有の最も暗い本質、隠された支配メカニズム、偽りと邪悪な手口を全面的に動員し、蘇らせなければならなかったことを意味する可能性がある。それは単に一個人の復活ではなく、共産主義という「邪門」そのものの権力の露呈と強化なのである。

最後の行、「その前後、マルス（マルクス／マルクス主義）は幸運／幸福によって支配する」という文脈に置くと、予言全体が強力な内的論理を持つ一つの絵を描き出しているように見える。つまり、1999 年 7 月に、独裁的で残忍な支配勢力（「天からの恐怖の王」）が行動を

起こす。この行動の深い目的は、共産主義システムの隠された本質とメカニズムを強化し、全面的に蘇らせること（「暗共門を蘇らせる」）である。これらすべては、マルクス主義が依然として存在し、支配しており、すべての行動（弾圧を含む）が「人民の幸福のため」という名目で覆われている状況下で起こるのである。

この視点から四行詩全体の意味を簡潔に解釈すると、次のようになるかもしれない。

「1999 年 7 月、

一人の恐怖の王が天から来るだろう。

暗共門（共産主義の隠された本質／メカニズム）を蘇らせるという目的のために、

マルクス主義が依然として人民の幸福を名目に（弾圧行動を実行するために）支配している中で。」

もちろん、これは依然として推測に基づく解釈であり、ノストラダムスがこれらの行を書いたときに何を考えていたかを確実に知ることはできない。しかし、それは一つのことを示している。すなわち、古代の予言は、深く

熟考され、重大な歴史的出来事と結びつけられるとき、おそらく作者自身も予期しなかった、あるいは後世の発見を待つために意図的に隠したであろう意味の層を開く可能性があるということだ。

この解釈は、多くの論争を巻き起こす可能性があるにもかかわらず、中国の人権状況や法輪功への弾圧について関心を持つ人々から特に注目を集めていることに、私は気づいている。それは、ノストラダムスの古代の詩が、時代の憂慮と渴望を反映し、新しい文脈の中で「読まれ」「解説され」続けていることを示している。また、時には最も重要なメッセージが、見慣れた言葉の中に巧みに隠されていることを、私たちに思い出させてくれる。

ノストラダムスの四行詩におけるこのような「一致」に初めて触れたとき、この例に限らず他の多くのケースにおいても、16 世紀の文字列が、何世紀も後の具体的な出来事や深い問題に「触れる」ことができる可能性に対して、大きな好奇心と驚きを感じずにはいられなかった。理性は常に事後的な解釈に慎重であるべきだと告げるが、これらの詩が持つ執拗なまでの魅力と示唆に富む力は否定できない。

もちろん、ノストラダムスの予言にアプローチする際には、最大限の注意を払わなければならない。彼の言語は、前述のように、非常に曖昧で象徴性が高い。これは一面では神秘的な魅力を生み出すが、他面では無数の解釈の可能性を開き、それらの解釈が常に確固たる根拠を持っているわけではない。しかし、何世紀にもわたり、ノストラダムスの詩が多くの人々の意識の中に、警告として、あるいは激動の未来の啓示として、常に存在し続けてきたことは否定できない。研究者としての私にとって、それらは単なる「予測」ではなく、独特の文化遺産であり、人間の運命について知りたいという恐怖、希望、そして渴望を映し出す鏡なのである。

1.2. 20 世紀西洋のサイキック予言者：見えざる世界からの声

ノストラダムスのような謎めいた託宣の書を残した古典的な予言者の他に、20 世紀はまた、特殊な超能力を持ち、大衆や研究者の大きな注目を集めた個人たちの出現を目撃した。彼らは暗号化された詩を残すのではなく、その情報の源が常に奇跡的で不可解なものでありながら

も、より直接的なメッセージ、すなわち「リーディング」をしばしば提供した。最も著名な二人の名は、おそらくエドガー・ケイシーとジーン・ディクソンであろう。

エドガー・ケイシー（「眠れる予言者」 - アメリカ、1877-1945）

エドガー・ケイシーはしばしば「眠れる予言者」あるいは「ホリスティック医療の父」と称される。彼の生涯と能力は、20 世紀において最も丹念に記録され、研究された心霊現象の一つである。ケンタッキー州の農家に生まれたケイシーは高い学歴を持たなかったが、幼い頃から非凡な兆候を見せていた。彼の特異な能力が真に発見されたのは、彼が自身の失声症を自力で治そうと試みる中で、自らを催眠状態あるいは深い眠りのような状態に導いた時であった。その状態において、彼は病気を正確に診断し、しばしば自然療法であり、時には非常に独創的で時代を先取りした効果的な治療法を提示することができた。

奇跡的なことに、「眠っている」間、ケイシーは無限の知識の源にアクセスできるかのようにであった。彼はその

源を「情報」（The Information）あるいは「アカシック・レコード」（Akashic Records）と自ら呼んだ。これは神秘主義やヒンドゥー教の学派における概念で、全ての生命の全生涯にわたる思考、行動、感情を記録した一種の「宇宙の図書館」であるとされている。質問者（通常は彼の妻や秘書）から問いかけられると、「眠れるケイシー」は、目覚めている時の「日常のケイシー」が全く知らない、あるいは理解できないような複雑な医学用語さえも用いて、理路整然と詳細に答えるのであった。

エドガー・ケイシーによる 14,000 以上の「リーディング」は記録され、彼自身がバージニアビーチに設立したエドガー・ケイシー研究会（Association for Research and Enlightenment - A.R.E.）に保管されている。これらのリーディングの大部分は健康と治療に関するものであるが、決して少なくない部分が、精神的な問題、哲学、前世、そして個人と世界の未来に関する予測にも言及している。

ケイシーの「リーディング」を検証すると、成就したとされる多くのケースが強烈な印象を与えている。医学の分野では、彼が一度も会ったことのない、時には何千マ

イルも離れた人々の病気を、その名前と住所だけを頼りに正確に診断したという無数の記録がある。彼は病名を挙げるだけでなく、内臓器官の状態や病の根本原因（時には心理的要因や前世からのカルマに関連することもあった）を詳細に描写した。さらに重要なことに、彼はしばしば、食事療法、穏やかな運動、ハーブ療法、ひまし油の湿布、あるいは脊椎の調整法など、具体的な治療計画を提示した。当時の一流の医学に絶望していた多くの患者が、これらの指示に従うことによって健康を取り戻した。特筆すべきは、彼が提案した多くの療法、例えばバランスの取れた食事の重要性、体のアルカリ化、あるいは心と身体に関連性などは、彼の時代を数十年も先取りした、現代のホリスティック医療や機能性医学の観点と非常によく似ていることである。

世界の出来事に関しては、ケイシーの最も著名な予測の一つは、ウォール街の株式市場の崩壊に関する警告である。1929 年初頭、アメリカ経済が「狂騒の 20 年代」という未曾有の楽観主義の中にあった時、ケイシーはいくつかのリーディングで、大きな危機が迫っているため、市場から資金を引き揚げよう人々に慎重になることを勧めた。その年の 10 月、「暗黒の火曜日」が世界大恐慌の引き金となり、1930 年代を通じて続いたことは、

彼の警告が正しかったことを証明した。同様に、1930年代にヨーロッパに戦争の影が差し始めると、ケイシーは第二次世界大戦の主要な展開を予見していたとも言われる。彼は独裁勢力の台頭、国家間の同盟、そして世界を飲み込むであろう地球規模の紛争について語り、それらは後に想像を絶する残忍さで現実のものとなった。

地質学の分野でも、ケイシーは多くの注目すべき予測をしたが、その成就の度合いや検証可能性はより複雑である。彼は未来における地球表面の大きな変化について頻繁に語っており、それには惑星の地軸の変動、地震、火山の噴火、多くの沿岸地域（カリフォルニアやニューヨークなど）の水没、そして失われたアトランティス大陸を含む新たな陸地の海底からの隆起などが含まれる。アトランティスは、彼が古代文明と歴史に関する多くのリーディングで非常に詳細に描写したテーマである。今日の気候変動、海面上昇、そしてますます増加する地震活動を注視している多くの人々は、ケイシーのこれらの予言が徐々に成就しつつあると信じている。しかし、彼の地質学的変動の時期と具体的な場所に関するいくつかの予測は、彼が描写した通りには起こらなかった、あるいはそれらは未だ遠い未来に属し、現時点では確認が困難であるということも客観的に認識する必要がある。この

ようなマクロで長期的な予測にアプローチする際には、慎重さが不可欠である。

エドガー・ケイシーを特別な存在にしているのは、彼の予測だけではなく、その人柄と生涯でもある。彼は敬虔な信者であり、質素な生活を送り、常に他者を助ける目的でその能力を用い、健康に関するリーディングに対してはしばしば報酬を受け取らなかった。彼が残した一貫性、詳細さ、そして膨大な情報の量、それに加えて記録された奇跡的な治癒のケースは、エドガー・ケイシーを独特の心霊現象たらしめ、今日に至るまで関心と研究を引きつけ続けている。私にとって、彼の物語は、現代科学がおそらく未だに触れることのできない知識の源泉と潜在的な能力が人間の中に存在することを示す、力強い証なのである。

ジーン・ディクソン（アメリカ、1904-1997）

20 世紀のアメリカにおける超能力者と予言者の世界で、もう一人非常に有名な人物がジーン・ディクソンである。彼女は占星術師であり、未来を予見する能力を持つと自称し、著名人や国内外の政治的な出来事に関する予測を

頻繁に行ったことで広く知られている。エドガー・ケイシーが催眠状態での「リーディング」を行ったのとは異なり、ジーン・ディクソンは通常、覚醒状態で「ビジョン」や「靈感」を受け取り、時には夢や、彼女がよく用いた道具である水晶玉を通してそれらを得た。

ジーン・ディクソンの名声が頂点に達したのは、彼女の最も有名な予測の一つが悲劇的な形で成就したかに見えた後のことである。それは、アメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディの暗殺事件であった。記録によれば、1952 年、『パレード』誌とのインタビューで、彼女は 1960 年の大統領選挙は民主党員が勝利し、その人物は後に在任中に暗殺されるか死亡するだろうと予言した（ただし、必ずしも最初の任期中とは限らない）。民主党員であるジョン・F・ケネディが 1960 年に当選し、その後 1963 年 11 月に暗殺されると、ジーン・ディクソンの予言は再び取り上げられ、広く流布し、彼女に絶大な名声をもたらした。

ケネディに関する予測の他に、ジーン・ディクソンは成就した、あるいは少なくとも注目すべき類似点を持つとされる、いくつかの他の予言も行ったと言われている。例えば、彼女はマハトマ・ガンディーの死、インドの分

離独立、ソビエト連邦によるスプートニク衛星の打ち上げ、あるいは他の著名人の死を予見したとされる。彼女はまた、選挙、政治的変動、そして時には自然災害に関する予測も頻繁に行った。

しかし、他の多くの予言者と同様に、ジーン・ディクソンの予測がすべて真実になったわけではない。実際、多くの分析家は、彼女には相当数の誤った予測もあったと指摘している。例えば、彼女はかつて第三次世界大戦が1958年に始まると予測したり、ソビエト連邦が最初に月面着陸する国になると予測したり、あるいはいくつかの選挙結果に関する不正確な予測もあった。この現象は時に「ジーン・ディクソン効果」と呼ばれる。これは、人々が的中した予測（ヒット）のみを記憶に留め、膨大な数の外れた予測（ミス）は無視したり忘れたりする傾向を指す用語である。

とはいえ、ジーン・ディクソンが長期間にわたってアメリカの大衆に与えた影響は否定できない。彼女は、ロナルド・レーガン大統領の妻であるナンシー・レーガン夫人を含む、一部の権力者の非公式な顧問であった。ナンシー夫人は、大統領の日程を調整する際に彼女の意見を参考にしたと言われている。彼女の生涯と予言に関する

本はベストセラーとなり、彼女は頻繁にメディアに登場した。

ジーン・ディクソンのケースを振り返ると、奇妙なほどの中したかに見える予測という「輝点」と、実現しなかった予言という「曖昧な部分」との混合が見られる。これは予言能力の本質について問いを投げかける。それは安定した、絶対的に正確な能力なのか、それとも、時には明確な信号を捉えるが、時にはノイズが入ったり解読を誤ったりする一種の情報「チャンネル」のようなものなのだろうか？そして、一人の予言者の名声は、全体的な中率よりも、いくつかの壮大な「一撃」に大きく依存しているのではないだろうか？これらの問いは、後のセクションで引き続き議論されることになる。

ジーン・ディクソンの物語は、エドガー・ケイシーと同様に、20 世紀において、ますます科学技術志向になっていく社会の中ですら、未来を予見する能力と超能力を持つ人々の存在への信仰が依然として非常に強かったことを示している。それらは「見えざる世界からの声」であり、私たちの理解の限界に挑戦し、現実の他の次元を示唆しているのである。

1.3. 東洋の叡智：歴史を導いた託宣

前のセクションで共に探求したように、西洋からの予言は、ノストラダムスの謎めいた詩を通じてであれ、エドガー・ケイシーやジーン・ディクソンの特別な状態からのメッセージを通じてであれ、未来に関する人類の認識の流れに深い足跡を残した。今、私は皆さんと共に東洋に目を向けたい。そこでは、古代の叡智がしばしば個々の出来事の予測にとどまらず、国家の運命、歴史の盛衰の周期といったパノラマ的な絵を描き出し、その中に社会道德に関する深い教訓を秘めているのである。

東洋の託宣は、しばしば異なる趣、おそらくはよりマクロな視野を持ち、人間の運命、社会、そして国家が天地の法則と密接に結びついているという「天人合一」の観念と関連している。この点をより明確に感じ取るために、いくつかの代表的なケースを見ていくことにしよう。

● 『馬前課』（ばぜんか）（諸葛亮作とされる - 中国、三国時代）：

『馬前課』は、中国文化において非常に有名な、簡潔ながらも力強い予言書であり、三国時代の傑出した軍師である諸葛亮（181-234）の作とされる。この作品は 14 の「課」（教訓あるいは卦）から成り、各課は四行詩で、蜀漢の時代から未来に至るまで、中国の一つの王朝または大きな歴史的段階を予測している。『馬前課』の簡潔さと高い象徴性は、何世代にもわたる研究と解釈の対象となってきた。

明確に成就したとされるいくつかの課を見てみよう。

➤ **第一課（蜀漢の予言）：**

原文：

「無力回天,

鞠躬盡瘁

陰居陽拂,

八千女鬼」

意味：

天地を覆す力なく、（ひたすら）身をかがめ力を尽くす

陰がとどまり陽は払われ、八千の女鬼。

解釈：最初の句は、諸葛亮が全力を尽くしたにもかかわらず漢王朝を復興できなかったその生涯を描写しているとされる。「鞠躬尽瘁、死而後已」（身をかがめ力を尽くし、死ぬまでやめない）は彼の有名な言葉である。「陰居陽拂」は蜀漢の衰退を指す。「八千女鬼」（bā qiān nǚ guǐ）は「魏」（Wèi）の字を分解（文字分解）したものであり、蜀漢が最終的に魏によって滅ぼされることを暗示している。

➤ **第五課（唐朝の予言）：**

原文：

「十八男兒，

起於太原

動則得解,

日月麗天」

意味：

十八の男児、太原より起こり

動けばすなわち解を得、日と月は天に麗し。

解釈：「十八男児」（shí bā nán ér）は合わせると「李」（Lǐ）の字となり、唐王朝の姓である。李淵は太原で挙兵した。「日月麗天」（rì yuè lì tiān – 日月が天に美しい）は「明」（Míng）の字に分解できるが、ここでは通常、唐朝の繁栄と栄光を描写しているか、あるいは則天武后（武照 – 武曌、この字は「日」「月」が上に、「空」が下にあり、日と月が空にあるという意味も持つ）を暗示しているとも解釈される。「動則得解」（動けばすなわち解を得る）は、創業初期の順調さを示している可能性がある。

➤ **第六課（宋朝の予言）：**

原文：

「二十九換，
春夏秋冬
神州出現，
盡在其中」

意味：

二十九回変わり、春夏秋冬
神州現れ、すべてその中にあり。

解釈：宋（北宋と南宋）は 319 年間続き、
18 代の皇帝がいた。「二十九換」（èr shí
jiǔ huàn – 二十九回の変化）には多くの解
釈があり、年数や皇帝の数、あるいは何ら
かの出来事に関連するとされるものもある。
「神州」（Shénzhōu）は中国の別名であ
る。研究者たちは「二十九換」の正確な意

味について今なお多くの議論を交わしているが、この課が宋朝を指していることは広く受け入れられている。

テイラーの予備的所見：『馬前課』は異なる予言のスタイルを示している。簡潔で凝縮されており、極めて含蓄のある言葉とイメージを用いて一つの王朝の運命全体を包み込んでいる。その解釈には、文化、歴史、そして文字分解の技術に関する深い理解が要求される。

● チャン・チンの託宣（グエン・ビン・キエム - ベトナム、16 世紀）：

ベトナムの歴史と文化の流れの中で、チャン・チン・グエン・ビン・キエム（1491-1585）は傑出した文化人であり、詩人、教育者、そしてその託宣が民衆の心に深く根付いた予言者でもあった。彼の作品、特に口承で伝えられたり、『白雲庵詩集』や『程先生国語』に記録されたりした託宣の数々は、時局に対する該博な見識を示す

だけでなく、国の未来に関する驚くべき予測を含んでおり、その多くが驚くほどの的中したとされる。

チャン・チンの託宣はしばしば概括的で、隠喩的なイメージと平易な言葉を用いるが、その中には大きなメッセージが含まれており、激動の歴史的段階において、政治勢力と一般民衆の双方を導いた。

- **「横山一帯、万代容身」（ホアンソン山脈一帯は、万代にわたり身を寄せられる）**：これはおそらく最も有名な託宣の一つであり、重要な歴史的決定と結びついている。言い伝えによれば、グエン・キムの次男であるグエン・ホアンが、義兄であるチン・キエムに害されることを恐れ、人を遣わしてチャン・チンの意見を求めた。チャンは何も言わず、ただ黙って盆栽の岩の上を這う蟻の群れを指さし、「横山一帯、万代容身」と何気なく言った。グエン・ホアンはその意を悟り、トゥアンホアの地（ホアンソン山脈の南側）の統治を願い出て、そこから南河地方におけるグエン氏の礎を築き、長く続くチン・グエン両氏の対立の構図を生み出した。この託宣は、単なる当座の助言ではなく、一族全体の指針となり、ベトナム史の新たな章を開いた。

- **マク氏とチン氏に関する託宣：** 黎・莫・鄭の複雑な時代背景の中、チャン・チンの託宣はしばしば各勢力から助言の源として求められた。多くの異本や物語があるが、いくつかの句はマク氏の存亡がチン氏と結びついていると予言したとされ、例えばマク氏がチン氏の存在に依存して存続することや、マク氏の崩壊が特定の勢力の衰退を招くといった解釈がなされている。

テイラー・リードの注記：この歴史的背景における個々の託宣の絶対的な正確性と具体的な解釈を検証することは困難であるが、民衆の中でのその生命力と、当時の政策決定への影響は否定できない事実である。

- **フランス植民地時代と国土分断に関する予言：** いくつかの託宣は、研究者や民衆によって、19 世紀、20 世紀のフランス植民地時代と国の大きな変動を予見したものと解釈されている。例えば、「九九乾坤已定、青年古月自然」（九九にして乾坤定まり、青年古月は自ずから現る）という句は、しばしば九九＝八十一、すなわち 81 年間のフランス支配を暗示

していると解釈される（1862 年から 1945 年までは 83 年、あるいは 1884 年から 1945 年までは 61 年であり、異なる計算方法が議論を呼んでいる）。

「青年」は合わせて「主」の字となり、「古月」は合わせて「胡」の字となり、主権を取り戻す上でホー姓を持つ指導者の役割を示唆している。あるいは、国土の分断や戦争を暗示する句：「馬蹄羊脚英雄尽、申酉年来見太平」（馬の蹄、羊の足で英雄は尽き、申酉の年に至りて太平を見る）は、多くの人々によって戦争と終結の時期に関連付けられている。解釈についての議論はあるものの、これらの託宣が集合的記憶の一部となり、歴史の各段階を通じて民族の不安と希望を反映してきたことは否定できない。

国家規模の予言の他に、チャン・チンはまた、特定の出来事や個人に的中した託宣でも有名であり、彼の驚くべき透視能力を示している。

- **政治勢力への助言：**グエン・ホアンだけでなく、黎王、鄭主、莫王も行き詰まると人を遣わしてチャンの意見を求めた。マク氏に対しては、「高平雖浅、可延数体」（カオバンは小さいが、家業を保つことができる）と助言し、案の定、マク氏はタンロンで

敗れた後、カオバンに退き、さらに 80 年近く存続した。衰退期にあった黎・鄭氏に対しては、「寺を保ち仏を祀ればお供え物が食べられる」と助言し、これは黎王を祀るという名分を保てば（仏を祀るように）、長く恩恵を受けられる（お供え物を食べるように）ということを暗に示した。

- **グエン・コン・チューと聖なる祠に関する予言：** もう一つの有名な逸話は、チャン・チンが、彼から 200 年以上後の歴史上の人物であるグエン・コン・チューについて予言したことである。言い伝えによれば、グエン・コン・チューが若く、傲慢で、家を建てるために聖なる祠を壊して木材を得ようとした際、村人たちがそれを止め、祠の石碑に刻まれたチャン・チンの託宣の句を見せた。「明命十四、大地出英雄、破田、見路、出聖人、其人名著、字公、破寺之後、功名始成」（明命帝の 14 年、大地に英雄現る。田を破り、道を開き、聖人出ず。その人の名はチュー、字はコン。寺を破壊した後、功名成り始める）。グエン・コン・チューはそれを見て半信半疑であったが、それでも祠を壊すことを決めた。案の定、その後彼は科挙に合格して官僚となり、多くの功績を立てた。この託宣は、名前、字、出現の時

期だけでなく、グエン・コン・チューの成功と結びついた「寺を破壊する」（破寺）という行為までも正確に言い当てており、後世の人々はチャンの予言の才能に一層感服した。

テイラーの予備的所見： チャン・チンの託宣は、東洋の予言の重要な特徴を示している。すなわち、実践的であり、民族の運命と密接に結びつき、行動を方向付ける性質である。チャン・チンの深遠さは、単に「見る」能力にあるだけでなく、彼がメッセージを伝える方法、すなわち、含蓄に富みながらも、縁ある者が理解するのに十分な形で伝えるそのやり方にもある。

● 『梅花詩』（ばいかし）（邵雍作 - 中国、宋の時代）：

『馬前課』の他に、北宋時代の傑出した哲学者、歴史家、そして予言者であった邵雍（しょうよう、1011-1077）による『梅花詩』（梅花の詩）もまた、彼の時代から数世紀にわたる中国の歴史的出来事を予測したとされる有名な予言書である。作品は 10 首の七言絶句から成り、各詩が一つの歴史的段階に対応している。『梅花詩』は、

その洗練された言語、豊かなイメージ、そして高い象徴性で知られている。

いくつかの例を見てみよう。

➤ **第一首（北宋についての予言）：**

原文：

「蕩蕩天門萬古開，
幾人歸去幾人來。

山河歷歷觀天地，
一旦浮雲暗帝臺。」

意味（参考訳）：

広々たる天門は万古に開かれ、
何人が去り、何人が来たことか。
山河は歴然と天地を觀、
ある朝、浮雲が帝の座を暗くする。

解釈：この四行詩は、宋王朝の始まり（「天門萬古開」）と、変動や変化（「幾人歸去幾人來」）を描写している。最後の句「一旦浮雲暗帝臺」（ある朝、浮雲が帝の座を暗くする）は、1127 年の靖康の変を暗示しているとされる。この事件では、北宋の徽宗、欽宗の二人の皇帝が金軍に捕らえ去られ、北宋王朝は終焉を迎えた。「浮雲」（浮雲）は、しばしば外敵の勢力や、栄光を覆い隠す予期せぬ出来事を指すために用いられる。

➤ **第六首（清朝と漢民族が再び王となる出来事の予言）：**

原文：

「漢水茫茫不復流，

徒將忍氣吞殘候。

諸侯亂世紛紛擾，

幾見牛郎又見牽。」

意味（参考訳）：

漢水は茫々として二度と流れず、

ただ気を忍びて残酷な時を耐えるのみ。

諸侯は乱世に紛々と騒ぎ、

幾度か牛郎がまた牽（女）を見る。

解釈：「漢水茫茫不復流」（漢水は茫々として二度と流れず）は、通常、漢（漢民族）の運気が衰え、もはや国を治めることができなくなったこと、すなわち満州人が清朝を建てたことを暗示していると理解される。

「徒將忍氣吞殘候」には多くの解釈があり、忍耐や権力の移譲に関連する可能性がある。最後の二句「諸侯亂世紛紛擾、幾見牛郎又見牽」は、清朝末期の、各勢力が台頭し、動乱が起こり、そして最終的に漢民族が復権する様子（牛郎が織女に再会する――再会、復興）を描写している。これは通常、

清朝を打倒し、中華民国を建国した 1911
年の辛亥革命に関連付けられる。

➤ **第十首（20～21 世紀の特別な時期に関する予言）：**

原文：

「火龍提爪日月傷，
擾洛中原百鍊鋼。
一圭雞三點血，
桃花笑逐浪滔滔。」

意味（参考訳）：

火龍が爪を振り上げ日月は傷つき、
洛陽・中原をかき乱す百鍊の鋼。
一羽の鶏に三点の血、
桃の花は笑いながら滔々たる波を追う。

解釈：この詩は、多くの研究者によって、20 世紀半ばから現在に至るまでの中国における出来事、法輪功への弾圧を含めて、成就していると考えられている。

「火龍提爪日月傷」（火龍が爪を振り上げ日月は傷つく）：「火龍」（火の龍）はしばしば赤色、すなわち共産主義の象徴と関連付けられる。「日月」（日月）は合わせて「明」（明）の字となり、光明や正義を指す。この句は、精神的・道徳的な価値に対する破壊や弾圧を暗示している可能性がある。

「擾洛中原百鍊鋼」（洛陽・中原をかき乱す百鍊の鋼）：中原（中国）における混乱、闘争、粛清、そして厳しい試練を描写している。

「一圭雞三點血」（一羽の鶏に三点の血）：「雞」（鶏）は鶏である。「一圭雞」（一圭の鶏）は文字分解が可能である。「雞」（雞）の字から「一」と「圭」（二つの「土」を重ねたもの）の部分を取り除くと、

「鳥」の部首が残る。「三點血」（三点の血）は、三つの水の点（さんずいゝ）を「忍」の字に加えると「濁」（汚い、不浄）となること、あるいは残忍な迫害や流血を暗示している可能性がある。一部の解釈では、「一圭雞」を鶏の形をした中国の地図と結びつけ、「三點血」を「真・善・忍」を重ねる法輪功を含む信仰団体への弾圧と関連付けている。「真・善・忍」（真善忍）の三文字の一部が取り除かれたり、汚されたりすることも一つの解釈である。

「桃花笑逐浪滔滔」（桃の花は笑いながら滔々たる波を追う）：「桃花」（桃の花）は、新たな革新、新しい春、あるいは李姓を持つ人々（「桃李」はしばしば対で使われ、「李」の字は「木」と「子」から成るため）を暗示している可能性がある。「笑逐浪滔滔」（笑いながら滔々たる波を追う）は、困難や試練（荒波）を乗り越え、より明るい未来、精神的な復興へと向かう姿を思い起こさせる。

邵雍の『梅花詩』は、洗練された詩的言語、豊かなイメージを用い、多くの意味の層を生み出している。これらの詩の解釈は、通常、歴史的、文化的知識と直観の組み合わせを必要とする。『梅花詩』における預言は、単に出来事を描写するに留まらず、道德や盛衰の理に関する評価をも仄めかしている。

● 劉伯温（りゅうはくおん）の予言（中国、明の時代）：

劉伯温（1311-1375）、本名を劉基（りゅうき）は、明朝の最も著名な開国の功臣の一人であり、軍事家、政治家、文人であると同時に、偉大な予言者とも見なされている。彼の作とされる予言書、例えば『焼餅歌』（しょうへいか）、『金陵塔碑文』（きんりょうとうひぶん）、あるいは『推碑図』（すいひず - しばしば「碑文の解説」または「碑を押す図」と訳される）は、広く流布し、明の時代から未来に至るまでの歴史的変動に関する中国人の認識に深い影響を与えてきた。

ここでは、これらの作品からいくつかの代表的な一節、特に大きな出来事に成就し、警告のメッセージを帯びているとされる部分に焦点を当てる。

- 『焼餅歌』（焼餅歌－焼餅の歌）：この作品は、明の太祖・朱元璋と劉伯温との間の問答形式で記述されている。

- ☆ **明の崩壊と清の台頭について：**『焼餅歌』には、崇禎帝の自害と満州軍の中原侵攻を描写したと解釈される一節がある。例えば、次のような句である。

原文：

「此時廟社屬弟兄，自相殘殺又何從。」

意味：この時、宗廟社稷（国）は兄弟に属し、互いに殺し合うなら、どこに従えばよいのか？

原文：

「待到萬子萬孫盡，十六人為首始安寧。」

意味：万の家の子や孫が絶え果てるのを待ち、十六人が長となって初めて安寧となる。

- ☆ **末期と災厄についての予言：**『焼餅歌』はまた、新たな秩序が確立される前の最終段階における、混乱し、道徳が衰退し、天災と人災が絶えない時代についても描写している。例えば、次のような句である。

原文：

「世界談笑愚中愚，信者餓死疑者肥。」

意味：世の人々は愚か者の中の最も愚かな者を語り笑い、信じる者は餓死し、疑う者は肥え太る。

原文：

「十份子失，九不全，民眾苦不堪言。」

意味：十のうち九を失い、残った一も完全ではない。民衆の苦しみは言葉に尽くせない。

- 『**金陵塔碑文**』（**金陵塔碑文 – 金陵塔の碑文**）：この碑文は劉伯温の作とされ、明の時代以降の出来事を予言している。

- ☆ **20 世紀中国の大きな変動について：**『金陵塔碑文』の多くの部分は、後世の研究者によって、辛亥革命、日中戦争、国共内戦といった出来事に成就していると解釈されている。例えば、

原文：

「人口有十一，三丁有一丁。」

解釈：「人口」は「口」と「人」の字から成り、総画数は 11 画で、蔣（蔣）の姓を暗示する。「三丁に一丁あり」とは、三つの「丁」の部首を重ねると「毛」の字となり、毛沢東を指す。

原文：

「二四八，蔣江出。」

解釈：「二四八」は 2、4、8 であり、時期または軍事暗号（八路軍に関連する可能性）を指す。「蔣江出」（蔣、江を出づ）とは、蒋介石が長江を渡って台湾へ撤退したことを暗示する。

- ☆ **大災難と生き残る道についての警告：**『金陵塔碑文』には、末劫の時代における恐るべき大災難と、希望の兆しに関する非常に注目すべき一節もある。

原文：

「人人歡樂，個個憂愁。有飯無人食，有衣無人穿。」

解釈：この句は、善と悪が明確に分かれ、善人は救われ、悪人は淘汰される様を描写している（訳注：原文

のベトナム語訳と漢文に差異があるが、ここでは漢文に準拠して解釈）。

原文：

「輕氣揚，濁氣沉。肉佛在世，說是非。」

意味：軽い気は昇り、濁った気は沈む。肉身の仏がこの世におられ、是非を説く。

原文：

「若問瘟疫何時現，但看九冬十月間。」

意味：もし疫病がいつ現れるかと問うならば、ただ九の冬と十月の間を見よ。（「九冬十月」は通常、晩秋

から初冬、つまり旧暦の 9 月から
10 月の頃を指す。)

原文：

「天有眼，地有眼，人人都有一雙眼，
天也翻，地也翻，逍遙自在樂無邊。」

解釈：この一節は、天地の公平さ、
全ての行いが見届けられていること、
そして大きな変動の後、乗り越えた
人々は安楽な生活を送ることを強調
している。

特に、希望の道を示すとされる句がある。

原文：

「能解金陵塔，方稱是賢人。」

意味：金陵塔（の謎）を解くことが
できる者こそ、賢人と称される。

原文：

「能解其中味，賜你黃金帶。」

意味：その中の意味を理解できる者には、黄金の帯を賜う。

解釈：ここで「味を解す」とは、心を静め、詩や予言の言葉を熟読して深く理解し、それによって内なる安定に立ち返ることと理解できる。一方、「黄金の帯」は、この世の物質的な価値や名利を象徴する。物質への執着を手放し、精神的な価値に立ち返って初めて、人は災厄から逃れることができるのである。

一部の解釈では、大いなる道（大道）や、人々が災厄を乗り越えるのを助ける普遍的な原理、例えば心を修め性を養うというメッセージを探求することにも関連付けられている。

➤ 『推碑図』（すいひず - 碑文の解説／碑を押す図）：

この作品は、末法の時代、大災難、そして弥勒仏（あるいは一人の救世主）の出現に関する非常に詳細な予言でしばしば言及される。

☆ **大災難の描写：**『推碑図』は恐るべき災厄を非常に具体的に描写している。

原文：

「十愁天下亂悠悠」

意味：十の愁いは、天下が広々と乱れること。

原文：

「九愁屍體枯骨無人收」

意味：九の愁いは、屍や枯骨を誰も葬らないこと。

原文：

「八愁道路艱難無人行」

意味：八の愁いは、道が陰しく誰も
行かないこと。

☆ **弥勒仏と「真・善・忍」の三文字に関する予言：**

これは『推碑図』における最も際立った点の一つであり、多くの人々が関心を寄せている。劉伯温は次のように記している。「彌勒佛坐寶山，講說真法度原人。」（弥勒仏は宝の山に座し、真の法を説いて元の人々を済度する。）そして特に、彼は核心となる三文字に言及している。

「上上天皇佛 真善忍 三字佛，中下人民 皆歸三字佛，得在三字佛前 過邊境，佛國仙境 樂無邊。」

（至高の天の皇仏は真善忍の三文字の仏、中下の人民は皆な三文字の仏に帰依し、三字の仏の前で境界を越えることができれば、仏国仙境の楽しみは無限である。）この一節は、「真・善・忍」が核心的な原理であり、救われ、より良い未来へと入るための道であることを明確に示している。

* * *

劉伯温の予言は、『焼餅歌』であれ、『金陵塔碑文』であれ、『推碑図』であれ、すべてが何世紀にもわたる広大な視野を示している。それらは歴史的出来事を予測するだけでなく、道德、因果応報の法則に関する深い警告を含み、重要な岐路に立つ人類に希望と道を啓示している。「真・善・忍」のような原理を救済の道として言及している点は、非常に深く考えるべき点である。

* * *

チャン・チン・グエン・ビン・キエム、諸葛亮（『馬前課』を通じて）、邵雍（『梅花詩』を通じて）、あるいは劉伯温からの予言を振り返ると、東洋の予言の叡智に見られる、いくつかの際立った共通の特徴と深いメッセージが浮かび上がる。

第一に、それらは通常、壮大なスケールを持ち、国家や民族全体の運命、あるいは王朝の盛衰に焦点を当ててい

る。これらの予言者たちは、歴史の大きな流れ、社会の動きを支配する法則を見通す能力を持っているかのようである。

第二に、これらの託宣はしばしば歴史の周期——成住壊滅の循環、盛衰の繰り返しを強調する。これは、歴史が偶然の出来事の連続ではなく、一定の法則に従っており、一つの周期の終わりはしばしば新たな始まりをもたらすことを示唆している。

第三に、社会道德と因果応報の法則という要素は、隠れていようと現れていようと、一貫したテーマである。道德の衰退、人心の荒廃は、しばしば動乱、天災、そして衰亡の原因と見なされる。逆に、道德的価値を維持し、善良に生きることは、安定と発展の基盤であり、災厄を乗り越える道でもあるのだ。これは単なる予言ではなく、深い教訓でもある。

第四に、非常に注目すべき点として、多くの東洋の予言、特に末法の時代や末劫の時期について語る際、しばしば大きな希望、すなわち人々を救うことができる救世主または大法（偉大なる法）の出現を明らかにすることである。劉伯温のような予言者が弥勒仏や「真・善・忍」のような原理を、災いを乗り越え新しい時代に入るための

「鍵」として言及することは、具体的な出来事の予測を超えた普遍的なメッセージだ。それは、救済とより良い未来への人間の深い渴望に触れるものである。

表現スタイルも非常に特徴的である。隠喩的な言語、象徴的なイメージ、含意のある詩文、そして文字分解の技法が用いられる。これは予言をより神秘的にするだけでなく、後世の人々がその深い意味の層を理解するためには、熟考、省察、そして清らかな心を持つことを要求する。

東洋と西洋の予言（前の章で触れた）を対比すると、異なる文化の人々が見えざる世界からのメッセージにどのようにアプローチし、表現するかが多様性が見て取れる。しかし、形式の違いはあっても、未来を理解したいという渴望、変動への不安、そして救済やより良い革新への希望は、人類の深い共通点であるようだ。

* * *

過去の偉大な人物たちは、出来事を予測するだけでなく、警告と希望のメッセージをもたらす壮大な予言の遺産を残した。しかし、予言の流れはそこで止まらない。情報の爆発と絶え間ない世界の変動を伴う私たちの時代にお

いても、未来に関するメッセージや予知夢を受け取ったと主張する個人が存在する。私たちはこれらの「現代の予言の声」をどのように認識し、それらは古代の託宣を継承しているのか、あるいは何か新しい色合いを帯びているのだろうか？それが、次の章で私たちが探求していくことである。

1.4. 現代の予言の声：時代の夢と予感

前のセクションの終わりに述べたように、時を超えたメッセージを持つ過去の壮大な予言の遺産を熟考した後、私は自問せずにはいられなかった。予言の流れはそこで止まってしまうのだろうか？それとも、新たな形で、新たな人々を通じて、現代の生活に浸透し続けているのだろうか？情報が爆発し、誰もが「発信源」となりうるこの時代において、未来からのメッセージとされる「声」を、私たちはどのように聞き分け、判断すればよいのだろうか？

予言の流れは、単なる古代の文書や過去の賢者からの託宣だけではない。世界の急速かつ複雑な変動を伴う私たちの時代においても、出来事を予見する能力を持つ、あ

るいは夢や直感を通じて警告のメッセージを受け取ると主張する個人が現れている。彼らは古典的な意味での「正統な」予言者ではないかもしれないが、彼らが共有する事柄は、時にコミュニティに大きな反響を呼び、時代の不安と希望を反映している。

● たつき諒（日本）：「成就」する夢の予言者

近年、特に心霊現象や予言に関心を持つコミュニティで頻繁に名前が挙がる人物の一人が、日本の漫画家である、たつき諒氏だ。彼女の特異な点は、その予言方法が完全に夢に基づいていることである。彼女は、予言的な夢を詳細に記憶し、記録する能力があり、それらの夢は一定期間の後にしばしば成就すると語っている。

- **過去に記録された予測：** 広く共有されている情報（そして彼女が以前に出版した作品に記録されているもの）によると、たつき諒氏は、彼女の名前を知らしめることになった、かなり正確に成就したとされるいくつかの予測を行っている。例えば、多くの人々は、彼女が COVID-19 の大流行を予言したと考えている。1999 年に出版された『私が見た未来』

という作品で、彼女は「2020 年 大災難」と記された表紙を描いており、物語の中には、謎のウイルスが出現し、病気を引き起こし、広がる様子に関連すると解釈されるイメージやメッセージがある。ある災害（2011 年の日本の地震と津波による災害とされる）から 10～15 年後にウイルスが出現するという詳細（その表紙には「2025 年 7 月 大災難」という予測も現れていた）もまた、多くの注目を集めた。さらに、彼女は他のいくつかの出来事、例えば著名人の死（例：バンド「クイーン」の歌手フレディ・マーキュリー、ダイアナ妃）や、日本における特定の自然災害なども正確に予測したとされる。

- **方法と予言の特徴：** 特筆すべきは、たつき氏がしばしば夢日記に自分の予測の具体的な日付を記録し、その後にそれを出版することである。これは、彼女を支持する人々によれば、「成就」の客観性を高めるものである。彼女の予測における言語は、通常、古代の託宣よりも直接的で、隠喩が少なく、夢の中で見た具体的な出来事やイメージを描写している。
- **必要な慎重さ：** もちろん、私自身、たつき諒氏ののようなケースに接する際には、常に研究者としての慎

重な態度を保っている。現代の予言、特にインターネットやメディアを通じて急速に広まるものを、独立して絶対的に検証することは困難な課題である。偶然の一致という要素や、出来事が起こった後で詳細を再解釈して「一致させる」という行為がある可能性もある。しかし、記録された「成就」が、多くの人々の好奇心を掻き立て、さらなる探求へと駆り立てるほど、大衆から大きな関心を集めたことは否定できない。

- **現在との関連：** 私がこれらの行を書いている時点（2025 年 6 月末）で、たつき諒の名前は、日本とフィリピンに関連する、2025 年 7 月 5 日に起こりうる「大災難」に関する彼女の予測と結びつけて、再び頻繁に言及されている。この予測の影響についての詳細な分析はここでは行わない（それは第 7 章で、現代の文脈における予言を議論する際に言及される）。このセクションでは、たつき諒氏を、「予言の声」が、夢という非常に個人的なチャンネルを通じて、今日の時代にどのように現れ、影響を与えるかの一例として挙げただけである。

● 大きな変動の前の個人的な予感と直感：

たつき諒氏のような体系的な、あるいは夢を通じた
予言能力を持つ人々の他に、おそらく私たちの少なく
ない人々も、論理的にはっきりと説明できないに
もかかわらず、何らかの出来事の前に異常な「予感」
や「靈感」を経験したことがあるだろう。

それは、旅行前の漠然とした不安感であったり、親
族に対する名状しがたい心配であったり、あるいは
これから起こることについての心に *thoáng* 過する
イメージであったりするかもしれない。多くの人々
は、自然災害、事故、あるいは重要な個人的な出来
事の前に、このような感覚を抱いたと語っている。

これらの「声」は、通常、明確な「予言」の性質を
持たず、日付や具体的な詳細もないが、人間が未来
の「振動」や、周囲のエネルギー場の変化を感じ取
る何らかの潜在的な能力を持っているらしいことを
示している。これは、現代科学がまだ探求中の意識
の一側面である、直感の現れかもしれない。

本書の文脈において、伝統的な意味での予言ではな
いにせよ、個人的な「予感」に耳を傾けることもま

た、私たちが自己自身や、生命の見えざる流れとより深く繋がるための一つの方法でありうる。

* * *

たつき諒氏のような「現代の予言者」の出現や、予感に関する個人的な体験は、多くの興味深い問いを投げかける。これらは、古代の予言者たちが持っていたのと同じ潜在能力の新たな現れなのだろうか？それとも、時代の変動に対する一部の個人の特別な感受性を反映しているのだろうか？

真偽の情報が入り乱れる世界において、「現代の予言の声」に接するには、冷静さと批判的思考が求められる。しかし、それらを完全に退けることは、価値あるメッセージや、少なくとも現実に対する異なる視点を逃すことにもなりかねない。

重要なのは、これらの「声」が、正しいか間違っているか、検証されているかどうかにかかわらず、不確実な世界における人間の深い不安と渴望——未来を知りたいという渴望、安全でありたいという渴望、そして起こって

いることの中に意味を見出したいという渴望——に触れることである。

* * *

ノストラダムスの謎めいた詩から、エドガー・ケイシーの特別な状態における「リーディング」、チャン・チン、諸葛亮、邵雍、劉伯温の歴史を導いた託宣、さらにはたつき諒のような現代の漫画家の予知夢に至るまで、いくつかの代表的な例を読者の皆さんと共に概観してきた今、あなたも私と同様に、これらの時空の障壁を超えているかのようなメッセージの奇妙な魅力に気づかれたことと思う。

私たちは、驚くほど「成就」したとされるケース、過去の言葉が現在や未来に起こることを正確に描写しているかのようなケースを「目撃」してきた。多義的な詩から、含蓄のある託宣、より直接的な「リーディング」や夢の描写に至るまで、表現形式の多様性は、予言情報へのアクセスと伝達の可能性が非常に豊かであることを示している。

これらの名前や作品は伝説となり、多くの民族の文化的、精神的遺産の不可欠な一部となっている。何世紀、さらには何千年にもわたるその永続的な生命力は、それらが人間の意識の非常に基本的な部分——未来への好奇心、法則を探究する渴望、そしておそらくは、私たちの通常感覚を超えた認識のレベルが存在するという信念——に触れていることを示している。

しかし、探求者であり、熟考する者としての私は、次なる問いを立てずにはいられない。これらの「一致」や「成就」が非常に印象的であるとしても、それらを評価する際に考慮すべき他の要素はあるのだろうか？ 予言を解釈することは、単に文字通り「読んで理解する」ことなのだろうか？ あるいは、一見明白に見える「一致」の背後には、私たちが認識すべき心と言語の挑戦や落とし穴が隠されているのではないだろうか？

予言の魅力は否定できないが、その価値と意味を真に理解するためには、おそらく私たちは一歩退き、「成就」という現象をより多角的に、開かれた心と慎重さを両立させた思考で見つめ直す必要がある。それこそが、次のセクションで私が皆さんと共に探求したいこと、すなわ

ち、「解釈の術と成就の落とし穴」に深く分け入っていくことなのである。

2. 多角的に見た「成就」：解釈の挑戦と落とし穴

東から西へ、古代から現代に至るまで、著名な予言の「成就」例を共に概観した後、私たちの心にはそれぞれ異なる感情が湧き上がることだろう。感嘆、好奇心、そしておそらくは少しの懐疑心。過去の言葉が未来を正確に描写できるというその魅力は、否定しがたいものである。しかし、探求者としての私は、一步退いて、この「成就」の本質について、より客観的かつ多角的に読者の皆さんと共に分析する必要があると感じている。果たして、全てが見た目通りに明らかなのだろうか？

● 予言の言語の曖昧さと多義性：

多くの予言、特に古代の託宣、ノストラダムスの詩、あるいは『梅花詩』や『馬前課』に見られる詩で容易に気

づく顕著な特徴の一つは、それらがしばしば高度に象徴的、隠喩的で、非常に多義的な言語を用いていることである。

古代の予言者たちは、未来の出来事をニュース速報のように直接的かつ明確に描写することは滅多にないようだ。その代わりに、彼らは様々な連想や意味の層を喚起するイメージや言葉を用いる。例えば、「火龍」は戦争、革命、破壊的な権力者、あるいは特殊な自然現象とさえ解釈されうる。「川の水が涸れる」は、王朝の衰亡、長期の干ばつ、あるいは精神的・文化的な喪失を暗示するかもしれない。

この曖昧さこそが、一面では予言に神秘的な美しさと深みを与え、時代の試練を乗り越え、何世代にもわたって熟考する価値を保ち続けさせている。しかし他面では、それは解釈の余地を非常に大きく広げることにもなる。同じ託宣、同じ詩の一節を、異なる時代の読者が、異なる経験や知識背景を持って読めば、それぞれ異なる歴史的出来事に「当てはめて」も「合理的だ」と感じる事ができてしまう。

私は自問する。予言が「生き続け」、多くの異なる状況に「成就」するのに貢献したのは、まさにこの多義性、

すなわち状況に合わせて調整できる柔軟性があったからではないだろうか？これは予言の価値を否定するものではなく、それが人間の意識の中でどのように機能するかのメカニズムをより深く理解するために必要な問いである。

● 出来事が起こった後の「一致」照合（ポストディクション／レトロフィッティング）：

これは、予言の「成就」性を考察する際に私たちが認識すべき重要な心理的要素である。「ポストディクション」あるいは「レトロフィッティング」とは、予言が実際にその出来事を起こる前に正確かつ詳細に描写したというよりは、人間が、既に起こった出来事に合うように、古代の予言の中の詳細を再解釈したり探し求めたりする傾向がある現象を指す。

想像してみてほしい。歴史上の大きな出来事、例えば戦争や自然災害の後、人々はしばしば古代の予言文書を漁り、起こったばかりの出来事に「似ている」か、あるいは連想できるような文や単語を見つけ出そうとする。いくつかの「一致点」を、たとえ曖昧であっても見つける

と、人々は容易に「すごい！ 予言者 X は予言していたんだ！」と叫ぶ。

私自身、研究の過程で、そのような「関連性」を見つけて興奮に駆られたことがあった。しかし、客観的に見れば、これらの「関連性」は、予言そのものの明瞭さよりも、私たちの「意味を割り当てる」努力によって生み出されていることが多いと気づくかもしれない。

ノストラダムスはその典型例である。古語を用い、多くの言語を混ぜ、象徴に満ちた彼の四行詩は、後の無数の解釈者たちにとって「肥沃な土地」となった。同じ四行詩が、フランスの王たち、フランス革命、ナポレオン、ヒトラーから、より現代的な出来事まで、何世紀にもわたって様々な出来事に「当てはめられて」きた。果たしてノストラダムスは、それら全てを詳細に「見て」いたのか、それとも解釈者たちが一致点を見出す上で「創造的」であったのか？

これは、全ての「一致」がこじつけであるという意味ではない。しかし、この「ポストディクション」の傾向を意識することは、単に「出来事後」の解釈に基づいて、予言が細部に至るまで正確に予測する能力があると性急

に結論付けることを避け、より慎重な見方をする助けとなる。

● 確証バイアス（Confirmation Bias）：

私たちが予言（そして実際には生活における他の多くの情報）に接する際にしばしば現れるもう一つの心理的な「落とし穴」が、「確証バイアス」である。これは非常に自然な人間の傾向だ。私たちは、自分の既存の信念や仮説を裏付ける情報を探し、記憶し、優先し、解釈する一方で、それに反する情報は無視したり、軽視したり、あるいは合理化しようとする傾向がある。

予言の分野では、これは次のように現れる。もしある人が特定の予言者の能力を信じている場合、その予言者の「成就」した予言にのみ集中する傾向があり、その「成就」は彼らの信念をさらに強固にする。逆に、不正確な予言や、外れた予測は、無視されたり、「解釈が間違っていた」「まだその時ではない」とされたり、あるいは単に忘れ去られたりする可能性がある。

ある予言者が何百もの予測をしたと想像してみてほしい。そのうちのほんのいくつかが印象的に「成就」しただけで、人々はそれらの「成就」を容易に記憶し、実現しなかった大部分の予測は無視してしまうだろう。この時、確証バイアスが働き、実際の成功率は私たちが思うほど高くないかもしれないにもかかわらず、その予言者は「非常に優れている」あるいは「非常に正確だ」という感覚を私たちに抱かせる。

私自身、予言の探求を始めた時、このバイアスについて自らを戒めなければならなかった。「成就」した物語の魅力は、時に私たちに、「この人物には他にどんな予言があるのか？それらは成就したのか？的中率／誤謬率はどのくらいか？」といった包括的な問いを立てることを忘れさせる。確証バイアスを意識することは、単に選りすぐられた「証拠」に容易に説得されることなく、よりバランスの取れた客観的な見方をする助けとなる。

● バーナム効果／フォアラー効果：

バーナム効果（またはフォアラー効果）とは、人間が、実際には非常に一般的で曖昧で、多くの人々に当て

はまるような性格や未来に関する記述であっても、それらを自分に特有のものとして高く評価する傾向がある心理現象を記述する。この効果の名前は、「我々は全ての人々のために何かを用意している」という言葉で有名な興行師、P・T・バーナムに由来する。

予言の文脈、特に個人的な予言や「時局」に関する一般的な記述において、バーナム効果は一定の役割を果たすことがある。一部の予言は、「社会に大きな変動があるだろう」「人々は道徳的な試練に直面するだろう」「あなたの人生に予期せぬ変化が訪れるだろう」といった、非常に概括的なスタイルで書かれている。これらの記述は、その一般性のために、多くの人々の経験に、多くの異なる時点で容易に「一致」することができる。

このような予言を読むと、人々は「その通りだ！これは私に／社会に起こっていることだ！」と感じるかもしれないが、それらの発言がほとんど全ての状況や個人に適用できるほど広範であることには気づかない。これは、全ての予言がバーナム効果を利用しているという意味ではないが、特に具体的な詳細や明確な時期がない予測については、考慮すべき要素である。この効果を認識することは、真に情報価値があり特異な予測と、誰もが自分

に「当てはまる」と感じるような一般的な発言とを区別するのに役立つ。

● 解釈者の役割：

予言の「成就」について語る上で見過ごすことのできない要素が、解釈者の決定的な役割である。私たちがこれまで見てきたように、予言の言語はしばしば曖昧で多義的である。それゆえ、予言の意味は、テキスト自体に完全にあるのではなく、読者や研究者、あるいは「専門家」がそれをどのように解釈するかに大きく依存する。

同じノストラダムスの四行詩、同じチャン・チンの託宣、同じ『梅花詩』の一編であっても、異なる時代の、異なる文化的、政治的、宗教的参照枠を持つ解釈者たちは、全く異なる理解を提示することがある。甚だしきに至っては、同じ解釈者であっても、その人生の異なる段階において、見解が変わることもある。

これは重要な問いを投げかける。「解釈の『権威』は誰に属するのか？そして、どのような根拠に基づいているのか？予言に唯一の『正しい』解釈は存在するのか？そ

れとも、各解釈は主観的であり、解釈者の視点に依存するのか？」ある予言が「成就」したとされる時、私たちは自問する必要がある。その成就是、予言自体が非常に明確であったからなのか、それとも、予言の詳細と実際の出来事を結びつける上での解釈者の才能（あるいは巧妙さ）によるものなのか？これは、時に非常に微妙な境界線である。解釈者の主体的かつ創造的（時には過剰な）役割を認めることは、私たちが予言の翻訳や分析に、より慎重にアプローチする助けになると私は考える。私たちは予言の内容だけでなく、解釈者の背景、動機、そして方法論も考慮に入れる必要があるのだ。

● 自己成就的予言（Self-fulfilling prophecy）：

最後に、考慮すべきもう一つの興味深い現象がある。それが「自己成就的予言」である。これは、ある予言が、当初は誤った予測であったり、根拠のないものであったりするかもしれないが、それが信じられ、広まることによって、人々の思考、感情、行動に何らかの形で影響を与え、間接的にその予言が現実になるというケースである。

よく挙げられる典型的な例は、銀行や株式市場の崩壊に関する予言である。もし、X 銀行が間もなく破産するという噂（あるいは「予言」）があれば、それを信じた預金者たちは一斉にお金を引き出しに殺到するかもしれない。この大量の引き出しという行動が、当初は銀行が正常に機能していたとしても、最終的にはその銀行を実際に危機に陥らせ、破産させる原因となる。当初の予言は、それを信じた人々の行動を通じて「自己成就」したのである。

場合によっては、戦争や紛争に関する予言が、関係する当事者たちに信じられると、疑惑や敵意、そして戦争への準備行動を増大させ、最終的に実際の戦争勃発につながることもある。あるいは逆に、和解に関する前向きな予言が、楽観的な雰囲気を作り出し、対話の努力を促進し、最終的に平和をもたらすこともある。

全ての予言が「自己成就」する能力を持っているわけではないが（例えば、地震に関する予言がこの方法で「自己成就」するとは言い難い）、これは、特に社会的、心理的な行動に関連する予言については考慮すべき要素である。それは、信念の力と、私たちの未来に対する認識

が、その未来を創造すること自体にどのように影響を与えうるかを示している。

* * *

予言の言語の曖昧さ、出来事後の「一致照合」の傾向、確証バイアス、バーナム効果、解釈者の役割、そして一部の予言の「自己成就」の可能性といった分析を経て、おそらく一つの問いが浮かび上がるだろう。では、私たちは予言の価値を完全に捨て去るべきなのだろうか？全ては単なる偶然の一致、主観的な意味の押し付け、あるいは心理的な「落とし穴」に過ぎないのだろうか？

何年もの探求と熟考の末、私は、答えがそれほど単純だとは思わない。

私たちが議論してきた心理的、認識的な要素は実在し、私たちが予言のメッセージを受け取り、解釈する方法において重要な役割を果たしている。それらを認識することは、予言現象を完全に否定するためではなく、私たちがより冷静な視点、研究者や真実の探求者として必要な慎重さを持つためである。

これらの要素に直面して、私はある種の葛藤を感じる。信念と軽信、象徴の示唆と解釈の押し付け、真の透視能力と、自分が見たいものを見たいという人間の主観的な願望との間の、脆い境界線についての葛藤である。

しかし、この慎重さは、神秘的な事柄、現在の科学ではまだ説明しきれない現象に対して、完全に心を閉ざすことと同義ではない。もし私たちが、通常の理解を超える全てを否定するために、ただ理性的な分析に固執するなら、私たちは現実のより深い層を感じ取り、探求する能力を自ら制限していることにならないだろうか？

私が信じるに、重要なのは、私たちが健全な批判的思考と、誠実な開かれた心の両方を持って予言にアプローチすることである。迷信に陥らず、誤った情報や根拠のない解釈に導かれないために批判する。特定の予測の正誤を超えた価値、すなわち、道徳に関する教訓、人間の責任についての警告、あるいはより良い未来への希望の光といった、予言が内包しうるメッセージに耳を傾け、感じ、熟考するために心を開く。

「解釈の挑戦と落とし穴」を認識することは、予言という大河の魅力や潜在的な価値を減じるものではない。逆に、それは私たちがこの探求の旅において、より冷静な

「渡し守」となり、曲がりくねった流れや、水面下の流れを巧みに操り、その川の真の美しさと深さを感じ取ることができるように助けてくれる。

そしておそらく、予言を探求する最終的な目的は、それが文字通り「成就」するかどうかを決定することだけにとどまらない。より重要なのは、それらのメッセージが私たちの認識にどのように影響を与え、人生、宇宙、そしてその広大な絵の中での人間の位置について、私たちの思索をどのように喚起するかということである。

では、もし私たちが個々の予言の正確性に関する議論を一時的に脇に置き、より大きな絵を見るなら、予言が示すものは、現代の予測方法、特に科学的予測と、どのように比較または対照できるのだろうか？これら二つの未来へのアプローチには、どのような共通点と相違点があるのだろうか？それが、次のセクションで私たちが共に探求していくことである。

3. 予言と科学的予測：未来への二つのアプローチ

予言の魅力的な「成就」と、その解釈における挑戦や落とし穴を共に考察してきた後、私の心に、そしておそらく読者の皆様の心にも、一つの問いが自然と浮かび上がってくる。すなわち、予言は、その全ての特性をもって、現代人が発展させてきた未来予測の方法、特に科学的予測と比較した時、どこに位置づけられるのだろうか？それらは完全に分離した二つの世界なのだろうか、それとも、その間には私たちが深く考えるべき接点や、相違点、類似点が存在するのだろうか？

● 科学的予測：理性とデータで未来を捉える試み

科学的予測と聞くと、私たちは通常、強固な基盤に基づいた体系的なプロセスを想像する。

- **基盤**：科学的予測は、通常、物質世界を観察し、測定可能で検証可能なデータを収集することから始まる。それは、既に発見されている自然法則、数学的モデル、統計学、そして論理的分析に基づいている。

科学者たちは仮説を立て、それを実験や過去のデータとの照合を通じて検証し、そこから未来を推測するために使用できる法則や傾向を導き出す。

- **方法：**このプロセスには、モデルの構築が含まれる（例：天気を予測するための気象モデル、成長を予測するための経済モデル、病気の蔓延を予測するための疫学モデル）。これらのモデルは、新たなデータや理解が得られるたびに、絶えず検証され、修正され、改善される。結果は、通常、絶対的な確実な予測ではなく、特定の確率を伴う可能性のあるシナリオとして提示される。
- **目的：**科学的予測の主な目的は、通常、非常に現実的である。早期警戒（例：台風、洪水、地震）を発し、多くの分野（経済、医療、農業、都市計画）における意思決定を支援し、リスクを管理し、そして人々が自然環境や社会の変化により主体的に対処できるよう助けることである。
- **性質：**科学的予測の重要な特徴の一つは、それが検証可能であることだ（常に 100% 正確であるとは限らないが）。誤った予測は原因を究明するために分析され、それによってモデルや方法が改善される。

科学は誤差を許容し、それを進歩の過程の一部と見なす。それは、未来に関する絶対的な真理を保持していると主張するものではない。

明らかに、科学的予測は強力なツールであり、周囲の世界を理解し、制御しようとする人間の知性の成果である。それは、これまでも、そしてこれからも、社会に多大な利益をもたらしている。

予言（本書が探求している伝統的な意味において）：より深い認識の層からの別のアプローチか？

科学的予測と並べてみると、予言（本書で私たちが探求している意味での――すなわち、予言者、託宣、啓示、夢からのメッセージなど）は、全く異なる様相を呈する。

➤ **基盤：**第四章で議論したように、予言情報の源泉は非常に多様であり、通常、伝統的な科学的方法による通常の論理や測定可能なデータに基づいてはいない。それは、神聖なる存在からの啓示、特殊能力（天目）を持つ人々の「透視」能力、変性意識状態、予知夢、あるいは天地からの前兆の解釈であるかもしれない。多くの人々は、予言者、特に修煉者が、現在の実証科学がまだ到達していない他の次元の空

間や宇宙の法則にアクセスできると信じている。歴史は、より高次のレベルで「脚本」として定められており、予言とはその脚本の一部を「先に見る」となるのかもしれない。

- **方法：**科学的予測が分析とモデル化に依存するのに対し、予言は通常、直観、感応、あるいは「超自然的」なチャンネルを通じて行われる。それは論理的な計算プロセスの結果ではなく、時には通常感覚を介さずに、直接的に「見る」、「聞く」、あるいは「知る」という行為である。
- **目的：**予言の目的もまた、単に特定の出来事を予測することを超えているように思われる。警告を発する傍ら、多くの予言は、深い道徳的、精神的なメッセージを内包している。それらは、人間の良心を呼び覚まし、因果応報の法則を思い出させ、善行を奨励し、あるいは宇宙と運命のより大きな法則を明らかにすることを目的としているのかもしれない。時には、未来の一部を知ることは、人間が受動的に待つためではなく、「天意」を認識し、現在において、特に重要な転換期において、より正しい選択をする機会を得るためなのである。

- **性質：** 予言を「検証する」ことは、科学的予測よりもはるかに複雑である。それは、解釈の術、信仰、そして歴史的、文化的な背景に大きく依存する。ある予言は、一部の人々や文化にとっては真実かもしれないが、他の人々にとっては理解しがたいか、無意味かもしれない。その深い意味が隠喩や精神的なメッセージの層にある可能性があるため、いくつかの詳細が「間違っている」というだけで、容易に否定されるものではない。

● 核心的な相違点：

これらの比較から、私は、予言と科学的予測の間には、方法論だけでなく、世界観や最終的な目的においても、非常に根本的な違いがあることに気づいた。

- **情報源と現実へのアプローチについて：** 現代科学は、主に、私たちが存在する空間における、目に見え、触れ、数えることができる物質世界を探究するために、感覚と測定ツールに依存している。それは「見えるもの、触れるもの、数えられるもの」から法則を探し出す。一方、予言は、通常感覚では感知で

きない他の次元の世界、他の空間の層からの情報に触れているように思われる。それは、過去、現在、未来が同時に存在する、あるいは、物質と時間に関する私たちの現在の理解を超えた法則に従って定められている、多次元の現実を示唆している。

- **方法論と使用するツールについて：**科学は論理、分析、数学モデル、実験を用いる。予言は、直観、精神的な開眼、特殊な意識状態、あるいは微細なメッセージへの感応に依存する。科学者のツールが機械や実験室であるのに対し、予言者（特に修煉者）のツールは、浄化され高められた彼ら自身の意識そのものであるかもしれない。
- **目的と最終的な意味について：**科学的予測は、通常、物質生活における具体的、実践的な目標、すなわち生活の改善、天災の防止、経済発展などを目指す。一方、多くの予言、特に大きな予言は、より大きな使命を帯びている。良心を呼び覚まし、道徳の衰退を警告し、神仏と因果応報の法則の存在を肯定し、そして人類の救済や精神的な変容への道を示すことである。それは、「何が起こるか」だけでなく、

「なぜそれが起こるのか」そして「私たちは何をすべきか」にも関心を持つ。

- **信頼性と「成就」性の評価方法について：**前述の通り、科学的予測はデータによって検証可能であり、誤差はプロセスの一部である。予言はより複雑だ。その「成就」は、しばしば信仰、解釈能力、そして時には、出来事が起こってから長い時間が経過した後に初めて「成就」と認識されることと結びついている。ある予言は、出来事の詳細においては成就しないかもしれないが、その警告のメッセージは依然として価値を持ち続ける。

● 接点、あるいは相互補完の余地はあるか？

これら二つの方法を並べてみると、私の心に大きな問いが浮かぶ。それらは完全に相反し、互いを排除するものなのだろうか？それとも、その間には、人類が宇宙と未来を探索する旅路において、出会い、さらには互いを補い合う何らかの空間が存在するのだろうか？

現在の実証科学は、その輝かしい成果にもかかわらず、宇宙、意識、そして生命の大きな謎に直面する時、自らの限界に徐々に触れているように思われる。科学の現在の方法論では答えられない問いが存在する。現在の科学がまだ触れていない宇宙の「法則」、エネルギーの流れ、あるいは現実の階層が存在し、予言者たちは何らかの方法でそれを感じ取ったり、「見たり」したのではないだろうか？

私は、偉大な科学者の直感が、時に純粋な論理では想像もつかなかった発見へと彼らを導くケースを思う。その直感は、予言者たちの「感応」と、どこか類似する部分があるのだろうか？

逆に、科学は、私たちが「予言」とされる一部の現象のメカニズムをより深く理解するのに役立つことはないだろうか？例えば、深い瞑想状態における脳の研究、潜在意識に関する研究、特別な夢についての研究、あるいは時間と空間の本質に関する量子物理学の新たな発見は、予言者たちが通り抜けたと思われる扉を、いくらかでも開くことができるのではないだろうか？

一人の熟考する者としての視点から、私は、予言は科学の代替となるものでも、その逆でもないと感じる。各方法

は、人間が世界を認識するのを助ける上で、独自の価値と役割を持っている。科学は、私たちが物質世界を理解し、改良するのを助ける。予言、特に精神的なメッセージを伴う予言は、私たちが核心的な価値観に立ち返り、善に向かい、そして、私たちが通常見るものよりも広大で意味のある宇宙における自らの位置を認識するのを助けることができる。

おそらく、真に科学的な態度とは、自分がまだ理解していないことを否定することではなく、絶えず問いを立て、探求し、新たな可能性に対して心を開くことなのだろう。もしかしたら、未来、人類の認識がより発展した時、「科学」と「精神世界」、「予測」と「予言」の間の境界線は、現在ほどかけ離れたものではなくなるかもしれない。物質の法則と、精神や運命の法則の両方を含む、より包括的な理解、「新しい科学」が生まれるかもしれない。

予言や預言は、まさしく、先を行く賢者たちが残したヒント、「痕跡」であり、私たちがより広大な現実の絵、私たちが徐々に発見しつつある、より高次の「科学」について熟考するよう招いているのかもしれない。

4. テイラー・リードの見解

本章で私たちが共に探求してきた全て——予言が「成就」することの魅力、解釈という技術における挑戦と落とし穴、そして予言と科学的予測との比較——を振り返る時、私はこの主題の複雑さと多次元性を感じる。明らかに、予言における「成就」とは、「正しい」か「間違っている」かで絶対的に断定できるような単純な概念ではない。

一人の研究者として、そしてまた一人の精神的な探求者としての私の旅は、常に問いに満ちている。個々の予言の正確性を「証明」したり「反証」したりしようとすることは、時に、それらがもたらしうるより深い価値から私たちの注意を逸らせてしまう可能性があることに、私は気づいた。

私は、予言の価値を評価する上で、「成就」が常に唯一かつ最も重要な尺度であるとは考えない。ある予測が現実になるかどうかということ以上に、その警告としての意味、思考を促す可能性、そして人々を善に向け、より意識的に生きるよう促すことこそが、多くの偉大な予言が何世代にもわたって伝えてきた極めて重要な価値なの

である。それらは、起こりうることを知らせるだけでなく、良心を呼び覚まし、私たち自身、共同体、そして世界に対する自らの責任を思い出させてくれる鐘の音のようである。

予言に接する上で、信仰と健全な懐疑心の役割は極めて重要である。「予言」というレッテルを貼られた全てを無批判に信じる、盲信的な迷信を私は奨励しない。しかし同時に、私たちの現在の理性が完全には説明できない事柄を、完全に否定することも支持しない。心を開き、耳を傾ける準備をしながらも、絶えず思考し、分析し、心と頭脳の両方で感じ取ること——それこそが、おそらく最も適切な道なのであろう。

現在の基準で「科学的」に成就を特定することには少なからぬ挑戦があるものの、非常に多くの予言が、時代を超えて人々の注意を引き続け、尊重され、その認識や文化に深く影響を与え続けているという事実は否定できない。このことは、それらが人間の意識における非常に基本的な何か——宇宙の法則を理解したいという渴望、現在の限界を超えたいという渴望、そして無限の時の流れの中に意味を見出したいという渴望——に触れていることを示している。

そして、まさにこれらの思索から、私の心にさらに大きな問いが生まれ、私たちの旅を新たな側面へと導くのである。

「では、もし私たちが個々の予言の正誤や『成就』の度合いに関する議論を一旦脇に置くならば、何か共通のパターン、大きなテーマ、普遍的なメッセージが、世界中の、そして時代を超えた予言の中に、頻繁に現れてはいないだろうか？なぜ、大きな変動、浄化、そして再生、新たな黄金時代への渴望といったそれらのテーマが、過去から現在へと絶え間なく響き渡る鐘の音のように、私たちの心を揺さぶり、警告する力を持っているのだろうか？そして、闇についての警告の中で、希望の光、灯された灯火はどこにあるのだろうか？」

* * * * *

第六章：時を超えたテーマ — 変動、浄化、そして再生への 希望

第五章で読者の皆さんと共に「予言という大河」の曲がりくねった道筋を辿り、託宣の「成就」について、また解釈という技術の挑戦と落とし穴について共に熟考した

後、私は、おそらくそれ以上に重要で普遍的な一つの事柄に気づいた。それは、異なる文化、遠い時代から生まれ、多様な形で表現されながらも、予言はしばしば、大きなテーマ、見慣れたモチーフ、そして繰り返し現れる核心的なメッセージを響かせているように思えることである。

これらのテーマは、まるで宇宙の交響曲における主旋律のように、何世紀にもわたって鳴り響き、人類の意識の深層に触れる。それらは、大きな変動、混沌の時代、避けられないかのような大災難について語る。しかし同時に、それらは人々の心に、必要な浄化、新たな始まりを開くための終わり、そして再生への、より輝かしい「黄金時代」への強烈な渴望という希望の種を蒔くのである。

この第六章で私が読者の皆さんと共に探求したい大きな問いは、これである。なぜ、変動、災害、一つの周期の終わり、そして再生、新たな始まりへの渴望といったイメージが、これほどまでに人類の意識に深く刻み込まれているのだろうか？それらは単なる根深い恐怖の反映なのだろうか、それとも、宇宙と生命のより深遠な法則を反映しているのだろうか？そして、より重要なのは、闇

に関する警告の中で、予言者たちが人々を導くために灯した希望の光、その灯火はどこにあるのだろうか？

私たちは、これらの「こだま」に共に耳を傾け、共通のパターンと、予言という大河が伝えたいと願う時を超えたメッセージを探し求めることにしよう。

1. 変動のこだま：大災難と末劫の時代に関する警告

世界中の予言の中で最も際立ち、おそらく最も強烈な印象を与えるテーマの一つは、変動、混沌、天災、人災、そして道德の衰退に満ちた時代——多くの文化が「末劫の時代」、「世の終わり」、「カーリー・ユガ」、あるいは単に「最後の時代」といった異なる名で呼ぶ時代——の描写である。言語やイメージは異なれども、これらの警告には驚くべき一貫性があるように思われる。

● 各文化からの事例の連鎖：

➤ **西洋：**

☆ **聖書（ヨハネの黙示録）**：これはおそらく、最後の時代に関する最も有名な予言文書の一つであろう。聖ヨハネによる黙示録は、世界に降りかかる恐るべき災厄——戦争（ハルマゲドン）、飢饉、疫病、反キリストの出現、海と陸からの獣たち、そして最後の審判——を、生き生きと象徴豊かに描写している。「七つの封印」、「七つのラッパ」、「神の怒りの七つの鉢」といったイメージは、大災難の古典的な象徴となっている。

☆ **北欧神話（ラグナロク）**：ヴァイキングの神話におけるラグナロク（「神々の黄昏」）は、終末的な出来事の連鎖であり、それには長大な冬（フィンブルの冬）、アース神族と闇の勢力（氷の巨人、狼フェンリル、海蛇ヨルムンガンドなど）との間の恐るべき戦いが含まれ、多くの主神（オーディン、トール、フレイ、ヘイムダル、ロキ）の死と、火と水による世界の破壊へと至る。

- ☆ **ノストラダムス、エドガー・ケイシーのような
予言者たち**：第五章で述べたように、ノストラダムスもその四行詩の中で、残忍な戦争（現代兵器を含む）、地質学的変動、飢饉、疫病のイメージを頻繁に用いている。エドガー・ケイシーもまた、地球表面の大きな変化、地軸の移動、地震、火山の噴火、そして地球規模の紛争に関する警告を「リーディング」で行っている。

➤ **東洋：**

- ☆ **仏教（末法の時代の概念）**：仏典における末法の時代（末法時代）とは、仏陀の入滅後、その教えが次第に衰退し、僧団はもはや厳格な戒律を保てなくなり、衆生は心が強情で教化しがたく、社会道徳が衰退する最後の段階である。この時代は、苦しみ、天災（水、火、風の災害など）、人災（戦争、飢饉、疫病）、そして人々の心が貪欲、憎悪、愚かさに満ちると描写されている。
- ☆ **ヒンドゥー教（ユガの周期）**：ヒンドゥー教の哲学によれば、宇宙はユガと呼ばれる大きな周期で運行している。現在、私たちはマハー・ユ

ガ（四つのユガから成る一周期）における最後かつ最も暗い時代であるカーリー・ユガにいる。カーリー・ユガは、道德の衰退、紛争、偽り、貪欲、病気、そして人間の寿命の短縮の時代として描写される。人々は真理（ダルマ）から離れ、伝統的な価値観は覆される。これは、サティヤ・ユガ（真理の黄金時代）の新たな周期が始まる前に、悪が優勢に見える段階である。

☆ **チャン・チンの託宣（ベトナム）、中国の託宣（例：劉伯温、『梅花詩』）**：チャン・チンの託宣もまた、「血は川と流れ、骨は山と積もる」、「馬は逆さに走り、人はあちこちに逃げる」といった光景を頻繁に言及し、動乱、戦争、王朝の交代を描写している。劉伯温の『焼餅歌』や『金陵塔碑文』、あるいは邵雍の『梅花詩』といった作品にも、災厄、「十のうち七が死ぬ」、「白い骨が山を満たす」といった光景、そして社会の混乱を非常に詳細に描写した一節がある。

- **その他の先住民文化（例：マヤ、ホピ）：** 古代マヤ人は、その複雑な暦体系を用いて、「世界」あるいは大きな時間周期の終わりについても予言していた（例：2012 年の第 13 バクトゥンの周期の終わりは、様々な形で解釈された）。北米のホピ族にもまた、何世代にもわたって口承で伝えられてきた「浄化の日」（Day of Purification）に関する予言がある。それによれば、世界は大きな変動、戦争、そして破壊を経験した後、より平和な新しい世界が築かれるという。彼らはまた、この時代を予兆する「しるし」についても語っている。

● 共通の特徴と警告に関するより深い解釈：

多くの予言の源泉から大災難や末劫の時代の描写を考察すると、私はいくつかの際立った共通の特徴に気づき、それには、特に現代世界の状況と照らし合わせた時、ますます多くの人々の関心を集める解釈が伴っている。

- **社会道德の衰退という、根本的な原因あるいは前兆：**
聖書、仏教、ヒンドゥー教から東洋の託宣に至るまで、ほとんどの予言は、大災難の時代が、道德と精

神的価値の深刻な衰退に付随、あるいはそれによって予兆されることを強調している。人々の心は利己的、貪欲、欺瞞的、残忍になり、社会の規範は覆され、神仏や天地への敬意は軽んじられるか冒瀆される。

☆ **より深い解釈：**多くの研究者は、これが単なる偶然の一致ではないと考えている。人間の道徳の衰退は、一種の「負のエネルギー場」あるいは非常に大きな「集団的カルマ」を生み出し、まさにこれが、宇宙の因果応報の法則に従って、相応の災厄を招き寄せる、あるいはそれにつながるのだという。人間が、神が定めた基本的な道徳基準に背く時、彼らは自らを危険な領域に置くことになる。予言者たちは、この因果関係を見抜いているかのようである。私は、これがおそらく最も重要な警告であると感じている。すなわち、災いの根源は、まさに人間の選択と行動にあるのだ。

➤ **天災、人災、そして異常現象の増加：**予言は、自然災害の強度と頻度の増加を非常に具体的に描写している。地震、火山、津波、洪水、干ばつ、異常な嵐、

そして疫病の蔓延である。それに加えて人災がある。広がる戦争（世界大戦、大量破壊兵器の使用の可能性も含む）、民族・宗教紛争、テロ、社会不安、犯罪の増加である。

☆ より深い解釈：

- ✓ **天災について：** 一部の解釈では、地球が、一個の生命体として、人間による環境破壊や不均衡な行為に「反応」しているのだとされる。地質学的変動や極端な気候は、惑星の自然な浄化サイクルの一部であるか、あるいは「天地はもはや昔のままではない」という警告の成就であるのかもしれない。エドガー・ケイシーによる地球の地軸変動、陸地の隆起や沈降に関する予言や、たつき諒氏による日本の南海トラフや環太平洋火山帯に関連する「2025 年 7 月の大災難」の予言は、現在の地質学的兆候と照らし合わせて多くの人々が関心を寄せている例である。私は、エドガー・ケイシーやたつき諒氏のような広く認められた予言者からの予測の他に、近年、米国のブランドン・ビッグス氏、タイのモー・

プライ氏、あるいは日本の超常現象研究家である矢追純一氏など、多くの国の他の霊能者や超常現象研究者からも同様の警告が発せられていることに気づいている。詳細は異なるかもしれないが、大規模な地質災害、特に地震と津波の発生リスクに対する共通の懸念がある。これらの情報源の検証レベルや信頼性は様々であり、私たちは冷静に接する必要があるが、互いに関連がないように見える個人から同様の警告が同時に多数現れること自体、私たちが深く考えるべき現象である。それは、時代の共通の不安を反映しているのかもしれないし、あるいは地球の潜在的な変動に対して、おそらく一部の敏感な人々が事前に感じ取ることができる何らかの感応なのかもしれない。

- ✓ **人災と戦争について：** ノストラダムスは、多くの四行詩で、「三人の反キリスト」と恐るべき世界大戦について描写している。多くの現代の解釈者は、私たちが、世界的な地政学的緊張、核紛争の危険性、そして独裁的で残忍な勢力の台頭を伴う、「第三の反キリス

ト」の時代にいるか、それに近づいている可能性があると考えている。東洋の託宣もまた、「至る所で戦乱が起こり」、「動乱が各地に広がる」と多く語っている。

- ✓ **疫病について：** 最近の COVID-19 の大流行は、多くの人々に末劫の時代の「瘟疫」に関する予言を連想させた。劉伯温は『金陵塔碑文』の中で、「若問瘟疫何時現，但看九冬十月間」（もし疫病がいつ現れるかと問うなら、ただ九の冬、十月の間を見よ）という句を残している。多くの人々は、これからさらに危険なパンデミックが起こると解釈している。注目すべきは、劉伯温のようないくつかの予言が、疫病はまるで「目を持っている」かのように、特定の、おそらくはカルマや道徳的選択に関連する人々を標的にすると強調している点である。

➤ **天地における特別な「しるし」の出現：**

天災や人災の他に、一部の予言は、天文の異変、空や自然界における奇妙なしるしを、重要な前兆として言及している。例えば、特別な彗星の出現、異常な日食や月食、あるいは科学では説明困難な現象などである。

☆ **優曇華（うどんげ、Udumbara）－希望の使者：**

優曇華の出現は、その顕著な一例である。仏典によれば、優曇華は三千年に一度しか咲かない霊妙な花であり、その出現は、転輪聖王（武力ではなく正法によって世界を治める王）あるいは弥勒仏がこの世に下生したことを知らせるといふ。ここ数十年の間に、この白く小さな花が、世界中の様々な表面に咲いたという報告が数多く寄せられている。科学的にはこの現象に対して異なる説明（例えば、クサカゲロウという昆虫の卵であるという説）があるかもしれないが、多くの人々、特に信仰を持つ人々にとって、優曇華の出現は、末劫の時代への不安の中にある、深い精神的な意味、吉兆、そして希望のしるしを依然として持ち続けていると、私は見ている。

☆ **聖なる涙 – 聖なる方々の警告の泣き声：** 冒頭の章で述べたように、おそらく最も感動的で胸を締め付けるイメージの一つであり、多くの人々によって時代の緊急のしるしと見なされているのが、世界中の多くの場所で宗教的な像、特に聖母マリア像が涙を流す現象であろう。その涙は、時には香油、時には暗赤色の血の滴となって聖像の顔を伝い落ち、見る者の心に深く刻まれる象徴、聖なる世界から響き渡る言葉なき「鐘の音」、そして悲痛な警告となっている。日本の秋田の辺鄙な村で伝えられた聖母からのメッセージから、ヨーロッパの古びた教会、アメリカ大陸の巡礼地、あるいはアジアの家庭にある小さな祭壇に至るまで、この現象に関する報告は、ここ数十年で著しい頻度で現れている。カトリック教会は、超自然性に関するいかなる声明を出す前にも、常に極めて慎重な調査を行うし、多くのケースは自然要因や人為的なものとして説明可能かもしれないが、それでもなお、教会自身の調査委員会によって「現在の科学では説明不可能」と見なされたケースも存在するのである。私自身、これらの涙について熟考する時、聖なる方々がおそらく人類に対して抱い

ておられるであろう、深い悲しみ、無限の哀れみを感じずにはいられない。それは、物質、紛争、そして道徳の衰退にますます深く沈んでいく世界を嘆く涙なのではないだろうか？それは、多くの、あまりにも多くの我々が、未だに迷いの中であって目覚めようとせず、目の前にある危険に気づかぬまま、はかない価値観に夢中になっていることに対し、間近に迫った災厄、大いなる苦難についての悲痛な警告なのではないだろうか？愛、純潔、そして慈悲の象徴である聖母マリアが涙を流さねばならないというその姿は、おそらく最も強力なメッセージの一つであり、最も硬くなった心を揺さぶる「最後の鐘」であり、手遅れになる前に、心からの懺悔と、緊急の回心を促す招きなのである。それらの涙は、私にとって、単なる不可思議な現象ではなく、切なる呼びかけであり、私たちが審判の瀬戸際に立っている時でさえ、聖なる方々が人間に対して抱き続けている広大無辺な愛の現れなのだ。それらは、時間はもはやあまり残されておらず、選択は私たち一人ひとりにあるのだと、告げているかのようなのである。

➤ **大災難の時期 – 数字と隠された意味：** これは、最も好奇心をそそり、また最も議論を呼ぶ側面の一つである。いくつかの予言は、その時期に関連する数字や時間的枠組み、あるいはしるしを示しているように思われる。

☆ **ノストラダムス：** 多くの人々が、彼の四行詩の中の数字や天文学の用語を解読し、大きな出来事の時期を特定しようと試みている。例えば、「1999 年、7 の月」（第十百詩篇 72 番）についての有名な四行詩は、中国における法輪功への弾圧を含む、多くの出来事と関連付けられてきた。

☆ **マヤの予言：** 多くの人々が恐れていた 2012 年 12 月 21 日の「世の終わり」が世界的な大変動なく過ぎ去ったものの、マヤ暦の研究者たちは、それは単に大きな周期の終わりであり、新たな移行段階の始まりに過ぎないと指摘している。

☆ **たつき諒：** 前述の通り、彼女の「2025 年 7 月」に関する予測は、大きな注目を集めている。

☆ **中国の託宣：** しばしば干支の体系、象徴的な数字、あるいは年月に関連するなぞなぞ（文字遊び）が用いられる。例えば、劉伯温は『推碑図』の中で、「時到兔頭雞尾年」（兔の年の初め、酉の年の終わりに至る時）について言及したり、「三年の鶏、三年の犬」（三年の酉、三年の戌）が困難な時期であることに関連する句を述べたりしている。多くの人々が、これらの時期を現在および近い未来の年と照合しようと試みている。

☆ **私が強調したいこと：** 数字や時間的枠組みが言及されているとしても、覚えておくべき重要なことは、ほとんどの偉大な予言者（特に信頼できる宗教的源泉からのもの）は、地球規模の大災難に対して、変更不可能な具体的な年月日を定めることよりも、時代のしるし、道徳の衰退を認識することに焦点を当てているということである。私の感じるところでは、これらの警告の主な目的は、人々を目覚めさせ、意識と行動の変化を促し、そして人々に自らの道を選択する機会を与えることにある。もし全てが硬直的に定められているのなら、人間の自由意志と修

養の意味はなくなってしまうだろう。おそらく、現在における人類の選択こそが、これから起こることの度合いと時期を決定する要素なのである。

テイラーの思索：

なぜ、大災難や末劫の時代というテーマが、何千年もの間、これほどまでに普遍的で、人類の意識を揺さぶる力を持っているのだろうか？それは単に、破壊や制御不能な事柄に対する人間の根源的な恐怖を反映しているだけなのだろうか？それとも、宇宙の周期的法則、成住壊滅という絶え間ない運動に関する、より深遠な真実を秘めているのだろうか？あるいは、それは、この世界に対する、そして私たち自身の運命に対する、私たちの責任についての緊急の呼びかけなのかもしれない。

これらの問いに答えるのは容易ではない。しかし、私たちが共にこれらの警告に正面から向き合うこと、それは恐怖に沈むためではな

く、理解と意味を探究するためであり、私たちが未来により目覚めた意識で対峙するための、第一歩となりうるのである。

2. 終わりの内に新たな生命の芽：周期、浄化、そして再生への渴望

予言からの「変動のこだま」、大災難や末劫の時代の描写に耳を傾ける時、私たちの心には不安、さらには恐怖の念が忍び寄るかもしれない。それは非常に自然な反応である。しかし、もし私たちがそこで立ち止まってしまうなら、おそらく非常に重要な部分、すなわち、終わりの警告の内に、あるいはその直後にしばしば隠されている、深く、希望に満ちたメッセージを見逃してしまうことになるだろう。

私が気づいたのは、ほとんどの主要な予言の伝統において、「終わり」が完全な破壊、永遠の終止符を意味することは稀であるということだ。その代わり、それは通常、より大きな周期の一部、必要な移行、痛みを伴うが浄化をもたらす「大手術」として捉えられ、それによって新

たな生命の芽、より輝かしい時代が芽吹き、再生することができるのである。

● **宇宙と文明の周期という概念**：宇宙、歴史、そして文明が周期的に運動するという観念は、世界中の多くの古代文化に現れる普遍的な思想であるようだ。

➤ **成住壊滅（じょうじゅうえめつ）**：これは仏教における中心的な概念であり、一つの世界（劫）あるいは一つの宇宙の四つの段階を描写している。

☆ **成（じょう）**：形成、創造の段階。

☆ **住（じゅう）**：安定、発展、存続の段階。

☆ **壊（え）**：衰退、崩壊し、分解の兆しが現れ始める段階。

☆ **滅（めつ）（あるいは空（くう））**：完全な破壊の段階であり、新たな周期が再び始まる前の空の状態に戻る。

この観点によれば、私たちが生きている宇宙もまた、その法則から逃れることはできない。前のセクションで述べた末法の時代は、「壊」の

最終段階と見なすことができ、徐々に「滅」へと進み、そしてやがて新しい世界、新たな「成」の周期が開かれるのである。この思想は、マクロな宇宙に適用されるだけでなく、王朝の盛衰、文明、さらには一人ひとりの人生の中にも見出すことができる。

- **灰からの不死鳥の再生：** 伝説の鳥フェニックスが、老いると自ら薪の山で身を焼き、その灰の中からより若く、より力強い不死鳥として再生するというイメージは、不死、再生、そして破壊を通じた革新の強力な象徴である。この伝説は、古代エジプト、ギリシャ、ローマから中華に至るまで、多くの文化に現れており、終わりからの復活の可能性に対する深い信念を示している。

- **古代文化における時間の周期：**

- ◇ **ヒンドゥー教：** 前述の通り、四つのユガ（サティヤ、ト্রেター、ドヴァーパラ、カーリー）の周期が繰り返され、カーリー・ユガが、真理と徳の「黄金時代」である新たなサティヤ・ユガが始まる前の、最も暗い時

代である。カーリー・ユガの終わりは終止符ではなく、新たな夜明けへの移行なのである。

- ☆ **マヤ暦**： 古代マヤ人の長期暦体系もまた、大きな時間の周期に基づいている。一つの周期（例えば 2012 年の第 13 バクトゥン）の終わりは、専門家たちによって、破壊的な意味での「世の終わり」とは真に理解されておらず、一つの「世界」あるいは一つの「太陽の時代」の終わりであり、新たな特徴とエネルギーを持つ新しい段階への道を開くものとされている。

周期性についてのこの認識は、私たちが変動に対してより大きな、そしてより穏やかな視点を持つ助けとなると、私は感じる。喪失と破壊だけを見る代わりに、私たちは、古いものが新しいものに道を譲り、枯渇が発芽のために必要な条件であるという、自然の法則、宇宙の絶え間ない運動を見始めることができるのである。

● **必要なプロセスとしての浄化：** もし終わりが周期の一部であるならば、その終わりに至るプロセスは、たとえ痛みを伴うものであっても、通常、浄化（purification）という意味合いを持つ。これは無意味な懲罰ではなく、古くなり、退化し、否定的になったものを取り除き、より新しく、純粋で、肯定的なものが発展するための空間を創り出す、宇宙の必要なメカニズムなのである。

➤ **もはや適合しないものの排除：** 健康であるために体が毒素を排出する必要があるように、社会、文明、あるいは惑星でさえも、「癌細胞」——それは誤った思想、不公平な社会構造、道徳と環境を破壊する行為かもしれない——を取り除くための「浄化」の段階を必要とする。変動や災害は、たとえ恐ろしいものであっても、これらの病原体を取り除くための強力な「熱病」の役割を果たすことがある。

➤ **善悪、真偽を区別するための試練：** 混沌と大きな変動の段階において、伝統的な価値観が揺らぎ、真偽が入り混じる時、それこそが各個人、各思想、各勢力の真の本質が最も明確に現れる時でもある。これらの試練は「火は金を試し、

逆境は人を試す」ようなものであり、何が善で何が悪か、何が真理で何が偽りかを区別する助けとなる。真に価値があり、真に善良なものだけが、浄化を乗り越えて堅固に立ち、存続することができるのだ。

- **新時代が誕生する前の「産みの苦しみ」：「大災難」や「末劫の時代」**のイメージは、新たな生命、新たな時代が誕生する前の激しい「産みの苦しみ」にたとえることができる。痛みや混乱は避けられないが、それはまた、何かより良いものの誕生という、重大な出来事が間近に迫っていることを告げている。多くの予言は、この時代を偉大な「篩い分け」の時期として描写しており、良心、道徳、そして真の価値への信念を固く保つ者だけが、それを乗り越えて新しい時代に入ることができるのである。

変動を浄化のプロセスとして捉えることは、その否定的な側面だけを見ることから私たちを解放すると、私は熟考する。それは、試練の必要性和深い意味についての視点を開き、各個人、そして全人類が自ら

を振り返り、良くないものを取り除き、より大きな変容に備える機会として捉えることを可能にする。

● 再生への渴望と新たな「黄金時代」：

おそらく、終わりの予言における最も注目すべき、そして最も多くの慰めをもたらす共通点の一つは、そのほとんどが破壊という暗い絵で終わらないことである。逆に、大災難と浄化の描写の後、大部分の予言はより明るい未来像、すなわち再生と新たな「黄金時代」（Golden Age）の始まりという約束を垣間見せる。

これは人類の潜在意識に深く根付いているかのような渴望であり、長い暗黒の夜の後には必ず夜明けが訪れ、その光はかつてないほど輝かしいものになるという信念である。

➤ **新しい世界の描写：**異なる文化がこの良き時代を異なる方法で描写するが、要約すると、それは通常、次のような世界である。

☆ **平和と調和が支配する：**戦争、紛争、憎しみが終わりを告げる。人々は人種、宗教、国

籍を問わず、互いに愛し、尊重し合って生きる。

◇ **公正と道徳が回復される：** 偽り、不正、腐敗がなくなる。真の道徳的価値が高く評価され、社会の基盤となる。

◇ **人間は自然と調和して生きる：** 地球は癒され、環境は清浄になり、自然は美しい。人々は自然の法則を理解し、尊重する。

◇ **精神と知性の発展：** 人々はより高い認識レベルに達し、宇宙と自己についてより深く理解することができる。寿命は延び、病気は最小限に抑えられる。

◇ **真理または神聖なる存在の顕現：** 一部の予言は、真理が明確に現れること、あるいは覚者や聖人が現れて人類を導くことについて語っている。

➤ **一つの共通の希望に対する異なる呼び名：**

◇ **ユダヤ・キリスト教の伝統では、** それは救世主（メシア）／イエス・キリストの再臨の

後に確立される「地上の天国」（Heaven on Earth）、「神の国」（Kingdom of God）であるかもしれない。

- ✧ **仏教では、** 末法の時代の後、希望は弥勒仏の出現に託される。彼は「人間浄土」を築き、そこでは衆生が安楽に暮らし、修行が容易になるという。
- ✧ **ヒンドゥー教では、** カーリー・ユガが終わると、サティヤ・ユガ（あるいはクリタ・ユガ）が再び訪れる。それは真実、徳、そして平和の時代である。
- ✧ **西洋の秘教では、** しばしば「水瓶座の時代」（Age of Aquarius）が、覚醒、同胞愛、そして飛躍的な精神的進歩の時代として語られる。
- ✧ **北欧神話でさえ、** ラグナロクと旧世界の破壊の後、海から新たな世界が再生する。そこは青々として肥沃であり、生き残った神々と一組の人間（リーヴとリーヴスラシル）が、より良い新しい子孫を築き上げる。

「黄金時代」への渴望は、単なる空想の夢ではないと私は感じる。それは、生命の回復力と向上力への内在的な信念、どんな困難や試練を経験しようとも、善と美が最終的に勝利するという深い楽観主義を反映している。それはまた、人々がより良い未来にふさわしくなるために、自己と世界を改善しようと努力する強力な動機付けともなるのである。

テイラーの見解：

宇宙の周期、必要な浄化、そして再生、黄金時代への燃えるような渴望といった大きなテーマについて熟考する時、それらは単に予言の物語を構成する要素ではないと私は思う。それらは、人間が意識的であれ無意識的であれ、感じ取っている生命の普遍的な法則、宇宙のリズムを反映しているかのようである。

終わりと始まり、破壊と再生、闇と光——それらは切り離すことのできない対の存在であり、万物

の絶え間ない運動と進化の原動力である。種が緑の木に芽吹くために土の中で朽ちなければならないように、芋虫が鮮やかな蝶になるために窮屈な蛹の段階を経なければならないように、人類と文明もまた、象徴的な「死」、痛みを伴う浄化を経験し、変容して新たな高みに達する必要があるのかもしれない。

それゆえ、予言における終わりのテーマは、最初は恐れを引き起こすかもしれないが、より大きな文脈で見ると、完全に否定的なものではない。それは、革新への大きな希望、古い限界を乗り越えてより完全な状態へと向かう可能性を内包している。それは、最も暗い時でさえ、未来の生命の芽が静かに育まれていることを、私たちに思い出させてくれる。

そしておそらく、その最も重要な生命の芽の一つ、大災難の警告の中で予言が頻繁に言及する最も輝かしい希望の光の一つこそ、闇を乗り越えて夜明けへと人類を導く使命を帯びた、救世主、聖人たちの出現なのである。それが、次のセクションで私たちが共に探求していくテーマとなる。

3. トンネルの先の光：救世主と末劫の時代の希望のメッセージ

大災難、浄化、そして一つの周期の終わりといった光景が予言によって描き出される時、人々の心には大きな問いが浮かび上がることが多い。人類は、それらの恐るべき試練に独りで立ち向かうために見捨てられるのだろうか？それとも、深い闇の中で、道を照らす一つの光、灯されるべき具体的な希望が存在するのだろうか？

私が気づいたのは、末劫の時代に関する警告と常に並行して現れる、最も大きな慰めと力をもたらすメッセージの一つが、まさに、人類を導き、道徳を回復させ、秩序を再建し、そしてより輝かしい新時代を開くために訪れるであろう、一人の救世主、一人の聖人、一人の偉大な覚者の出現に関する信仰と予言であるということだ。

これは、いくつかの文化圏だけの孤立した信仰ではなく、世界中の多くの宗教、多くの精神的伝統を通じて響き渡る、普遍的な渴望、待ち望む心なのである。歴史の最も

危険な時において、人間は常に、聖なる助け、高次元の存在からの介在に目を向けてきたかのようである。

● 多くの文化における救世主／聖人／弥勒仏への待望：

神聖なる存在がこの世に降臨し、あるいは使者を遣わして、重要な段階で衆生を救済することは、予言によって明らかにされた、宇宙計画の必然的な部分であるかのようである。彼らの出現は、救済をもたらすだけでなく、人間が見捨てられてはいないこと、そして神仏の愛と慈悲が無限であることを確証するものでもある。

➤ 救世主（メシア）（ユダヤ教とキリスト教）：

- ◇ ユダヤ教において、救世主（メシア、油を注がれし者の意）の出現への信仰は、その基盤の一つである。彼はダビデの家系に属する王であり、イスラエルの民を圧政から解放し、離散したユダヤ人を呼び戻し、神殿を再建し、そして地上に平和と正義の王国を確立する者として待望されている。

☆ **キリスト教は、** イエス・キリストこそが最初に来臨したメシアであると信じ、信者たちは彼の再臨（Second Coming）を待ち望んでいる。その時、彼はこの世を裁き、悪を滅ぼし、神の永遠の王国を確立するという。
『ヨハネの黙示録』は、この栄光ある再臨について非常にはっきりと描写している。

➤ **弥勒仏（マイトレーヤ）（仏教）：**

仏教において、弥勒仏（マイトレーヤ、「慈氏」または「友」を意味する）は未来の仏であり、釈迦牟尼仏の教えが衰退した後（末法の時代の終わりに）、地上に出現するとされる。彼は龍華樹の下で成仏し、三度にわたって法を説き（龍華三会）、無数の衆生を済度し、そして人々が高い寿命を持ち、道徳が回復され、修行が容易になる平和で安楽な世界を創造するという。

興味深いことに、サンスクリット語の「マイトレーヤ」という名前は、他の伝統における救世主のいくつかの呼び名と、語音や意味において類似性を持っており、深いつながりを示唆している。

➤ **サオシュヤント（ゾロアスター教）：**

最も古い一神教の一つであるゾロアスター教において、サオシュヤント（救世主）は、最後の再生（フラシヨ・ケレティ）をもたらし、悪を完全に打ち負かし、世界を浄化するために、時の終わりに現れる人物である。最後の三千年紀に三人のサオシュヤントが現れ、最後のサオシュヤントが全面的な革新の事業を遂行するという。

➤ **カルキ・アヴァターラ（ヒンドゥー教）：**

ヒンドゥー教において、カルキはヴィシュヌ神の十番目かつ最後の化身（アヴァターラ）と見なされており、カーリー・ユガの終わりに現れる。彼は白い馬に乗り、燃える剣を手にし、悪や不正な者たちを滅ぼし、ダルマ（真理、道徳）を再確立して、新たなサティヤ・ユガを開くと描写されている。

➤ **ノストラダムス、エドガー・ケイシー、その他の託宣における聖人たち：**

ノストラダムスにも、恐るべき戦争の後に平和をもたらす「大君主」（Great Monarch）あるいは偉大な精神的指導者の出現について語っていると解釈される四行詩がある。エドガー・ケイシーもまた、イエス・キリストの再臨と新時代の始まりを予言した。チャン・チンや劉伯温のような東洋の託宣もまた、世を救い民を済度し、太平を再建する「聖人」、「明君」あるいは「真主」の出現について頻繁に言及している。

呼び名や詳細は異なるかもしれないが、最後の時代に神聖な使命を帯びて現れる一人の救世主、一人の聖人のイメージは、非常に強力で普遍的なモチーフであると私は認識している。それは、神々の介在、苦痛と不正からの解放、そして智慧と慈悲によって導かれる未来への、人類の燃えるような希望を表現しているのである。

● 救世主に関する予言のしるしと象徴：

救世主の出現への信仰は、単なる一般的な概念にとどまらない。宗教経典から民間の託宣に至るまで、多くの予言は、その場所、時期、特徴、さらには彼の名前に関連する具体的な詳細、しるし、象徴を明らかにしているかのようである。

私自身、情報源を調査し、繋ぎ合わせる過程で、多くの異なる文化からのいくつかのしるしが驚くほど一点に収束し、同じ方向を指し示しているように思われることに気づいた。私が様々な予言資料や解釈者から収集したものを、読者の皆様が共に熟考するための「情報のピース」として、ここに提示させていただきたい。これは、絶対的な断定や唯一の解釈を押し付けることを目的とするものではない。

➤ **降誕／出現の場所 – 東方からの呼び声、中土（中国）にて：**

最も多く言及され、多くの予言の源泉で大きな類似性を持つしるしの一つは、最後の時代の救世主、聖人が、東方に出現するか、あるいはその起源を持ち、多くの具体的な解釈が中国（中土）を指し示していることである。

- ☆ **聖書において、**『マタイによる福音書』第2章は、東方からの博士たち（マギ）が、生まれたばかりのイエス・キリストを礼拝するために訪れた物語を伝えている。マタイによる福音書2章1-2節（新共同訳）にはこうある。

「イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。』」東方での星の出現と、これらの博士たちの旅は、東方から救世主へと至る神聖な導きの強力な象徴となった。

- ☆ **仏教の伝統全般においても、**末法の時代の後、未来に弥勒仏が東方に出現し、正法を説き、衆生を済度するという予言がある。

☆ **より具体的には、** 明代の劉伯温による有名な予言書『推碑図』の中には、研究者によって、弥勒仏（あるいはこの時代の救世主）がこの世に下生する場所を非常にはっきりと示していると解釈される一節がある。例えば、『推碑図』巻二には次のような一節がある。

「大覺者『透虛到南閩浮提世界中天，
在中國金雞目，奉玉清時年劫盡，龍華
會虎兔之年到中天，認木子為姓。』」

（大覺者は『虚を突き抜け南閩浮提世界の中天、中国の金鶏の目に在り。玉清を奉じる時、年の劫は尽き、龍華会は寅卯の年に中天に到り、木子を姓と認む。』） 解釈者たちは、「中國金雞目」（中国の金鶏の目）が中国における特別な場所を暗示していると考えている。彼らの解釈によれば、中国の地図は金色の鶏（金鶏）の形に似ており、「目」（mù）は目であるため、「金鶏の目」とは、その地図上の金鶏の目にあたる位置、例えば鶏の頭部にあたる東北地方の吉林省などを指すという。

「中天」もまた、中心、中原、すなわち中国と理解することができる。

- ☆ **もう一つの中国の古典的な予言書である『推背図』**（唐代の李淳風と袁天罡の作とされる）にも、中国における聖人の出現に関連すると解釈される卦象がある。例えば、**第四十四象**には次のような句がある。「日月麗天，群陰懾服，百靈來朝，雙羽四足。」（日月は天に麗しく、群陰は恐れ服し、百靈は来朝し、双羽四足あり。）多くの解釈者は、「日月麗天」が公明正大さを暗示し、この出来事が中国で起こり、そこで聖人が出現して邪悪な勢力を屈服させ、万物が帰順することをもたらすと考えている。
- ☆ **ノストラダムスの託宣**にも、「東方から来た男」（Man from the East）あるいは東方からの大きな影響力を持つ人物が、未来の出来事において重要な役割を果たし、大きな変動の後に平和や新時代をもたらすと解釈される四行詩がある。

☆ **テイラーの思索：** 聖人が出現する場所として、東方、そしてより具体的には中国（中土）が強調されていることは、この土地の歴史的、精神的な意味について私に自問させる。ここは、何千年にもわたって守られてきた深い文化的、精神的価値のために選ばれた場所なのだろうか、それとも、この選択には私たちがさらに熟考すべき何らかの「天機」が隠されているのだろうか？

➤ **出現の時期 – 象徴的な数字と干支：**

救世主が出現する正確な時期を特定することは非常に困難であり、通常、予言者たちはそれを比喩的に表現する。しかし、特に東洋の託宣においては、時間と特定の干支に関連するいくつかのしるしが繰り返し言及されている。

☆ **卯（うさぎ）の年と関連する干支：** 多くの予言、特に弥勒仏や世を救う聖人に関する予言において、卯（兎）の年はしばしば重要な時期として言及される。例えば、劉伯温の

『推碑図』において、先の引用には次のような一句がある。「龍華會虎兔之年到中天，認木子為姓。」（龍華会は寅卯の年に中天に到り、木子を姓と認む。）これは、龍華会（弥勒仏が法を説く時）が寅（虎）と卯（兔）の年に起こり、卯の年には聖人（木子）が「中天」（中国）に出現すると解釈される。

『推碑図』の他のいくつかの解釈では、「時
到兔頭蛇尾見太平」（兔の頭、蛇の尾に至る時、太平を見る）という句がある。あるいは、「酉の年を待って初めて平らぎ、申酉の年を待って初めて戦乱は終わる」といった句もある。これは、この大きな出来事の各段階を示すために、多くの干支が組み合わされていることを示している。研究者たちはまた、朝鮮の有名な予言書である『格庵遺録』（キョガムユロク）の中にも、世を救うために「卯の年」（兔の年）に出現する聖人についての予言を見出している。

- ☆ **聖書における数字と周期：** 聖書、特にダニエル書とヨハネの黙示録には、予言的な期間に関連する多くの象徴的な数字（例：7、10、

12、40、70、1260、1290、1335、2300）が存在する。神学者や聖書研究者たちは、これらの数字を解読し、それらを歴史的出来事や最後の時代に関する予言と結びつけるために多大な努力を費やしてきた。多くの異なる解釈があるものの、これらの数字の存在は、何らかの神聖な「予定表」があることを示唆している。

☆ **テイラーの注記：** 偉大な覚者や予言者たちが、通常、絶対的に変更不可能な具体的な年月日を明示せず、象徴的なイメージ、数字、干支を用いるのは、おそらく人々の信仰心と悟りを試すためであろう。天機は完全に漏らすことはできず、人間の選択が真に心根から発せられるためには、ある程度の「迷い」を残すことが必要なのである。

➤ **彼の名前に関連する呼び名や文字 – 「木子」李の謎：**

これは、東洋の予言研究者たちが最も深く関心を寄せている側面の一つであり、多くの情報源から注目すべき収束が見られる。

☆ **「木子」（もくし）の李（り）姓：** 劉伯温の『推碑図』にある、「認木子為姓」（木子を姓と認む）という句は、非常に明確な指針である。「木」の字の上に「子」の字を重ねると、「李」の字になる。劉伯温の『焼餅歌』にも、明の太祖と劉伯温の間の対話の中に、「木子の聖人」を暗示する一節がある。宋代の有名な予言者である邵雍（しょうよう）も、その作とされる『皇極経世』や他の作品の中で、未来の聖人が李姓を持つことについての予言を残している。何百年も隔てた予言書の中でこの詳細が繰り返し現れることは、多くの人々に、これが明らかにされた重要な天機であると信じさせている。

☆ **その他の称号：** 具体的な姓名の他に、救世主は既に述べたように、メシア、マイトレーヤ（弥勒）、転輪聖王、創世主、万王の王といった多くの称号でも知られている。称号の

多様性にもかかわらず、役割と使命において一貫性があることは、異なる文化のレンズを通して表現された普遍的な真実を示している。

☆ テイラーの思索：

予言者たちが文字分解や隠喩を用いて聖人の名前について語るのは、おそらく天機を保つためだけでなく、後世の人々の智慧と誠意を試すためでもあるだろう。真に心を込めて探求し、縁があり、悟性を持つ者だけが、これらのメッセージを解読できるのである。

「転輪聖王」（法輪を転がす王）という称号、すなわち正法を用いてこの世を教化する王の姿について熟考する時、私は個人的な連想を禁じ得ない。この「転輪」という言葉は、法を転がし、広めるという意味を持ち、私が知る限り現在、世界中で非常に広く流布し、多くの人々に尊ばれ、心性を修養するための指針とされている『転法輪』という名の書物を思い起こさせる。この古代の称号と、私たちの時代に起こっていることとの間に、何らかの意味のつながりがあるのだろうか？これは

おそらく、私たち一人ひとりが、自らの熟考と体験を通じて答えを見つけ出すべき問いなのであろう。

➤ **彼の使命と品格 – 大法を伝えて済度し、善悪を分ける：**

詳細は異なるかもしれないが、ほとんどの予言は、救世主／聖人が、特に末劫の時代において、非凡な品格と崇高な使命を持つことで一致している。

◇ **宇宙の大法を伝える：** 彼は単に古い宗教を復興させるだけでなく、全く新しい大法、すなわち人種や宗教を問わず全ての衆生を済度する能力を持つ、宇宙の普遍的な真理を伝える可能性がある。この法は非常に奥深く、人々が心性を高め、身体を浄化し、そして覚悟に至るのを助けることができる。劉伯温の『推碑図』には、「彌勒佛坐寶山，講說真法度原人。」（弥勒仏は宝の山に座し、真の法を説いて元の人々を済度する）という句がある。

- ◇ **寺院にはいない：** 多くの予言が強調する特異な点は、この聖人が伝統的な僧侶の姿で現れるのではなく、寺院や修道院にはおらず、一般民衆の中に溶け込んで暮らし、日常の言葉を用いて法を説くということである。劉伯温は『焼餅歌』の中で、明の太祖から最後に道を伝えるのは誰かと問われ、次のように答えている詩がある。

原文：

「無相僧，亦無相道，

戴四兩羊皮帽。

真佛不在寺院中，

彌勒原來是本教。」

意味：

僧の姿もせず、道の姿もせず、

四両の羊皮の帽子をかぶる。

真の仏は寺院の中にはおらず、

弥勒こそが元々の教えの主なの
である。

これは、彼の法が社会の中で、あらゆる階層
の人々に広く伝えられることを示唆している。

- ◇ **善悪を分け、善人を救い、悪人を淘汰する：**
彼の使命は、単に法を説くだけでなく、混乱
の時代に善と悪を明確に分けることでもある。
真の法を信じ、心を修め善に向かう者は、大
災難を乗り越えて救われる。それを拒絶し、
悪に従い、正法を誹謗する者は淘汰される。
これは、各個人の選択に基づく「大審判」な
のである。
- ◇ **無限の慈悲と超越した智慧：** 彼は全ての衆
生に対して限りない慈悲を持つが、同時に万
事を見通す智慧と、悪を滅し善を掲げる威厳
をも備えている。
- ◇ **テイラーの所見：** この時代の救世主の使命
は、包括的であるように思われる。それは、

単なる魂の救済だけでなく、道徳的、文化的価値全体の再建であり、それにふさわしい人々のための全く新しい時代の幕開けなのである。私たちの時代に「宇宙の大法」が伝えられるということについて熟考する時、私は過去半世紀ほどの世界の精神的背景と修養の潮流を振り返らずにはいられない。もし本当に、今がそのような真の法が広く伝えられる時期であるならば、私たちはその兆候を見るはずである。世界の多くの場所で、多くの信奉者や実践者を引きつける導師や精神的指導者が現れてきた。例えば、インドでは、一部の有名な導師が、自身が全く新しい独自の法門を伝えていると公言しているわけではないかもしれないが、大勢の信者を魅了する説法や分かち合いを行ってきた。東アジア諸国、特に 1980 年代から 90 年代初頭にかけての中国では、「気功ブーム」が巻き起こり、多くの気功師が出現し、「功を伝え法を説き」、健康と精神を高めるために、何千万人、時には何億人もの人々が練習に参加した。その中には、国内だけでなく世界中にまで、非常に急速に発展し、力強く広まった法門もあ

り、その学習者の数は膨大な数に上ると推定されている。私自身、これらの現象を、宗教的な形式を取らずに民衆に広く伝えられる大法に関する予言と照らし合わせる時、多くの連想を禁じ得ず、驚くほど一致すると思われる筋書きに気づく。しかし、これらの「ピース」を結びつけ、最終的な結論を出すことは、おそらく各読者の感得と熟考に委ねられるべきであろう。予言という大河は、常に私たち自身が探求し、その内に秘められた貴重な宝石を見つけ出すよう招いているのである。

● 自然からの神聖なしるし：優曇華（うどんげ）の出現：

文書に記録された予言の他に、予言者や古代の經典は、覚者たちの出現や重大な出来事を知らせる、自然そのものからの神聖なしるしについても語っている。近年、多くの人々が関心を寄せている顕著なしるしの一つが、まさに優曇華の出現である。

- **仏典による意味：** 仏典によれば、優曇華（サンスクリット語で Udumbara）は霊妙な花であり、伝承によれば三千年に一度しか咲かない。優曇華の出現は、極めて稀な吉兆と見なされ、転輪聖王（武力ではなく正法によって世界を治める王）あるいは弥勒仏がこの世に降臨したことを知らせる。仏教辞典である『慧琳音義』には、「優曇華は霊妙な吉兆によって生じるもので、これは天上の花であり、この世にはない。もし一人の如来あるいは転輪聖王がこの世に出現すれば、その方の広大な福德によって、この花が現れるのである」と記されている。

- **特徴と出現報告：** 優曇華は非常に小さく、純白で、茎は絹糸のように細く、ほのかな芳香を放つと描写される。不思議なことに、それらは木の葉、枝、果物、金属（読者が共有してくださった、鉄の階段の縁に咲いた優曇華の写真のように）、ガラス、仏像など、いかなる表面にも咲くことができる。ここ数十年の間に、韓国、中国、台湾、香港、マレーシア、シンガポール、オーストラリア、アメリカ、そしてベトナムに

至るまで、世界中から優曇華の発見報告が絶えない。

- **様々な解釈とテイラーの思索：** もちろん、科学界はこの現象に対して異なる説明、例えばクサカゲロウという昆虫の卵であるといった説を提示するかもしれない。しかし、多くの人々、特に仏教への信仰を持つ人々や、精神的な兆候に関心を持つ人々にとって、優曇華の出現は依然として深い精神的な意味を持つ。私が思うに、どのような解釈をするにせよ、神聖な伝説と結びついた稀有な自然現象が、世界中の多くの場所で同時期に一斉に出現するという事実は、私たちに深く考えさせずにはおかない。それは、私たちの通常の理解を超える不可思議な事柄が存在するという、一つのリマインダーのようである。そして、もしその象徴的な意味を信じるならば、優曇華はまさに希望の使者であり、おそらく私たちは、聖なる方々が関心を寄せ、そして私たちの間に存在しているかもしれない、非常に特別な時代に生きていることを知らせる「鐘の音」なのである。

● 「間接的な天機の啓示」としての文化的な象徴：復活祭とその隠された意味

時として、「天機」や重要なメッセージは、直接的な予言文書を通じて伝えられるだけでなく、何千年もの間存在してきた文化的な象徴や伝統的な祝祭の中に、巧みに隠されていることがある。これらのメッセージが、世代を超えて人々に記憶され、語り継がれるように、目に見えない采配があるかのようである。

- **復活祭（イースター）とその象徴：**復活祭はキリスト教の最も重要な祝祭の一つであり、イエス・キリストが死から甦ったことを記念するものである。しかし、多くの文化研究者や象徴学者は、復活祭の一般的な象徴が、最後の時代と救世主の出現に関する予言の詳細と驚くほど一致する、より深い意味の層を帯びているようにだと指摘している。

- ☆ **イースター・バニー：**多くの西洋文化において、ウサギは復活祭の象徴であり、子供たちに卵を運んでくる。興味深いことに、私た

ちが議論してきたように、「卯の年」（兎の年）は、多くの東洋の予言が聖人の出現に関連して言及する重要な時期である。これは単なる偶然の一致なのだろうか、それとも、世界的に普及した文化的な象徴の中に、兎の年に関するメッセージを「暗号化」する一つの方法なのだろうか？

☆ **イースター・エッグ：** 卵は、新しい生命、再生、繁栄、そして始まりの古代からの象徴である。復活祭で卵を飾り付け、贈り合うことは、甦りと新たな始まりへの信仰を表している。卵のイメージはまた、東洋の予言における「金鶏」の姿にも連想されうる。そこでは、「鶏が卵を産む」ことが、生成と根源を象徴している。

☆ **「復活」という言葉自体：** 「復活」（Resurrection）という言葉は、甦り、再生という核心的な意味を持つ。末劫の時代と救世主の出現に関する予言の文脈において、「復活」は単に一個人の甦りを意味するだけでなく、真理の復活、失われた道徳的価値の

復興、そして新しい時代、「新しい地、新しい天」の始まりをも意味する可能性がある。

私自身、これらの「一致」に目を向ける時、重要なメッセージが、大衆文化の中に「種蒔き」されるという、奇跡的な采配を感じずにはいられない。それらは、あたかも散らばった「パズルのピース」のようであり、探求心と縁を持つ者がその繋がりを認識するのを待っている。おそらく、これらの文化的な象徴こそが、私たちが最後の時代の試練に直面している時でさえ、希望と再生を告げる、喜びの「鐘の音」なのであろう。

● 新時代の核心的な道德原理に関する予言：三つの文字 「真・善・忍」（真-善-忍）

予言、特に末劫の時代と救世主の出現に関する東洋の予言を探求する旅の中で、私にとって最も重要で深い感銘を受けた発見の一つは、いくつかの予言が、人々が災厄を乗り越え、新しい時代に入るための「鍵」となるであ

ろう、核心的な道德原理、普遍的な基準を明らかにしていたという事実である。

- **劉伯温の『推碑図』における予言：** 私たちが既に言及したように、劉伯温は、その作品『推碑図』の中で、大災難と弥勒仏の出現を予言しただけでなく、人々が従うべき原理を非常にはっきりと示している。彼はこう記している。

「上上天皇佛 真善忍 三字佛，

中下人民 皆歸三字佛，

得在三字佛前 過邊境，

佛國仙境 樂無邊。」

（上上天皇佛 真善忍 三字佛， 中下人民 皆歸三字佛， 得在三字佛前 過邊境， 佛國仙境 樂無邊。）

大意：（至高の天の皇仏は真善忍の三文字の仏であり、あらゆる階層の人々は皆な三文字の仏に帰依する。三文字の仏の前で境界を越える（災

厄を乗り越える）ことができた者は、
仏国仙境の楽しみは無限である。）

この予言は、「真・善・忍」（Zhen-Shan-Ren）こそが最高の仏法の原理であり、人々が救われるために目指し、実践すべき道德基準であることを断言している。

➤ **真・善・忍の意味：**

真： 真実、誠実であること。真の言葉を語り、真の行いをし、偽らず、見せかけず、最終的に真人に修め成ること。

善： 善良、慈悲であること。常に他者のために考え、善い行いをし、人を害さず、同情の心を持つこと。

忍： 忍耐、我慢強さ、寛容であること。苦難に耐え、恨まず、道德を守り、逆境に立ち向かう固い意志を持つこと。

私の思索： 劉伯温のような偉大な予言者が、600 年以上も前に、末劫の時代の救済の道として、これほど具体的に「真・善・忍」の三文字を示していたことは、非常に驚くべきことであり、深い意味を持つ。それは単なる予測ではなく、人類が立ち返るべき根本的な道德価値についての明確な指針でもある。

真偽の区別が難しく、人々が物質的な誘惑や否定的な感情に流されやすい、変動に満ちた世界において、「真・善・忍」を固く守り、実践することは、あたかも灯台、人々が自らを省み、自己を完成させ、内なる平安と時代の試練を乗り越える希望を見出すための、普遍的な基準となるかのようである。これこそが、多くの予言が言及してきた「宇宙の大法」、人々が自らの真の本性に戻り、宇宙のより高次の法則と調和するための心性修煉の道なのであるか？

4. テイラーの見解

本章で私たちが共に探求してきた、予言における時を超えたテーマの旅――変動と大災難に関する警告のこだまから、必要な浄化の認識、そして最後に、救世主によって導かれる再生、黄金時代への燃えるような渴望に至るまで――を読者の皆さんと共に歩んできた今、私は、古人の智慧と宇宙の奇跡的な采配の前に、畏敬の念と圧倒される感覚を禁じ得ない。

一人の探求者として、そして熟考する者として、私は、多くの異なる文化、宗教、そして予言者たちから、大きなテーマ、さらには具体的な予言の詳細（特に、救世主に関するしるし、彼が出現する場所、そして彼がもたらす原理）までもが、驚くほど一点に収束していることに気づく。東から西へ、古代から現代に至るまで、まるで一つの共通の「脚本」、一つの首尾一貫したメッセージが、人類に徐々に明らかにされているかのようである。

このことは、予言が単なる偶然の予測や想像の産物ではないことを示唆している。それらは、より大きな絵のパズルのピースであり、宇宙の法則、歴史の周期、そして

地球と人間に対する神聖な計画を反映しているのかもしれない。

特に、予言が単に災厄を警告するにとどまらず、救世主の出現と、「真・善・忍」のような、私たちがまさに探求してきた核心的な道德価値の実践を通じて、希望の道を示しているという事実は、非常に深い意味を持つ。それは、いかなる状況においても、人間の選択こそが決定的な要素であることを強調している。私たちは運命の受動的な操り人形ではない。予言された変動に直面した時でさえ、私たちが善を選び、良心を固く守り、心性を修養し、そして宇宙の普遍的な原理を実践することは、単なる信仰の問題ではなく、自らを救い、世界の肯定的な変容に貢献するための具体的な行動なのである。

予言がもたらす希望は、内なる努力を必要としない、外部からの奇跡を願う受動的な待望ではない。逆に、それは、自己を完成させ、自らを浄化し、そして善良な価値観の普及に貢献するという、各個人の責任を伴う、能動的な希望である。より良い未来への信念の力、そして人類を導く上での救世主の役割は、私たち一人ひとりが耳を傾け、変化し、そして良心の呼び声に従って行動する準備ができた時にのみ、実現されうるかのである。

これらの時を超えたテーマ、これらの警告と希望は、私たちの現代世界の文脈において、今なお響き渡り、特別な意味を持っているのだろうか？無数の岐路に立ち、真偽の情報が入り乱れ、そして人々が核心的な精神的価値からますます遠ざかっているように見える世界。過去からの「鐘の音」は、まだ私たちを揺り動かすのに十分な力を持っているだろうか？そして、多くの人々が古代の多くの予言が成就していると信じるこの新しい時代において、私たち一人ひとりにとっての「鐘の音」は、どこにあるのだろうか？

* * *

第七章：現代の鐘の音 — 選択 への呼びかけ

第五章で読者の皆さんと共に「予言という大河」の曲がりくねった道筋を辿り、託宣の「成就」について、また解釈という技術の挑戦と落とし穴について共に熟考し、そして特に、変動、浄化、再生への渴望、そして救世主

への希望といった時を超えたテーマに耳を傾けた後、私は、これらの思索を私たち自身の現在の文脈に立ち返らせる時が来たと感じている。

私たちは特別な時代に生きている。政治、経済、社会から環境、そして人間の意識の深い変容に至るまで、あらゆる面で急速かつ複雑な変動の時代である。情報が爆発し、真偽が入り乱れ、時に私たちを戸惑わせ、方向感覚を失わせる時代である。しかし、まさにこの時代にあって、多くの人々が、古代の予言がかつてないほど明確に成就していると感じ、警告の「鐘の音」が日増しに切迫して鳴り響いていると感じているのである。

この第七章で私が読者の皆さんと共に答えを探したい中心的な問いは、これである。この情報化と絶え間ない変動の時代において、予言はまだ何らかの役割を担っているのだろうか？ 私たちが聞いているかもしれない「鐘の音」は、何千年も前の託宣からであれ、現代の予感やメッセージからであれ、私たちの時代にとって、そしてより重要なことに、私たち一人ひとりの選択にとって、何か特別な意味を持っているのだろうか？ 「現代の鐘の音」が伝えたいと願う招きとは、一体何なのだろうか？

私たちは、新しい時代における予言の特徴、その影響と挑戦に正面から向き合い、そしてそこから、おそらく予言という大河が、時代の狭間に立つ私たち一人ひとりに託したいと願う、より深い意味、核心的なメッセージを探し求めていくことにしよう。

1. 情報化時代における予言：特徴、影響、そして課題

今日、私たちが予言的な情報にアクセスし、それと関わる方法は、過去の世代とは全く異なっていることは否定できない。デジタル時代は、未来から来るとされるこれらの「声」の存在と普及に、機会と新たな挑戦の両方をもたらした。

● 予言的情報の爆発的增加と拡散：

- **インターネットとソーシャルメディア – 諸刃の剣：** かつて予言は、書籍、口コミ、あるいは公式な宗教的ルートを通じて、ゆっくりとしたペ

ースで、ある程度の管理下で伝えられていた。しかし今日、インターネットとソーシャルメディアのプラットフォームは、予言的情報のための「超高速道路」となっている。ワンクリックで、一つの予言（古代のものであれ、最近のものであれ、信頼できるものであれ、完全に捏造されたものであれ）が、数時間、時には数分で世界中の何百万人もの人々に広まる可能性がある。これは一面では、価値ある情報や警告が、伝統的な検閲の壁を越えてより多くの人々に届く助けとなる。

- **情報源の多様性（と混沌）**：情報化時代のもう一つの帰結は、予言の発表と解釈の「民主化」（あるいは時には「混沌化」）である。少しの文才、奇妙な夢、特別な直感、あるいは単に注目を集めたいという欲求を持つ者なら誰でも、「予言者」を名乗り、独自の予測を発表したり、古代の予言を自分なりに再解釈したりすることができる。これにより、信じられないほど多様で豊富な予言的情報の「市場」が生まれるが、それは同時に「偽物や模倣品」で溢れかえっており、公衆を必然的に困惑させる。

- **現実世界への影響と世界的拡散 – たつき諒氏の予言に関するケーススタディ：**

情報化時代における予言の影響をより具体的に理解するために、世界的に大きな注目を集めた特定のケースを見ることができる。それは、2025 年 7 月 5 日に起こる可能性のある「大災難」に関する、たつき諒氏の予言である。

この予言は、スピリチュアルなフォーラムに留まらず、国境を越え、多くの国際的な報道機関によって注目すべき社会現象として報じられた。その影響は決してサイバー空間に限定されたものではなかった。懸念から、この期間に予定されていた日本への旅行をキャンセルした世界中の人々がいたという具体的な報告があった。

不安は、地質データが一連の異常な活動を記録したことでさらに高まった。6 月 23 日から 7 月 5 日までの間に、予言された地域で 1000 回以上の小規模な地震が発生した。専門家はこれを通常地震活動の可能性もあると指摘したが、この偶然の一致は、

予言を信じる人々の確信をさらに強めた。7 月 5 日以前のソーシャルメディアは、熱のこもった議論、仮説、そして祈りでまさに沸騰していた。

そして、その時が来た。

● 予言の「沈黙」と考察の波：

私がこの文章を書いている今、2025 年 7 月 5 日午前 11 時 49 分（日本標準時）である。たつき諒氏が予言した、午前 5 時に日本とフィリピンで地震と津波を伴う「大災難」は、予測通りには起こらなかった。予告された瞬間の自然の「沈黙」は、逆説的にも、先行した不安よりもさらに強力な考察の波を引き起こした。ソーシャルメディアでの議論の波は間違いなく続くだろうが、それは恐怖から二つの方向に分岐する。一方では、懐疑論者たちがおそらく勝ち誇ったように笑い、これを予言の不条理の証拠と見なすだろう。もう一方では、人々がより深い説明を求めるだろう。

この出来事は、私たちが予言の「不確実性」にどのように向き合うかについての、直接的で鮮やかなケーススタディとなり、様々な解釈の道を開いた。

➤ **第一の可能性：予言は時期的に不正確だったが、出来事はまだ起こる可能性がある。** 多くの古代の予言と同様に、時間の詳細は単に象徴的であるか、予言者がメッセージを「受信」する過程で特定の誤差が生じることがある。この見方に傾く人々は、たつき諒氏の夢が差し迫った大きな出来事の「エネルギー」を捉えたが、具体的な時期がずれた可能性があると信じている。したがって、イベントが午前 5 時きっかりに起こらなかったからといって、危険が完全に去ったわけではない。警告は依然として価値があり、準備と警戒は必要である。

➤ **第二の可能性：予言は完全に間違っていた。** これは懐疑論者の視点であり、彼らはこれを、いかに鮮明な予感や夢であっても間違い得る典型的な例と見なす。彼らは、公衆の注目が個人的な夢を世界的な規模の出来事にまで増幅させ、それが起こらなかったことこそが、未確認の予

測に過度の信頼を置くべきではないという最も明確な証拠であると主張する。彼らにとって、これは混沌とした情報化時代における冷静さと批判的思考の重要な教訓である。

- **第三の可能性：予言は元々正確だったが、より高次元の力によって積極的に変更された。** これは、深い信仰を持つ多くの人々が熟考する、非常にスピリチュアルな解釈である。彼らは、2012 年のマヤの予言や今回の大災難のような、予言された終末的な出来事は、古い宇宙の神々によって定められた「脚本」の一部であったと信じている。しかし、これらの人々はまた、創造主 – すなわち末法の時代の救世主 – が既に人間の世界に來られているとも信じている。主は、その破壊の脚本を実行するために來られたのではなく、逆に、衆生を救済し、善なる念を呼び覚まし、古い安排を打ち破るために、大いなる法（大法）を広めるために來られた。したがって、大きな災難の延期は、主の偉大なる慈悲の行いである。主がそうされるのは、十分に多くの人々が善人になったからではなく、まさに救われるべき人々の数がまだ足りず、あまりにも

多くの人々がまだ迷いの中にいて、目覚めて救済を受け入れる時が来ていないとご覧になっているからである。もし古い「脚本」がそのまま実行されれば、数え切れないほどの生命が、古い宇宙勢力の按排に従って悲劇的に淘汰されてしまうだろう。それゆえ、より多くの衆生を救いたいという計り知れない慈悲心から、創造主は時間を「延長」し、災難を延期して、人類が目覚め、正邪善悪を認識し、自らの未来を選択する更なる機会を与えることを決定された。この観点から見ると、災難が起こらなかったことは、予言が間違っていたことや危険が去ったことを意味しない。それは、遅延という奇跡であり、時間の猶予という恩寵であり、そして、残された時間は少なく、最後の機会が閉ざされる前に、私たち一人ひとりが速やかに目覚めなければならないという、より切迫した警告なのである。

- 情報の「海」で真偽を見分けるという挑戦：

前述の情報爆発と情報源の多様性は、公衆に巨大な挑戦を突きつけている。価値があり、示唆に富む予言と、単なるフェイクニュース、誤情報、あるいは不純な動機（例えば、利益のため、パニックを引き起こすため、あるいは政治的意図を果たすため）を持つ自称「予言者」の言葉とを、どのように見分ければよいのか？

- **好機を狙う「予言者」の危険性：** 多くの人々が将来に不安を感じる社会では、「神秘的」な源からの導きを求める需要が高まる可能性がある。これは、好機を狙う者たちにとって肥沃な土壌である。彼らは古代の予言に頼り、それを恣意的に解釈したり、フォロワーを引きつけ、本を売り、さらには詐欺を働くために、魅力的でセンセーショナルに聞こえる新しい「予言」を創作したりするかもしれない。
- **検証の複雑さ：** 古代の予言を検証することは既に困難である。オンラインで広まる「現代の予言」については、それは指数関数的に難しくなる。情報はしばしば明確な出典を欠き、編集さ

れたり文脈から切り離されたりしやすい。誰が最初に予言をしたのか、その動機は何だったのか、そして予言が本当に「成就」したのかどうかを判断するには、冷静な心、情報分析能力、そして時には特定の専門知識が必要となる。

- **公式情報の変動と非伝統的な「声」の役割：**

現在の時代において、予言や非伝統的な情報源に「活躍の場」を与えているもう一つの要因は、特定の状況下における公式情報チャンネルへの公衆の信頼の変動、時には低下である。

- 人々が公式な情報源（政府、国営メディア、大手機関など）が完全な情報を提供していない、あるいは情報が偏っており信頼できないと感じる場合、彼らは自然と代替の情報源を求める傾向がある。これらは独立系のニュースサイト、フリーランスのアナリスト、そしてもちろん、予言的なメッセージを伝える人々である可能性がある。

- 社会的な不安定や危機（経済的、政治的、疫学的）の時期に、未来が不透明で予測不可能になると、人々は説明、導き、そして希望の光をますます渴望する。予言は、未来の（たとえ曖昧な）姿を描き出し、しばしば出来事より深い意味についてのメッセージを伝える能力によって、その心理的ニーズに部分的に応えることができる。

* * *

私は、この現象が基本的な人間のニーズを反映していると考える。それは、特に混沌と不確実性に直面したときに、真実と意味を探求したいというニーズである。それはまた、公衆の信頼を築き、維持するという公式な情報チャンネルの責任についての問いを投げかける。「主流の光」が十分に明るくないとき、人々は他の「光の源」に目を向ける。たとえそれらの源が検証されていなくてもだ。

情報化時代における予言の特徴、影響、課題を認識することは、私たちがより積極的かつ意識的にそれらにアプローチするための第一歩である。それは、私たちがそれらを恐れたり拒絶したりするためではなく、より賢明な

「情報の消費者」となり、真の価値を選び分け、探し出す方法を知るためなのである。

2. 出来事の予測を超えて：スピリチュアルな視点から見た予言の深遠な目的

現代における予言情報へのアプローチの特徴、影響、そして挑戦を共に考察した後、私は、個々の出来事予測の正誤に関する議論を超え、さらに深く掘り下げ、予言がもたらしうるより深遠な目的と意味を探究する必要があると感じている。特に、一人の精神世界の探求者であり、実践者としての視点からである。

予言の最大の価値は、単に何が起こるかを私たちに知らせることだけに在るのだろうか？それとも、それらの託宣、啓示、夢の中には、より重要なメッセージ、呼びかけが隠されているのだろうか？

● 私の体得から（ティラー・リード）：

私自身の個人的な旅路、すなわちデータを求める研究者として、そして内なる微細な振動に耳を傾ける者としての両方の立場を通じて、私は、多くの偉大な予言の目的が、単に「未来の地図」を提供することにとどまらないらしいことを、徐々に感じ取ってきた。それらは、人間の意識の変容に向けられた、より深い意味合いを帯びているのである。

➤ **意識の覚醒 – 良心を呼び覚ます「鐘の音」**：多くの予言、特に大災難や末法の時代の衰退に関する警告は、私の感じるところでは、主に恐怖や絶望を振りまくことを目的としてはいない。逆に、それらは、人間を迷妄から、はかない物質的価値やこの世の快楽を追い求め、核心的な道徳的・精神的価値を忘れてしまうことから目覚めさせようとする、力強く、切迫した「鐘の音」のようである。それらは、人生がただ衣食住や名利、情だけではないというリマインダーのようである。私たちの運命を支配するより大きな法則が存在し、私たちが認識すべき責任があるのだ。道徳の衰退がもたらす結果についての警告は、まさに人々が時を移さず目覚め、自らを振り返り、良心と、善なるものへと立ち返るためにある。

➤ **因果応報の法則の強調 – 未来は完全に偶然ではない：**

予言の中に、隠れていようと現れていようと、頻繁に出現する重要なメッセージの一つが、因果応報（カルマ）の法則の肯定である。災害、戦争、あるいは王朝や文明の衰亡の描写は、しばしば過去または現在の人間による不正行為や道德の衰退と結びつけられる。このことは、未来が完全に偶然で制御不可能な出来事の連鎖ではないことを暗に肯定している。逆に、私たちが未来で直面する事柄は、大きなレベルで、まさに私たちが過去に蒔き、そして現在蒔いていることの結果なのである。「善には善の報い、悪には悪の報いあり」とは、単なる道德的な戒めではなく、予言者たちが理解し、伝えてきた宇宙の法則なのである。このことを認識することは、私たちの一つ一つの思考、言葉、行動について、より意識的になる助けとなる。

➤ **自由意志と選択の役割の肯定 – 「迷い」の中の機会：**

もし未来が硬直的に定められ、変えることができないものならば、人生、努力、そして修養の意味とは何だろうか？私は、たとえ未来に関する予測や「脚本」が予言者によって明らかにされたとしても、それは人間が自由意志と選択の権利を完全に失ったこ

とを意味するものではないと信じている。多くの場合、予言の目的は、まさに人々に「岐路」を認識させ、起こりうる可能性を予見させ、それによって個人と共同体の運命をより良く変えるための正しい選択をさせることにあるのかもしれない。歴史は、完全に定められた一本道ではない。それには、人間の選択、特に善と悪、正と邪の間の選択が、次の方向性を決定する重要な「結節点」、すなわち「交差点」が存在する可能性がある。神仏がこの世にあまりにも明確に現れず、天機が全ては明かされないことも、私の感じるところでは、必要な「迷い」を残すためである。まさにこの「迷い」の中にあってこそ、人間の選択は真に価値を持ち、懲罰への恐怖や恩恵への欲望からではなく、真に自らの本心、自らの悟りから発するものとなる。無数の誘惑と入り乱れる情報の中で、自ら真理を認識し、それに従うことを選択して初めて、その選択は真に尊いものとなるのだ。

- **浄化と新たな始まりへの機会 – 「終わり」の意味：**
第六章で議論したように、「終わり」に関する予言は、それが一つの周期、一つの時代の終わりであれ、痛みを伴うイメージを伴うことが多いが、通常、必要な浄化と、再生への、より良い新たな始まりへの

機会をも暗示している。スピリチュアルな視点から見れば、大きな変動や試練は、もはや適合しなくなったもの、否定的なものを宇宙が「淘汰」し、より高い心性を持つ新しい価値、新しい生命のための空間を譲るプロセスそのものであるかもしれない。それは、善念を固く守り、正法への信念を保つ者が、それを乗り越えて新しい時代に入るための機会なのである。「終わり」は終止符ではなく、より完成された状態へと向かうための変容なのである。

* * *

私が感じているのは、私たちがこのレンズを通して予言を見る時、その価値はもはや、一つの出来事を正しく予測したかどうかという点にのみあるのではないということだ。より重要なのは、それらが、私たちが目覚め、自問し、そして自ら進むべき道を選択するための、リマインダーであり、教訓であり、機会であるということなのだ。

3. 「最後の鐘」：特別な時代における個人の選択への呼びかけ

スピリチュアルな視点から見た予言の深遠な目的、意識を覚醒させ、因果応報の法則を肯定し、自由意志の役割を促すその呼びかけについて共に熟考してきた今、私は、過去から現在に至るまでのこれら全ての情報の流れ、全ての「鐘の音」が、一つの核心的なメッセージ、すなわち、私たち一人ひとりに向けられた、特に多くの人々が私たちが生きていると信じるこの時代——決定的な「過渡期」——における、切実な呼びかけに収束していくように感じる。

● 私たちが生きている時代 – 特別な「過渡期」か？

私たちがこれまでに探求してきた事柄を繋ぎ合わせてみると——多くの文化からの予言における変動、浄化、再生という大きなテーマの繰り返し（第六章）、末法の時代やカーリー・ユガについて描写されたしるし、具体的な特徴と使命を持つ救世主の出現に関する予言、優曇華のような神聖な自然現象の出現、そして、間近に迫った

大きな変動に関する現代の「予言の声」や予感（第四章、第七章）…これら全てが、一つの見解を指し示しているかのようである。すなわち、私たちが生きている時代は、普通の時代ではない、と。

多くの予言研究者、深い精神的実践を持つ人々、そして時局に敏感な一般の人々でさえも、私たちが人類史の重要な「岐路」に、二つの時代の間の「過渡期」に立っており、そこでは古いものが滅びゆき、新しいものが生まれようとしていると感じている。これこそが、予言が警告してきた「末劫の時代」、「最後の時代」なのかもしれないが、同時に、それは偉大な変容への機会を開く時でもある。

私は、「今こそがその時だ」と断定的な主張をしたいわけではない。なぜなら、天機は定め難く、一人ひとりの悟りもまた異なるからである。しかし、読者の皆様には、これらのしるしについて共に熟考し、多くの方向から響き渡る「鐘の音」に耳を傾け、そして、私たちが存在するこの時代に、何か緊急性、何か特別な性質があるのかどうかを、自ら感じ取っていただきたいのである。

● 「最後の鐘」とは何か？

「最後の鐘」について語る時、私は、ある特定の予言が全てを終わらせる最後の予言であると示唆しているわけではない。むしろ、私の感じるところでは、ここでの「最後の鐘」とは、本書を通じて私たちが共に探求してきた、全ての警告のメッセージ、良心を呼び覚ますメッセージ、そして善良な変化を促す呼びかけの総和そのものである。

それは、古代の経典における道徳的な戒めの言葉から鳴り響く鐘の音である。

それは、衰退がもたらす結果について警告する託宣から鳴り響く鐘の音である。

それは、因果応報の法則と宇宙の循環を描写するものから鳴り響く鐘の音である。

それは、救世主の出現と新時代への約束から鳴り響く鐘の音である。

そしてそれはまた、私たち一人ひとりの良心から鳴り響く鐘の音でもあり、何が正しく、何が間違っているのか、

この人生で本当に重要なことは何なのかを認識するよう、私たちを促している。

「最後の鐘」は、恐怖を振りまくためではなく、選択の緊急性、そして自らの運命を決定し、世界の未来に貢献するために私たちがその手にしている機会の尊さを知らせるためにあるのだ。

● 個人の選択への呼びかけ：

もし私たちが本当に特別な時代、重要な「過渡期」に生きているのなら、この「最後の鐘」は、私たち一人ひとりに対して何を呼びかけているのだろうか？私が予言という大河から感じ取り、熟考したところによれば、その呼びかけは、根本的な性質を持ついくつかの選択に集中している。

- **善を選び、良心を固く守ること：** 変動に満ち、道徳的価値が覆され、真偽の区別が付きにくい世界において、心に善良さを保ち、良心の呼び声に従って行動し、悪に同調せず、ありふれた物質的な誘惑に流

されないことは、かつてないほど重要になる。これは最も根本的な選択である。

- **道徳を高め、心性を修養すること：** 単に悪事を働かないということに留まらず、積極的に内面に向き合い、自らの欠点、執着、誤った観念を認識し、改めることである。（予言の中で一つの道として明らかにされているのを私たちが見てきたように）「真・善・忍」のような普遍的な道徳原理を実践することは、自らの心性を修養し、高めるための具体的な方法となりうる。
- **真の精神的価値に立ち返ることを選ぶこと：** 物質生活の心配事や多忙さを超えて、人生のより深い意味、人間と宇宙、神聖なる存在との関係について学び、熟考するための時間を取ることである。清らかな精神的エネルギーの源泉、真の教えを探し求め、それと繋がることは、私たちが内なる平安と人生の指針を見出す助けとなりうる。
- **親切と希望を広めることを選ぶこと：** 小さな善行の一つひとつ、誠実な言葉の一つひとつ、見返りを求めない助けの一つひとつが、闇の中に灯された一本の蠟燭のように、否定的なものを追い払い、周囲の

人々に肯定的なエネルギーを広めることに貢献できる。個人の選択の力を過小評価してはならない。なぜなら、まさにそれらの選択が、積み重なった時、共同体全体に大きな変化を生み出すからである。

私は信じている。世界の状況がどうであれ、予言がどのような形で成就しようとも、各個人の善良な選択の力は否定できないものであると。まさにこれらの選択が、彼ら自身の未来だけでなく、歴史の流れそのものを形作り、私たちがこの時代の試練を乗り越え、より良い未来へと入ることができるかどうかを決定するのである。

4. テイラーの見解

「現代の鐘の音」が次第に静まり、私たちが共に、情報化時代における予言の特徴、スピリチュアルな視点から見たその深遠な目的、そして特に、個人の選択への切実な呼びかけを振り返った今、私は、予言という大河を探求する旅が、最終的には私たち一人ひとりを、人間とし

ての生の最も核心的で、最も素朴な事柄へと立ち返らせるものであるかのように感じる。

それは、日々の私たちの思考、言葉、そして行動における、善と悪、光と闇との間の絶え間ない選択である。それは、自分自身の人生だけでなく、私たちが共に生きる共同体、世界全体に対する、各個人の責任についての深い認識である。そして何よりも、それは消えることのない希望、たとえ試練がどれほど大きくとも、人間は常に立ち上がり、自己を完成させ、より良い価値へと向かう能力を持っているという信念である。

予言は、その形式が古代のものであれ現代のものであれ、おそらく、私たちが未来を隅々まで詳細に知り、その結果、受動的に待ったり、不安に怯えたりするためにあるのではない。そうではなく、これらの「鐘の音」のより崇高な目的は、私たちが現在をより良く生きるためにあるのだと、私は信じている。より目覚めた意識で、自分が何をし、何を考えているかを、より意識して生きること。自らの選択に、より責任をもって生きること。そして最も重要なのは、未来がどのようなものであろうとも、主体的な心構え、開かれた心、そして清らかな良心をもって、未来に備えることなのである。

予言は、進むべき道、避けるべき危険を示してくれる古代の地図かもしれない。しかし、航路を決定し、自分自身の船の舵を取る者は、常に私たち一人ひとりなのである。

そしておそらく、最後の鐘、最も重要な鐘の音は、外部から来るのではなく、私たち一人ひとりの魂の奥深くから響き渡り、本来の善良な本性へと立ち返るよう、私たちに招く鐘の音なのである。

* * * * *

結び：二つの涙が出会う場所

再会と、静寂の対面

私はニューメキシコ州の砂漠を車で走り抜けていた。空は前回と同じ——乾いて高く、陽の光が遠くの山々に薄い黄色の層をかけ、赤茶けた大地が果てしなく広がっている。しかし、私の中では、全てが変わっていた。

車は次第に速度を落とす。教会へと続く、あの小さな未舗装の道が再び見えてきた。サボテンの一株一株、転がる小石の一つ一つ、瓦屋根を吹き抜ける風のかすかな音――全てが、古い夢のように蘇る。

私は車を止め、エンジンを切った。急ぐことはない。運転席で、しばらくじっと座っていた。両手をハンドルに置く。目を閉じた。

再会には、何か神聖なものがある。古い現場に戻ってきたジャーナリストとしてではない。長い間道に迷い、家に帰ってきた一人の子供として。

私は車から降りた。静かに。砂漠の風が、髪を優しく撫でていく。私は教会の扉を開けた――古い木製の扉が、聞き慣れた、かすかな音を立てた。

内部の空間は、初めての時と全く同じだった。古びて、静まり返り、誰もいない。くもりガラスの窓から差し込む光が、舞い上がる塵を斜めに貫き、はかない光の筋を作り出していた。

私はゆっくりと、本堂の奥へと歩を進めた。その場所に――聖母マリアの象牙色の磁器像が、木製の額と光の中で、今も静かに立っていた。

私は立ち止まった。

もはや、分析する眼差しではない。調査する視線ではない。もはや、テイラーというジャーナリストではない。手がかりを探す者でもない。

ただ私――家に帰ってきた、一人の子供。

私はそこに立っていた。黙って。聖母の顔を見つめていた――厳しくも優しく、まるで全ての時代を静かに見通しているかのような瞳。その目の下には、とうに乾いた涙の跡があった――しかし、決して忘れることはできない。

私は何も言わなかった。

何も言う必要はなかった。

私はただそこに立ち、清らかな小川のように、静寂が私の中に流れ込んでくるのに身を任せた。空間は凍りついたかのようにだった。風の音も、時間も、もはやない。

ただ、聖母がいた。

そして、私がいた。

そして、目ではなく、心で見られるのを待っている、何かがあった。

没入と共感の瞬間

私は聖母の瞳を見つめた。

分析的な視線ではなく、心の中の深い沈黙をもって。

そして――内側から堰を切ったように押し寄せる波のように――旅の全てが、突如として私の中に蘇ってきた。言葉にも、概念にもならず。ただ、早送りされるフィルムのように、目まぐるしく、重くのしかかってきた。

私は、自分が深夜のロックフェスティバルの真っ只中に立っているのを見た――そこでは音楽が叫び声のように響き、色鮮やかな照明が、空虚な眼差し、集団的な陶酔の中で体をくねらせる人々を覆っていた。

私は、自分が現代アートの展示室を歩いているのを見た――そこでは人々が、壁に貼り付けられた一本のバナナ、無造作に投げつけられた絵の具の塊、ただ下品な言葉を繰り返すだけの「作品」を眺め…それを芸術と呼んでいた。

私は、騒がしい都市の真ん中に立つ人々を見た――手に携帯電話を持ち、虚ろな目で、次から次へと短い動画、馬鹿げた画像、陳腐になるまで繰り返される冗談をスクロールしていた。

私は、善良に生きることを選んだというだけで、殴られ、拷問され、迫害される人々を見た。私は、刑場の真ん中で高く顔を上げる人々の顔を見た――彼らの眼差しに憎しみはなく、ただ一つだけがあった。信仰が。

私は、群衆を見た…名もなき人々が、それでも笑い、生き、何事もなかったかのようにすれ違っていく。まるで、警告の鐘が一度も鳴らなかったかのように。まるで、石像が一度も涙を流さなかったかのように。まるで、救済が一度も手を差し伸べなかったかのように。

私は全てを見た――理性を通してではなく、溢れんばかりの痛みを通して。分かつことなく。裁くことなく。ただ、痛かった。

そして、私は理解した。

これはもはや、私一人の痛みではない。

これは、聖母が感じておられる痛みだ。

それは、自分の子供たちが、知らず知らずのうちに火の中へと落ちていくのを見る、ある神聖なる存在の痛みだ。

それは、強いることのできない、ただ待つことしかできない、ある愛の痛みだ。静寂の中で、待つこと。

私は胸に手を当てた。心臓が強く脈打っていた。温かくも、胸を締め付けるような感情――まるで誰かが、腕ではなく、慈悲によって溶けた心で、私を内側から抱きしめているかのようだった。

私は囁いた――声にはならなかった。

「分かりました、聖母様。なぜ、あなたが泣いておられたのか、分かりました。

そして、どうか私も、あなたと共に泣かせてください——一度だけ——まだ眠り続けている、全ての魂のために…」

二つの涙

熱い一滴の涙が、私の頬を伝って流れ落ちた。

それは恐怖のために流れたのではない。後悔のために流れたのでもない。

それは、もはや私一人のものではなくなった…ある痛みのために流れたのだ。

私は自分自身のために泣いたのではない。

生きながらも、全く生きていない人々のために泣いた。

光のない世界に生まれてきた子供たちのために泣いた。

深淵に手を触れながら、まだ飛んでいると錯覚している魂たちのために泣いた。

自らの命を代償に、人類を目覚めさせようとした人々のために泣いた。

大部分は芽吹かないと知りながら、静かに種を蒔いた聖人たちのために泣いた。

神のために――聖母のために――創世主のために――その方々が無条件の愛の中で耐え忍んでおられる、無限の孤独のために泣いた…

内側から響く目覚めの鐘

どれくらいそこに立っていたのか、私には分からなかった。

ただ、最後の一滴の涙が落ちた時、すべてがひどく静かになったことだけは分かっていた。空間はもはや重苦しくない。時は止まったかのようだった。そして私の心は――幾多の葛藤、幾多の自問、幾多の理性の嵐の後――今や…不思議なほどに静かだった。

私は答えを見つけられなかった。

なぜなら、もはや問いはなかったからだ。

私は、天から響く超自然的な声を、一つも聞かなかった。

しかし、私は一つのことははっきりと聞いた…自分自身の内側から。

言葉では表現できない、あることを。

私がただこう呼ぶことしかできない、あることを。「目覚め」、と。

私は胸に手を当てた。深く息を吸い込む。

無理に立ち上がるためではない。

始めるためだ。

私は理解した——最後のメッセージは、どの本の中にもない。どの予言の中にもない。一つの象徴、一つの現象、あるいは外部の奇跡の中にもない。

最後のメッセージは——一人ひとりの心の中の囁きなのだ。

耳を澄まされるのを待っている、小さな鐘の音。

私は最後にもう一度、像を見つめた。

もう涙は見えなかった。

ただ、とても優しく、とても微かな微笑みが見えた——
あるいは、それはただ窓から差し込む光が傾いて反射し
ただけだったのかもしれない。

私は静かにお辞儀をした。

悲しみのためではない。

無限の感謝のためだ。

私は背を向けた。木製の扉を開ける。外の陽光が、かつてないほど暖かく、そして輝かしく、私の目にまっすぐに差し込んできた。

私は外へ出た。

新しい探求を始めるためではない。

新しい人生を始めるためだ。

私が理解したことを、広めていく人生を。

言葉によってではなく。

一步一步の足取りによって。

私は歩き出す――振り返らずに。

なぜなら、私は知っている…

涙は、もう流された。

鐘は、心の中に鳴り響いた。

私の旅は…今、まさに始まったのだ。

* * * * *

あとがき

もし、あなたが私と共にこのページまで歩んでくださったのなら、おそらくあなたの心の中にも、かすかではあっても、小さな鐘の音が鳴り響くのが聞こえたことでしょう。

ある方は、疑問符と共にこの本を置くかもしれません。
ある方は、一筋の涙と共に。またある方は、これまで経験したことのないような、静寂と共に。

そして、それだけで十分なのです。

私は、誰かを説得するためにこれらのページを書いたのではありません。

私はただ、かつて道に迷い、幸運にも遠くからのこだまを耳にした者として、書いただけなのです。それは、古い約束のこだま、決して失われることのなかった慈愛のこだま、そして、まだ開かれている扉のこだまです。

私たちは重大な時に生きています。そこでは、一つ一つの選択、一つ一つの思考、一つ一つの小さな念が…一人

の人間、一つの民族、さらには全人類の運命を揺るがしかねないのです。

私は、あなたが誰で、どこから来て、何を経験してきたのかを知りません。

しかし、もし私がここに一つだけ残すことを許されるのなら、それはこれです。

真実を守り続けてください。

善なる心を育んでください。

そして、憎しみのない心で、あらゆる嵐を耐え忍び、通り抜けてください。

なぜなら…まさにその三つのこと——真、善、忍——こそが、私が通り過ぎてきた全てのバラバラなピースを繋ぎ合わせる、唯一の赤い糸だからです。

もし、あなたがその糸を携えてこの本を後にすることができるようなら——私は信じています、『最後の鐘』はまだ鳴り止んではいない、と。

それは、まだ鳴り響いています。

あなたの、内側で。

— 筆者 **テイラー・リード** (Taylor Reed)

* * *

著者および THE LIVES MEDIA プロジェクトについて

著者について

テイラー・リード (Taylor Reed) は、政治、文化、社会、科学、精神性といったテーマを探求する独立系作家です。彼女の作品は真実を追求し、良心を呼び覚まし、人類の運命についての深い思索に声を与えています。

彼女の作品は、誠実さと感情の深さ、そして啓発の精神をもって記録された実際のインタビューに基づくことがよくあります。

プロジェクトについて

本書は、THE LIVES MEDIA によって出版されたシリーズの一部です。THE LIVES MEDIA は、時代を超えた響きを保存し広めることを使命とする、グローバルなビジョンを持った独立した出版イニシアチブです。日々のニュースを追いかけるのではなく、私たちは人間の意識の深くに触れることができる本を目指しています。

連絡先

- ✧ Website: www.thelivesmedia.com
- ✧ Email: editor@thelivesmedia.com
- ✧ QR Code:



同プロジェクトの他の作品

THE LIVES MEDIA による他の出版物もご覧いただけます：

- 紅塵、金光 (Red Dust, Golden Light)
 - 政界引退後：その遺産 (After Power: The Legacy)
 - 科学の黄昏と黎明 (Sunset and Sunrise of Science)
 - 紅の帳 (The Red Veil)
 - 時の以前の響き (Echoes Before Time)
 - 俗世間へ (Entering The World)
 - 最後の鐘 (The Last Bells) → 本書
 - 我々以前 (Before Us)
 - 千の人生 (Thousand Lives)
-

この度はお手に取っていただき、誠にありがとうございます。
真実を探求するあなたの旅路に、神と仏の祝福が
あらんことを。